
姉御とテストと召喚獣

rockless

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉御とテストと召喚獣

【Nコード】

N2088R

【作者名】

rockless

【あらすじ】

バカテスに坂本雄二の双子の姉、坂本優紀子を加えた二次小説略して姉テス

主人公設定

名前 坂本優紀子

フリガナ サカモトユキコ

身長 女子としては大きいほう（170くらい？）

体型 脂肪が少なく、ムキムキではないが筋肉質

いぐらい 体が大きいだから目立たないが胸は瑞希に少し及ばないくらい

性格 姉御、好きなことにはとことん凝る、少しケチ、厳しくも優しい

好きなこと 小物やアクセサリーを作ったりすること

嫌いなこと 家族や友達を傷つける事や人、自分勝手な人

成績

数学と物理が500点台で、現代国語と古文と現代社会が250点前後、英語と保健体育が300点前後で後は200点前後で総合2950点辺りの本来ならBクラス上位かAクラス下位の成績

（総合科目って現代国語、古文、英語、数学、物理、化学、日本史、世界史、現代社会、保健体育の10科目の合計点って考えてるけど問題ないよね？）

物理と数学は物作りで必要だから勉強した

現代国語と古文は作ったものに刻印などを入れてるうちに少し覚え

たから

現代社会は作ったものを売るために経済を少し勉強したため
保健体育は物を作る時に重い物を持ちたり、ハンマーを振ったりするから怪我をしないために骨や関節、筋肉についてや準備運動について勉強したから

英語は海外のアクセサリー関係の本を読むために覚えた（読むだけで話せない）

人物概要

雄二の双子の姉、雄二に頼まれてFクラスになるように振り分け試験を受け、Fクラス副代表になった

基本厳しいが最後の最後には助けてあげる姉御

喧嘩は雄二より強く、中学時代荒れていた雄二を止めるため度々実力行使をしていたので問題生徒として観察処分者になってしまった。雄二はそれを気にしているが優紀子は雄二に気にしないで欲しいと思っっている

姉として雄二やFクラスの人々を守るうとがんばっている。雄二もそれを分かっているので優紀子が不利益を被りそうなことは基本的にしないさせない

Fクラスの人、特に雄二が傷つける奴は許さない

小物やアクセサリー作りが好きで、ぬいぐるみから指輪まで形だけならある程度作れる、さらにそれを販売して小遣いも稼いでいる
母親が天然なので家事や家計の管理をしていて（しならなければいけなかった）、そのため少しケチで、自分勝手な奴には容赦しない

召喚獣について

服装 作業着に皮製っぽいエプロン

武器 ハンマー（イメージはグラーフアイゼン）ただしカートリッジシステムは無い

腕輪 ラケーテンフォームとギガントフォームに変形可能になる

ラケーテンフォームはブースター噴射で点数消費、ギガン

トフォームはヘッド部巨大化で点数消費

で、ジェット噴射時間や巨大化の倍率で点数消費が変わる。
変形だけなら点数消費しない

ラケーテンフォームはセカンドモード、ギガントフォームはサードモードと呼ぶ

オリ設定 副代表・・・そのクラスで代表の次に成績が良かった人、他のクラスの副代表は出す予定無し

00話

「姉貴・・・頼みがある」

珍しいな・・・弟があたしに頼み事するなんて・・・

「俺と一緒にFクラスになってくれ!」

文月学園・・・ここにあたしと弟の雄二が入学して2回目の4月
あたしは弟と一緒に登校していると・・・

「おはよう坂本姉弟」

校門で筋骨隆々の男に挨拶される

「おはようございます。鉄人先生」

「ああおはよう鉄人」

「誰が鉄人だ!西村先生と呼べ!」

あたしと雄二がそう返すと鉄人が怒った

「ったく・・・ほら!振り分け試験の結果だ。姉の方はどうしたんだ?いつもならBクラス上位からAクラスに届きそうなのに・・・」

「まあ色々あるんですよ」

そう言っつて鉄人が結果の入った封筒を渡してくる

わざとFクラスになったとは言えず、お茶を濁し封筒を受け取り校舎に向かう

「姉貴、どうだった？」

校舎に向かう途中で中身を見ると雄二が結果を聞いてきた

「あんたが言っつた通りFクラスだよ。しかも副代表だとき、そっちは？」

「俺も狙い通りFクラス代表になれた」

そう言っつて結果の通知を見せてくる

そこにはFクラス代表と書いてあった

「ほんとにやるのか？」

「ああ世の中学力だけじゃないっつて事を証明してやる」

00話(後書き)

感想はお手柔らかに

つと言ってもAクラス戦終了までもう書き溜めてあるから
感想や指摘を反映できないけどね

01話

「ここがFクラスか・・・酷いもんだな・・・」

「バカにはこれで十分って事だろ」

あたしの言葉に弟が返す

Fクラスは想像以上に酷かった・・・

ボロボロの教室、割れた窓ガラス、カビの生えた畳と卓袱台に座布団・・・

あたしは適当なとにかばんを置いて座った、雄二もあたしの隣に座った

さてあたしはいつものをやりますかな・・・

あたしはかばんの中から趣味の道具を出して卓袱台に並べる

「姉貴ここでも作るのか？」

「あたしの収入源でもあるんだ、どこでだってやるさ」

あたしの趣味は小物作り、ケータイのストラップから指輪、ピアス等のアクセサリーまで、素材は布やビーズから金属まで幅広く作っている。そしてそれをネットで販売をしている。さて今日は何を作りますかな・・・

「うまいもんじゃのう、坂本。ウチの演劇部の小道具も作って欲しいわい」

しばらく制作に没頭していると横から声をかけられた
この独特の言葉遣いは・・・

「秀吉か・・・お前もFクラスか？」

「そうじゃ、部活ばかりで授業は二の次じゃからのう」

木下秀吉・・・女のような顔立ちで男子から告白が絶えない男子。
あたしも雄二繋がりで多少付き合いがある

「いいけど、こつちも仕事だから製作料は取るよ」

そう言う秀吉は部長と相談してみると言って離れていった
周りを見るとだいぶ生徒がそろってきて雄二が教壇に立っていた
多分このメンバーでどうやって勝つか考えているんだろう・・・

「雄二、勝てそうか？」

「まあな・・・色々と使えそうな駒がいるから大丈夫だろ」

あたしは教壇に立っている雄二に話しかける

そのとき・・・

「すみませーん遅刻しちゃいましたー」

「さっさと座れー！このうじ虫野郎ー！」

明久・・・バカが入ってきた・・・

「酷いよ雄二！ところでなんで教壇に立ってるの？」

「俺はこのクラスの代表だから・・・担任も来てないしちょっと教壇に立ってみただけだ」

「へえ雄二がクラス代表なんだ」

「そつだ、ちなみに姉貴が副代表だ」

「あれ？どうして・・・」

「ちよつと通してもらえますかね・・・」

バカはあたしがなぜFクラスなのか聞こうとすると担任が来たようだが、先生が来て聞けずに終わる

「このクラスの担任の福原慎です。よろしく願います」

担任らしい先生が黒板の方を向き、黒板に名前を書こうとして、またこちらを向いて自己紹介をした
チヨークがないので仕方がないだろう

その後福原先生不備がないか聞いてきて、バカがあれこれ言っていたが、先生は我慢しろか自分ですうにかしるることしか言っていない。まあ申し出て通るなら教室こんな状態にしておく意味ないよな・・・

「それでは自己紹介をお願い済みます。そうですね、廊下側の人からお願いします」

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる。今年1年、よろしく頼むぞい」

一人目が立ち上がり自己紹介をする

「・・・土屋康太」

二人目が立ち上がり名前だけ言って座った

雄二が言うには土屋はあたしら女子が軽蔑するムッツリー二本入だ
そうだ

「島田美波です。海外育ちで日本語は会話ができるけど、読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は・・・吉井明久を殴る事です」

三人目の女子が立ち上がってそう言った

こんな汚い教室にあたし以外の女子がいるとはね・・・
後最後の趣味は・・・冗談だと思ったが本人のリアクションを見る限り冗談ではないらしい

それから何人が進んで

「え〜っと、吉井明久です。気軽にダーリンって呼んでくださいな

」

『ダアアーリーーン!!』

明久の番になって明久は自己紹介でアホなことを言った
そのせいで気持ち悪い大合唱を聞く破目になった

「・・・失礼、忘れてください。とにかく、よろしくお願いします」
本人も気持ち悪かったようだ

ガラッ

「あの、遅れて、すいま、せん・・・」

『えっ?』

そこへ、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。
その姿に、男子生徒全員が意外を通り越したかのように驚いた声
上がる。

「ちょうど好かったです。今自己紹介をしているところなので、
姫路さんもお願ひします」

「は、はい! あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願ひします」
「!」

担任から自己紹介を促され女子が自己紹介をする

「はいつ、質問です!」

「あ、はいつ。なんですか?」

「何でここにいるんですか?」

クラスの男子の一人が姫路にそう聞いた
姫路があたふたしながら答えている間にあたしは雄二ぬ小声で話し
かける

「雄二、良い駒が来たな・・・」

「ああ・・・これならAクラスにだって勝てるかもしれん」

雄二と話しながらも姫路の話にも聞き耳を立てる・・・

どうやら振り分け試験で熱を出して途中退席で0点になったらしい

「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ、化学だろ？ あれは難しかったな」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて」

「黙れ1人っ子」

「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

姫路の話聞いてクラスの男子が口々にFクラスになった言い訳を
始める・・・

「本当にAクラスに勝てるのか？雄二」

「無理かもしれん・・・」

02話

その後姫路が席に着くと・・・

「あのさ、姫・・・」

「姫路」

明久が姫路に声をかけようとしているところを雄二が被せて声をかけた

「は、はいっ。何ですか？えーっと・・・」

「坂本だ、坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしくお願いします」

「ところで姫路は体調が未だに悪いのか？」

「いえ、もう大丈夫です」

「そっか、よかった」

「よ、吉井君!？」

雄二と姫路が話しているとそれを聞いていたバカが話に割って入る
明久がいることに気づき驚く姫路・・・

姫路に驚かれて少し凹んでる明久、そして雄二が姫路に・・・

「姫路。明久がブサイクですまん」

つと謝った

「そ、そんな！ 目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！ その、むしろ・・・」
慌てて雄二の言葉を否定する姫路・・・なるほどね・・・

「はいはい。その人たち、静かにしてくださいね」

先生が教卓を叩いて注意してきた

バキィツ バラバラバラ・・・

『・・・・・・・・』

教卓がゴミ屑になった・・・

「えー・・・替えを用意してきます。少し待っていてください」

そう言っつて先生は気まずそうに教室から出て行きました

その後バカが雄二を廊下に連れて行った。今頃試召戦争しようとか言ってるんだらう・・・

試召戦争とは、試験召喚システムというこの学校独自のシステムによりテストの点数によって強さの決まる召喚獣を用いたクラス間の戦争で、戦争に勝つと負けたクラスと設備の取り替えを行える権利を得ることができる

「姫路さん、あたしクラス副代表で雄二の双子の姉の坂本優紀子。詳しくは自己紹介まだだからそのときで、とりあえずよろしく」

「はい、よろしく願います。坂本さん」

「女子同士だし優紀子でいいよ、弟とごっちゃんになるし」

「はい、優紀子さん。私も瑞希で良いですよ」

そう話していると雄二たちが戻ってきて、先生も戻ってきた

「それでは最後に代表、副代表、自己紹介をお願いします」

先生にそう言われ、あたしと雄二が教壇に立つ

「雄二、あたしからでいいな？」

「ああ」

「あたしは坂本優紀子、このクラスの副代表を務める。雄二とは双子であたしが姉。坂本だどごっちゃんになるからあたしのこととは基本副代表と呼ぶように。趣味は小物製作とその販売。こんなもんかな・
・よろしく頼む。じゃあ雄二」

そう言って雄二に振る

「Fクラス代表坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

「じゃあクラス内で坂本と呼ぶ場合は基本雄二で、あたしは返事しないよ。それでいいね雄二？」

「ああわかった・・・さて、皆に一つ聞きたい」

そう言つて雄二は教室の各所に視線を向ける・・・

かび臭い教室・・・

古く汚れた座布団・・・

薄汚れた卓袱台・・・

クラスのみんながつられて雄二の視線を追つて、それらの備品を順番に眺めていきました

「Aクラスは冷房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが・・・」

一呼吸おいて、静かに告げる

「不満はないか？」

『大ありじゃあっ!!』

クラスの男子ほぼ全員が叫んだ

「だろう？ 俺だつてこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そつだそつだ!』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？ あまりに差が大きすぎる！』

不満なら何で勉強して上を目指さなかったんだよ・・・

「みんなの意見はもっともだ。そこでこれは代表としての提案だが・・・」

へえ・・・もうやるのか・・・

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

03話

「Fクラスは、Aクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けようと思う」
雄二からのいきなりの提案

それに対し、クラスメイト達は当然非難轟々の嵐を巻き起こした

「勝てるわけがない！」

「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ！」

「姫路さんが居たら何もいらない！」

最低クラスのFクラスが、学年トップクラスのAクラスに戦争を仕掛ける。試験戦争は負ければ設備を1ランク落とされるのだから、更に最低になる事を考えれば自殺行為に当たるそれに、非難の嵐が吹き荒れるのは当然……

とどうか瑞希がいれば良いのか？あたしと島田はいなくても良いのか？

雄二は、その非難の嵐に怯む事もなく、堂々とした姿を崩す姿勢が見られない。ある程度治まった処で、不敵な笑みを浮かべ口を開く。

「皆がそう思うのも無理もない。だがこのクラスには、勝てる要素が揃っているからこそその発案だ。今からそれを説明してやる」

自信に満ちたその発言に、クラスはしんと静まった。不敵な笑みを

崩さないまま、雄二はある個所に視線を向けた

「おい、康太。いつまでも姫路のスカートの中をのぞいてないで、前に出てこい」

「……！！（ブンブン）」

「は、はわっ！」

恥も外聞もなく、低姿勢からの覗きこみの体勢を指摘され、必死に顔と手を振って否定する土屋。顔に付いた明らかな覗きの証拠を隠しつつ、前に出ていく

「紹介しよう。こいつがあのある有名なムッツリーニだ」

「……！！（ブンブン）」

ムッツリーニと言う名に、クラスがざわめいた

「バカな、奴がそうだと言うのか？」

「だが見る、いまだ必死に手で押さえて隠そうとしてるぞ？」

「ああ、ムッツリの名に恥じない姿だ」

ただ1人、瑞希だけは頭に疑問符を浮かべていた

「姫路の事は説明するまでもないだろう。皆だってその力は知ってるはずだ」

「えっ？わっ、私ですかっ！？」

「ああ、主戦力だ。期待している」

その容姿と共に知られている彼女の成績を考えれば、もっともな話だ

「そつだ、俺達には姫路さんが居るんだつた！」

「彼女なら、Aクラスにも引けを取らない」

「ああ。彼女が居れば何もいらない」

・・・最後の奴殴つていいよな・・・？

「木下秀吉だつているし、俺や当然全力を尽くす。」

次に、学力ではあまり聞かない物の、優等生である双子の姉と演劇部のホープという要素で有名な人物。さらに見た目のよさもあつてクラスの士気が上げるにはもつてこいの人物

そして自身もまた、代表として名乗りを上げる

「坂本つて、確か小学生のころは神童とか呼ばれてなかつたか？」

「それじゃあ、実力はAクラスレベルが2人も居るつてことかよ？もしかしたら、やれるんじゃないか？」

「ああ、なんかやれそつな気がしてきた！」

そつ、雄二は小学生のころ神童と呼ばれるくらい頭がよかつた。あ

たしも雄二には敵わなかったがまあそこそ良かった。弟に負けるのは悔しかったが、まああたしはあたしで雄二に勝ってる事があるから、特に妬んだりはしてない

「それに、吉井明久だっている」

シーーン……

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね！」

「誰だよ、吉井明久って」

「聞いたことないぞ」

「ホラ！せっかく上がりかけてた土気に翳りが見えてるし！僕は雄二たちと違って普通の人間なんだから、普通の扱いを……って、なんで僕を睨むの？土気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

あのバカは学校生活は一般の生徒と変わりないので、有名なわけでもなかった

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは観察処分者だ」

「……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

「ち、違うよっ！ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「ちょっと違うがこいつの場合それであってる」

「肯定するな、バカ雄二！」

「あの、それってどういうものなんですか？」

瑞希がそう質問した

「具体的には教師の雑用係だ。力仕事などの雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でするだけだが、召喚獣は教師がないと喚び出せないし、召喚獣が受けた痛みや疲労が召喚者に何割かフィードバックするから、文字通り罰だな」

あたしがそう説明した

「ちなみにあたしも観察処分者だ。まあ副代表つてのでわかると思うがあたしは明久ほどバカじゃない。あたしの場合は中学時代の素行不良によるものだ」

さらに追加で自分のことも言う・・・雄二の顔が少し暗くなったな・・・

「だったらおいそれと召喚できないヤツが2人いるってことになるよな」

誰かがそう言った・・・

「気にするな、罰が嫌で戦争に参加しませんじゃ副代表は務まらない。それに明久はいなくても同じような雑魚だ。雄二、どことやるのかみんなに言ってやれ」

あたしは言うだけ言って明久に口を挟ませないようにさっさと雄二に話を戻す。雄二は1つ1つクラスを落としていく性格じゃないし、この戦力なら・・・

「ああ、まずは手始めにDクラスを征服してみようと思う」
だと思った・・・

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ!!』

「ならば全員ペンを執れ！出陣の準備だ！」

『おおーっ!!』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ」
「！」

『うおおーっ!!』

このやる気を振り分け試験のときに出せば上のクラスに行けたかもしれんに・・・やっぱバカだな

04話

「明久には、Dクラスへの宣戦布告の為の使者になって貰う。無事大役を果たせ！」

雄二が明久に宣戦布告して来いという・・・

「・・・下位勢力の宣戦布告の使者って、大抵酷い目に遭うよね？」

「大丈夫だ、だまされたと思って行ってみる。俺は友人を騙す事はしない」

「わかったよ、それなら使者は僕がやる」

そして雄二がだまして明久が宣戦布告に行った

「騙されたあつ！」

明久が息を切らせながら戻ってきた

「やはりそうきたか」

「やはりってなんだよ！ やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか」

「少しは悪びれるよ！」

「吉井君、大丈夫ですか？」

「大丈夫、吉井？」

制服までボロボロにされて喚いている明久に、瑞希と島田が駆け寄った。

「あ、うん。平気だよ、心配してくれてありがとう」

「そう、良かった・・・ウチが殴る余地は、まだあるんだ」

「ああっ！ もうダメ、死にそう！！」

どうやら島田の趣味はマジだったみたいだ・・・

「・・・ほら、立てるか明久？」

「え？うん、ありがとう」

「そんな事より、今からミーティング行っぞ？」

と言う雄二の言葉に従い、あたしらは屋上へ。

そして、屋上にて。

「で、明久。時間は伝えたのか？」

「うん、今日の午後からって伝えといた。だから先にお昼ご飯だね？」

「おい明久、今日くらいはまともな飯食べよ？」

「そう思うなら、パンでもおごつてくれると嬉しいな？」

明久は食生活が狂っている。趣味に金を突っ込みすぎて食費がないなんて同情のしようがない理由だからあたしは基本こいつにおごらないし食べ物をやらない

「甘えんなバカ、何であんたにおごらなきゃいけない？・・・と言いたいところだけどDクラスにお使いやったしおかず一つやるよ」

「ありがとう優紀姉」

「あなたの姉になった覚えはねーよ」

何でこいつはあたしを姉と呼ぶんだ・・・

「吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

「いや、一応食べてるよ？」

「水と塩、または砂糖じゃ食べるとは言わねーよ。ほら雄二、食べるぞ」

瑞希の質問に明久が答え、あたしはそれに突っ込みながら雄二と自分の弁当を出す。5段重ねの弁当で1段分があたしので、残り4段

が雄二の分

「随分の大きなお弁当ですね」

「ああ、雄二が体でかいから良く食うし、あたしも女子としては体がでかいほうだしな」

「優紀子さんが作ってるんですか？」

「ああ、毎日作ってるよ」

「この量を毎日・・・」

「優紀子さんすごいです・・・」

毎日作っているという言葉に島田と瑞希が驚く・・・

「勉強で雄二に勝てないけど、こういうのは雄二に勝てるからね。でも雄二もそこそこできるよ。でも雄二は毎日弁当作らないし、まあ姉として・・・かな？」

「わしの姉上はわしのどころか自分の弁当も作ってないぞ・・・」

あたしの言葉に秀吉が返す・・・

・ 明久がもっと欲しいと言わんばかりに見てくる・・・うざいなあ・・・

「・・・あの、良かったら私が、お弁当を作ってきてましようか？」

「羨？・・・ほっ、本当に良いの!？」

そんな明久を見た瑞希が自分がつつてくると言った

なんとまあ・・・瑞希はほんとに明久のことが・・・

「はい。明日の昼でよければ」

「へえっ、良かったじゃないか明久。女子の手作り弁当なんて」

「うん！」

雄二が明久をからかうが明久は普通に頷いた・・・つてか雄二、あたしも姉だけど女子だよ・・・

「ふーん。瑞希って、随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

島田が明久だけのところを強調して言う

「あ、いえ!その、皆さんにも・・・」

「え?俺達にも?いいのか?」

「はい、嫌じゃなかったら」

島田が突つかかったせいで瑞希がみんなに作る破目になった・・・

「それは楽しみじゃのう」

「……(コクコク)」

「……お手並み拝見ね」

「まああたしと雄二は結構食べるから、あたしの分はいいよ……あと雄二の分も少し作ってくるから雄二の分も普通の一人分位でそんなに量作らなくていいよ」

「はい、ありがとうございます。優紀子さん」

材料費とか手間とか負担を減らしてあげないと……

「それじゃ雑談もそこそこに、そろそろ本題に入るぞ雄二」

「ああ、そうだな」

「気になっておったのじゃが、なぜDクラスなのじゃ？」

あたしが雄二の本題に入ろうと言うと、まず真つ先に、秀吉が疑念をぶつけた

「簡単だ。姫路に問題がない今、Eなら正攻法でも勝てるが、Dクラスは難しい。それに初陣だから派手にやって景気つけたいし、Aクラス攻略の為に必要な要素がDクラスにはある」

まあ時間かけて準備をすればCクラスだって勝てそうだけど……

DクラスにあってCクラスに無い要素があるんだろう

「つまりAクラス攻略のための第一段階って事だな」

あたしが簡単に言う

「あ、あの!」

瑞希が大きな声で雄二と明久に質問した

「ん?どうした姫路」

「えっと、その。吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話合ってたんですか?」

「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為に明久に相談されて・・・」

「それはそうと!」

明久が雄二の台詞を遮るように、大声を出す

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「負けるわけないさ」

明久の心配を笑い飛ばす雄二

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」

そう言って・・・

「いいか、お前ら。ウチのクラスは・・・最強だ」

さてほんとに雄二はFクラスをAクラスに勝たすことができるのか
ね・・・

こいつは最後の最後で情をかけたたり油断したりするからね・・・

05話

対Dクラス戦が始まった

「雄二、あたしは前線に出るぞ」

「まだ・・・姉貴はもう少し待ってくれ」

前線に出ようとするあたしを雄二が止める

「あんまり前線をギリギリにすると明久が脱走するぞ?」

「それもそうだな、なら・・・(カキカキ)よし。おい、誰か」

「なんだ坂本?」

雄二は何かをメモして近くの男子を呼んだ

「これを明久に伝えてきてくれ。頼んだ」

「了解した」

そう言っつてその男子は教室を出て行った

「なにを頼んだんだ?」

「明久に逃げたら殺すっつていわせに行かせた」

「素早い対応な事で、でも脱走したくなるような状況を変えてやれ

よ
「よ」

まあ無理そうだけど・・・
そう雄二と話した数分後・・・

「坂本！吉井からの伝言だ！」

「なんだ？」

「先生たちに偽情報をながしてくれ、と」

「そうか・・・ムツツリーニ！」

「・・・ここに（シユタ）」

こいつどこから湧いてきた・・・？

「Dクラスが呼んだのは誰だ？」

「・・・船越先生だ」

「そうか、だったら・・・（カキカキ）須川、これを校内放送でながせ」

雄二は須川という男子に何か書いたメモを渡して、受け取った須川はメモの内容を見てとてつもなく笑顔になって教室をでていった

「雄二何を書いたんだ？」

「すぐわかる」

《ピンポンパンポーン》

「お！来た来た・・・」

《船越先生、船越先生》

《吉井明久が体育館裏で待っています》

おいおい雄二・・・思い切ったな・・・

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

「須川あああー！ー！ー！ー！！！」

遠くから明久の叫び声が・・・

船越先生とは今期を逃した女性教師で、生徒に単位を盾に交際を迫ったりしている危険な教師だ・・・

「グツジョブ！須川。最高の仕事だったぜ！」

「雄二ほどほどにしなよ・・・」

まあ明久なら飯少しあげれば許すだろうけど・・・

雄二もそれをわかってやってるだろうし・・・

「さて、そろそろ敵主力部隊が出てくるころだろう・・・姉貴の出番だ」

「やっとか・・・そんじゃあたしも前線に行きますかな・・・」

Dクラス対Fクラスは下校する生徒の中で戦闘が行われていた
Dクラスの生徒をFクラスの生徒が下校する生徒に紛れて取り囲み、
一人一人倒していく……

「Fクラス吉井が……」

「Dクラス玉野美紀、サモン」

「なっ！近衛部隊！？」

ほう……雄二の読みどおり、敵の代表を含む主力部隊が出てきた

「残念だったね。船越先生の彼氏くん？」

Dクラス代表は嫌味が上手いな……

「ち、違う！アレは須川が勝手に……」

すまんな明久……あれは雄二の指示なんだ……

「ちくしょう！あと1歩でDクラスを僕の手で倒せるのに！」

「何を言うかと思えば、彼氏くん。いくら防御が薄く見えても、さすがにFクラスの人が近づいたら近衛部隊が来るにきまっているだろう？ま、近衛部隊がいなくてもお前じゃムリだろうけど」

「それは同感。確かに僕にはムリだろうね。だから……」

「優紀姉よろしく」

「だからあなたの姉になった覚えはねえよ・・・Fクラス副代表、坂本優紀子が近衛部隊全員に勝負を申し込む！サモン！」

あたしの召喚獣が出てくる・・・

あたしの召喚獣はハンマーを持って、作業着に皮製つばいエプロンをしている

Fクラス 坂本優紀子&吉井明久 現代国語 95&17

VS

Dクラス 近衛部隊 5人 現代国語 平均110x5

あたしは雄二の指示でFクラス副代表狙いで全教科95点を取った
それにしても明久はよくその点で死なないな・・・さすが観察処分者か・・・

「さて・・・副代表らしく派手にぶっ潰してみんなの士気を上げるか・・・」

「言ってくれるじゃない。Fクラスの癖に！」

あたしの言葉に近衛部隊の一人が噛み付いてくる

2対5で点数差あるけど観察処分者2人だから問題ないな・・・

あたしは近衛部隊の召喚獣の攻撃をかわしながら相手の点数を削り、近衛部隊の面々を焦らせていき、そして周りが見えなくなった近衛部隊をあたしと明久が引き付けてDクラス代表から少し離れる・・・倒してもよかつただけ、倒すと補充されて面倒だし・・・

「じゃ、あとは頼むよ瑞希」

「そうだね。姫路さん、そっちはよろしくね」

「は？」

何を言ってるんだこいつらみたいな顔すんなよ・・・

「あ、あの・・・」

「え？あ、姫路さん。どうしたの？Aクラスはこの廊下は通らなかつたと思うけど」

「いえ、そうじゃなくて・・・Fクラス姫路瑞希です。Dクラス平賀君に現代国語勝負を挑みます」

「・・・はあ。どうも」

「あの、えつと・・・さ、サモンです」

Fクラス	姫路瑞希	現代国語	339
V S			
Dクラス	平賀源二	現代国語	129

「え？あ、あれ？」

「しゅ、ごめんなさいっ」

瑞希が一撃でDクラス代表を倒し、Dクラス戦は終わった

06話(前書き)

結構思い切ってみました

06話

「くそ、まさか姫路さんがFクラスだったとは……」

Dクラスとの戦いが終わった後、Dクラス代表の平賀は打ちひしがれたようにそんな言葉をつぶやいた。まあ普通、瑞希がFクラスだなんて思わないな、でも……

「バカがAクラスには入れないが、優等生がFクラスには簡単に入るだろう。試験で手を抜けばいいだけなんだから」

可能性は0じゃない……まあ試験で手を抜くなんて普通はしないけど

「とにかく、試召戦争のルールに従い教室は明け渡す。ただ、明日で構わないか？もう遅いし」

「いや、設備の交換はしない」

雄二がそう言うと、Fクラスの面々がザワザワと騒ぎ出す

「落ち着けお前ら！」

「俺達の目標はあくまでもAクラスだ。極端に言ってしまうえば、Dクラスの設備には興味は無い。ただし……それはDクラスが俺達の条件を飲めばの話だが」

あたしがFクラスの面々を黙らせ、雄二が説明する

「じよ、条件？」

「ああ。その条件を飲んでくれるなら設備は見逃そう」

「条件は？」

平賀はどんな条件を出されるかと顔を強張らせる・・・

「なに、簡単なことだ。Bクラスのクーラーの室外機、あれをこっちが合図したら壊してほしい」

「それでいいのか？」

意外な条件で平賀が呆ける・・・

「ああ。注意は食らうだろうが、設備が新学期1日目でボロいFクラス教室になってクラスの連中に睨まれるよりはいいだろ？」

「・・・わかった。その条件、飲もう」

その言葉を聞いて、雄二はニヤリと笑った・・・

次の日、補給試験を午前中に済ませ・・・

「よし、昼飯にしよう。姉貴どこで食う？」

「今日も屋上でいいだろ」

雄二が飯にしようと言ってくる

「そういえば、瑞希、昨日言ってた弁当作ってきた？」

「はい優紀子さん、作ってきましたよ」

「じゃあ屋上でみんなで食べるぞ。秀吉と土屋も行くか？」

あたしは昨日のメンバーを呼ぶ

「せっかくじゃから、ご相伴に預かるうかの」

「……(コクコク)」

「むー……っ。瑞希って意外と積極的なの……」

島田が瑞希の弁当を覗む……明久が瑞希に取られるのが面白くないって顔だな……

「そうか。それならお前らは先に行っててくれ」

「雄二、どこか行くの？」

明久が雄二に聞いた

「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

「いやあたしが行くよ。島田も屋上に行きな。明久取られるよ」

野も物を買いにいく雄二についていこうとする島田をあたしが止めてからかってみる・・・

「何言ってるのよ坂本！べ、別にウチは吉井なんか・・・」

やっぱりこいつも明久が好きなのか・・・

「わかったわかった、じゃああんたも来な。それと、自己紹介の時あたしを坂本と呼ぶなって言ったろ・・・まあ瑞希にも言ったがFクラスの数少ない女子同士仲良くしようって事であたしのことには優紀子って呼びな」

「わかったわ優紀子。ウチのこと美波で」

雄二について行ってあたしと美波が教室から出て行き・・・

「きちんと俺達の分をとっておけよ」

「大丈夫だってば。あまり遅いとわからないけどね」

「そう遅くならないはずだ。じゃ、行ってくる」

教室の入り口で雄二が明久たちにそう言った

「それにしても、そうかいそうかい・・・美波は明久が嫌いって・・・」

「嫌いとは一言も言ってないんだけど」

雄二について行きながらあたしは美波に聞こえるようにつぶやく・

「じゃあ好きと?」

「・・・」

美波が赤くなって顔を背けた・・・確定だな

雄二とあたしと美波が屋上に着くと、土屋が倒れていて、明久と秀吉が青い顔をして瑞希の弁当を見ていた

「おう、待たせたな。へー、こりや美味そうじゃないか。どれどれ?」

手に飲み物の缶を抱えた雄二が、瑞希の弁当に手を伸ばす。そのうち卵焼きをつまんで、一口

「ゴハアツ!!」

雄二は食べた途端、缶をぶちまけて倒れた。

あたしと美波が雄二に駆け寄る

「雄二?!」

「さ、坂本！？ちょっと、どうしたの？」

美波が雄二に聞く……

「あ、足がつ……」

雄二の顔を見て嘘をつこうとしているのがわかった

「雄二、正直に言え」

雄二にあたしが本当のことを言えという

「姫路の料理……」

雄二は短く言った

「瑞希……卵焼きは何を入れた？」

「えっと、クロロ酢酸を……」

パン……

あたしは瑞希の頬を引っ叩いた……

「なっ！」

「ちょっと優紀子！」

「優紀姉！」

秀吉が驚き、美波と明久があたしを咎めるように呼んで睨んでくる。

・

「優紀子さ、ん・・・？」

「瑞希、お前はそれがどういふもので食べれるものかわかった上で入れたのか？」

いきなりのことですら呆然としている瑞希にあたしは問いかける

「ちよ、優紀姉！」

「黙れ明久！あたしはお前の姉じゃない。お前はいつもカロリーがとか言ってる癖に食べ物無駄にした瑞希をかばうのか？」

「そ、それとこれとは・・・」

「じゃあ食うのか？この毒物を」

あたしは毒物を強調して言う

「瑞希、料理は自己満足で好き勝手するものじゃない・・・ただ不味いだけならあたしも怒りはしない。瑞希、お前は材料を作ったくれた生産者の人たちのことを考えて料理をしているか？例えば雄二が食べた卵焼き、卵を出荷した養鶏場の人に胸張ってこの卵焼きを作ったと言えるか？言えるならそれを食べる」

これはあたしが物を作るときに思うこと

作ったものが大事に使われて欲しい

別に作り手ならみんなそう思うであろう普通のこと

「・・・」

瑞希は黙って動かなかった・・・

「次から不味くてもいいから食べれるものを作れ。今日はあたしの弁当分けてやるから」

あたしらは重い空気の中昼飯を食べた

06話（後書き）

作り手と生産者って違うだろうけど

出したものを粗末にされるのは嫌だろうと思って

こういう感じになりました

感想が怖い・・・

07話

瑞希はあれから暗いオーラを出していて美波が励ましている
あたしは特に何も言わず弁当を食べる

復活した雄二たちと弁当を食べ終えて・・・

「さて次の試召戦争の話をするぞ」

雄二がそう話を切り出した

「次はどことやるの？」

「次はBクラスだ」

「Bクラス？目標はAクラスじゃないの？」

明久が次はどこかと聞き、雄二の答えにさらに理由を聞く

「ああ。Bクラスにも、Dクラスと同様に俺達がAクラスに勝つための要素がある。俺たちじゃ真正面からぶつかったところで、勝ち目はないからな」

Aクラスは当然、この学園選りすぐりのエリート共。試召戦争は代表を倒す事が勝利であるが、Aクラス代表イコール学年首席。Fクラスの戦力では、束になつても返り討ちに遭う事は容易に想像がつく

「なら、どうするのじゃ？」

「Bクラスとこの戦争のシステムを使って、Aクラスとの戦争は一騎打ちにする」

「システム？」

「ああ。下位クラスが負けたらどうなるか知ってるか明久？」

「え！？えーっと・・・」

秀吉の疑問に雄二が答え、明久がまだわかってないようで雄二に話を振られてアタフタする

「話が進まないからあたしが答えるが、負けたらランクを1つ落とされるんだ」

雄二の問いにあたしが答える

「あつ、そうそう。で、下位クラスが勝ったら設備を入れ替えが出来るんだっただね？」

「そうだ。そのシステムを利用して、Bクラスに交渉する」

「つまり、設備交換免除を条件に、BクラスにAクラスへ宣戦布告させて、そのあとでFクラスが連戦を匂わせる通告をし、一騎打ちの条件を呑ませるってことだ」

「そういうことだ。なんにせよBクラスに勝てなきゃここでお終いだ、気合を入れていくぞ」

つと雄二が話を締め・・・

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに行って宣戦布告して来い」

「断る。雄二が行けばいいじゃないか」

明久は明らかに警戒している

「全く・・・じゃあジャンケンで決めるぞ。負けた方が行くってことでいいな」

「OK。乗った」

「ただのジャンケンでもつまらないし、心理戦ありでいこう」

雄二がそう提案し・・・

「わかった。それなら僕はグーを出すよ」

明久もその提案に乗り・・・

「そうか。それなら俺は・・・お前がグーを出さなかったらブチ殺す」

「ちよっ・・・！何その心理戦！？」

いや普通の心理戦だろ・・・相手を動揺させるという基本中の基本

だな

「行くぞ、ジャンケン」

「わああっ！」

明久が自分で言ったとおりグーを出し、雄二がパーを出した

「決まりだ、行ってこい」

「絶対に嫌だ！」

明久が必死に拒否している

「明久、男が一度決まったことにグズグズ言うな、女子から嫌われるぞ」

あたしが腹を括れと言う

「Dクラスの時みたいに殴られるのを心配しているのか？」

「それもある！」

「それなら今度こそ大丈夫だ、保証する。Bクラスは美少年好きが多いらしい」

「そっか。それなら確かに大丈夫だね」

「でも、お前不細工だしな・・・」

雄二が安心させるように言った後、不安にさせるようにつぶやく

「失礼な！365度どこからどう見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「一週回ってあれ？って思って、あと5度見ないと気付かないって事か？」

雄二、秀吉、あたしの順に突っ込みを入れる

「三人なんて嫌いだっ」

「とにかく、頼んだぞー」

雄二の言葉を背中に受けて、明久は校内に走り出した。

放課後・・・

「・・・言い訳を聞こうか」

「予想通りだ」

ポロポロになった明久が戻ってきて雄二を睨む

「くきいー！殺す！殺し切るーっ！」

雄二に食いかかる明久を見ながら、あたしは昼の1件以来暗い瑞希のところへ

「瑞希……」

「優紀子さん……」

瑞希に話しかける。瑞希の顔をまだあたしが叩いた跡が少し残っていた

「さつきは引つ叩いて悪かったね……あたしも物を作ったりして
るから作り手の気持ちを考えるとどうしても許せなくてね。それに
……」

「……？」

あたしはまだ雄二に襲い掛かっている明久に視線を向ける

「大切な人や好きな人には嘘じゃなく本音でおいしいって欲
しいだろ？」

「そうですね……もう一度料理について勉強しなおします」

ここで教えてと言わないのは優等生としてと女の意地ってところか
……
気弱そうに見えて案外芯がしっかりしてる……

「じゃあたしは帰るよ、また明日」

「はい、また明日」

そしてあたしは教室を出た

「叱つたり諭したり相変わらずの姉御っぷりじゃのう副代表」

「秀吉か・・・相変わらずか・・・お前も相変わらず女と間違われるな・・・」

廊下を歩いていると秀吉に声をかけられる

「わしは今更つて感じじゃな・・・慣れたくないが慣れた」

「ならあたしも今更だ。それに・・・」

「それに？なんじゃ」

「なんでもない。また明日な」

そう話を切り上げてあたしは秀吉と別れた・・・

それに・・・姉御として頼られるのも悪くない・・・なんてね・・・
明久には姉と呼ぶななんて言ってるのにな・・・

08話

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

翌日、教壇に立った雄二が教卓に手を置いてクラスメイトの方を向いている

あたしは雄二の隣に立っている

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、やる気は充分か？」

『おおーっ！』

やる気充分、Dクラス戦同様、相変わらず高いモチベーションだ

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ！』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希と姉貴に指揮を取ってもらおう。野郎共、きつちり死んでこい！」

「が、頑張ります」

「任せな雄二」

『うおおーっ！』

瑞希と一緒に戦えるとあって、前線部隊の士気は今や最高潮だ
あたしは・・・どうなんだろうな

キンコンカンコン

昼休み終了、そして開戦のベルが鳴り響く

「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー』

Fクラスの盛大なかけ声とともに、Bクラス戦が幕を開けた

第二回試験召喚戦争

Bクラス VS Fクラス

開戦

「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れて居るぞ！」

前線指揮は瑞希とあたし、先陣を切るは明久と秀吉

Bクラスはまず、10人前後に出してきた。対しFクラスはほぼ総力
今回は廊下を制することが先決ともあり、勢いが大事だからだ・・・
が

Bクラス 生徒A 総合 1943

VS

Fクラス 近藤吉宗 総合 764

Bクラス 生徒B 数学 159

VS

Fクラス 武藤啓太 数学 69

Bクラス 生徒C 物理 152

VS

Fクラス 君島博 物理 77

Dクラスとは格が違い、ほぼあっさりと大半が押し切られてしまった

「あたしが出る、やられそうな奴は下がれ！瑞希、指揮を頼むぞ」

「はい！」

瑞希に指揮を任せて、あたしも戦闘に参加する

Fクラス 坂本優紀子 総合科目 2880

「なんだあの点数！ウチの代表並みじゃないか！」

「姫路以外にも上位成績者が・・・」

Bクラスの生徒が驚く

「なんだもなにもこれがあたしの本気だ。かかってきな！」

あたしは向かってくるBクラスの生徒を次々に補習室送りにしていく

「Bクラス、真田由香。坂本優紀子に数学勝負！」

「かかってきな！」

Bクラス 真田由香 数学 166

VS

Fクラス 坂本優紀子 数学 497

「な、何よその点数！」

「物作りに計算は必要不可欠なんだ。残念だったな」

あたしは相手の召喚獣を文字通りぶっ潰した

『床にクレーターができてるぞ?!』

『さすが副代表だ!』

Fクラスの面々がそう言う

やりすぎたな・・・後で怒られるかも・・・
でも土気が上がったし、まあいいか・・・

「瑞希そろそろ指揮交代しようか？」

「はい、優紀子さん」

あたしと入れ替わり瑞希が前に出る

「来たぞ、姫路瑞希だ！」

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です！Fクラス姫路瑞希さんに、数学勝負を申し込みます！」

「律子、私も手伝う！」

瑞希が現れた途端、Bクラス陣営は表情を引き締める

あたしが倒した分は補充されたとはいえ十数人程度の戦力しかないのに、2人がかりで勝負してきた

Fクラス 姫路瑞希 数学 412

VS

Bクラス 岩下律子&菊入真由美 数学 189&151

「あつ、腕輪！」

「腕輪？・・・それって確か、何点かオーバーしたら、特殊能力が付加されるって言う？」

「まあ、姫路ならおかしくはないか」

腕輪とは総合科目以外の教科で400点を超えた場合につくもので、一人一人違う特殊能力を発動させることができる

瑞希の召喚獣が、腕輪を付けた左腕を向けると、腕輪から光線が放たれる

そのうち1体を炎でつつみ、もう1体も大剣でなぎ払い、補習室送りにした

「よし、このままBクラス教室まで押し切れ！」

「み、皆さん、頑張ってください！」

『おおーっ！』

あたしと瑞希の活躍でFクラスの士気も大幅アップ、一気にBクラスを押ししていく……

でもなんだろう……なにか嫌な予感がする……

「瑞希！ちよつと指揮頼む！明久、秀吉も瑞希をサポートしてくれ」

「どうしたのさ優紀姉」

「何か嫌な予感がする……あたしは一旦教室に戻る」

あたしは駆け足で、Fクラスへ戻る

教室の扉を開けるや否や、そこに広がっていた光景は……

「やりやがったなクソヤロウ……」

穴だらけの卓袱台に、へし折られたシャーペンと消しゴムという光景だった

「姉貴、どうし……やられたな……」

教室の入り口でその光景を見ていたあたしにどこかから戻ってきた雄二が声をかける

「雄二、どこへ行っていた」

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印のために、教室を

空にしていた」

「協定？」

「ああ。4時までには決着がつかなかったら、戦況をそのままにして続きは明日午前9時に持ち越し。その間、試召戦争にかかわる一切の行為を禁止するってな」

「承諾したのか？」

「ああ、した」

こちらの作戦通りに事が進めば、そのころには教室へ押し込め、明日その戦況から始められる
Fクラスとしては、好条件ではある

「確かに、それなら瑞希の体力を心配しなくていいから、あたしらとしては都合が良い……が、なんか引つかかるな」

「ああ。確かにあの根本がそんな協定を結ぶなんて引つかかるが、今回の作戦の半分は姫路の個人戦力がカギとなる以上、乗った方が勝率が高くなる事は事実だ……一応、用心してくれないか？」

「わかった。あたしは前線に戻るから雄二は筆記具をどうにかしてくれ」

ここまでやっておいてこれで終わりなわけが無い……前線でも何か起こってるかも……

あたしは急いで前線に向かった

09話

「総員突撃ーっ！」

「どっしてよっ?!」

前線に向かっていていると明久と美波の声がした

「指揮関係で揉めてるのか？」

戦力ギリギリなんだから揉めんなよ・・・

「あの島田さんは偽者だ！変装している敵だぞ！」

何だこの状況・・・

美波がBクラスに人質にされてるが、何故か明久は偽者だと言って美波諸共突っ込ませようとしているところだった

「おい待てっ！こいつ本当に島田だっ！」

「黙れ！見破られた作戦にいつまでも固執するなんて見苦しいぞ！」

Bクラス2人組みはかなり狼狽していた

「サモン」

その隙にあたしは二人に奇襲を仕掛ける

捕虜をいちいち助けるのは面倒だが倒されても士気が下がるし・・・

点数を消耗していたみたいでBクラス2人組みは簡単に倒せた

「美波、大丈夫か？」

「ええ、ありがとう優紀子」

無事のようにだ・・・ただとてつもない形相をして明久を睨んでいる

「優紀姉！気を付けろ！そいつは偽者だ！」

なんて言う明久。美波の怒りのボルテージが急上昇していく・・・

「ウチは『吉井が瑞希のパンツを見て鼻血が止まらなくなった』って聞いて本っ当に心配したのに、吉井はウチをこんな扱いするんだ？」

そんなくだらない理由でつかまったのか・・・

「え？まさか本物・・・?!」

驚愕を顔に表す明久、その内容でなんで本物だとわかる・・・？

「覚悟は出来てるでしょうね・・・？」

「まさか、僕は最初から本物だときつい、何をするんだ！島田さん！そこは曲がらなくあああああああああ！」

美波が明久に関節技を仕掛けている
遊んでる暇があったら戦えよ・・・

「はいはい美波その辺にしときな。戦闘中だよ。それにこれは戦争でこつちの戦力はギリギリなんだ、あたしだって偽者って事にして突っ込ませたかもしれないよ」

「なっ！ウチがやられてもよかつたの?!」

「別にやられても補習受けるだけなんだからいいだろ・・・さて、雄二が協定結んだから今日は4時で終いだ。時間までしっかり戦え」

「わかつたわよ・・・」

4時になって、協定により休戦になった

あたしらは今教室に居る。あの後、あたしらは作戦通りBクラスの教室前まで攻め込んだ

「・・・Cクラスに不穏な動きあり」

雄二の指示で諜報に徹していた土屋が情報を持って現れた

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

どうもCクラスが試召戦争の準備を始めているらしい

「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラス使って攻め込ませるぞ、とか言っただけでやれば俺達に攻め込む気もなくなるだろう」

「それに、僕らが勝つなんて思ってもいないだろうしね」

雄二と明久がCクラスへの対応の話を進めていた

協定の内容に試召戦争に関する一切の行為の禁止とあったけど雄二はバレなきやいいとか思ってるんだろうな・・・

「よし、さつさと協定結びに行くか。早くしないとCクラスの代表が帰りがねない」

「そうだね」

雄二の言葉に立ち上がる面々・・・

「ああ、秀吉は念の為にここに残ってくれ」

「ん？なんじゃ？ワシは行かなくて良いのか？」

「お前の顔を見せると、万が一の時の策に支障があるからな」

万が一の時・・・Cクラスとの交渉決裂した時って事か

「よくわからんが、雄二がそう言うのであれば従おう」

「じゃあがんばれよ」

あたしは座ったまま雄二達に言う

「あれ、優紀姉来ないの？」

「あたしも秀吉とここに残るよ」

「わかったじゃあ行ってくる」

あたしが行かないと言うと雄二が何も聞かず了承して明久達と教室を出て行った

2人きりになつた教室・・・

「もういいんじゃないかのう、優紀子」

秀吉の一言であたしは体から力が抜けていくように息を吐き、畳に横になった

「召喚者へのフィードバック、きつそうじゃの」

「雄二も気づいていただろうな・・・弟に気を使わせるなんて姉失格だな」

それにこいつにもばれてたし・・・

明久と違って点数の高い観察処分者のあたしは明久の召喚獣よりも性能が高い分フィードバックもそれなりにきつい・・・攻撃も威力が高い分腕に来る反動が強いし、移動も速く動ける分足に来る疲労も大きい

「そんなになるまでよおがんばるのお？」

「そりゃ・・・副代表だからな・・・」

「嘘じゃな」

「うっ即答か・・・」

「つたく、こいつに嘘は通じないな・・・」

「っで本当はどうしてじゃ？」

「言わないとだめか？」

「言いたくないのなら別にいいがの」

「わかった、まだ言いたくない・・・」

「なら言ってくれらるまで待つかの」

「こいつもあちこち気を使って苦労人だね・・・
ま、あたしが言えた身じゃないが・・・」

10話

対Bクラス戦2日目

「今から昨日言った作戦を実行する」

「Cクラス対策のだな」

昨日は結局Cクラスと協定を結べなかった。Bクラスの罫でCクラスの教室で待ち伏せされてたらしい

「ああ、その為には、秀吉にこいつを着てもらおう」

現在午前8：30、Bクラスとの戦争再開にはまだ早い時間
教壇に立ち、そう宣言した雄二は文月学園の女子制服を取り出した

雄二・・・それをどこで手に入れた？そして普通に持ち歩くな
あたしは姉としてお前の将来がちょっと心配になったよ・・・

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

「いやいや秀吉・・・そこは構いなよ・・・」

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおう」

秀吉は双子で、パツと見では家族ですら見分けがつかない程似ている姉がいる。そしてその姉もこの学園にいて、Aクラスの上位に入っている

「と言う訳で秀吉、用意してくれ」

「う、うむ・・・」

雄二から制服を受け取り、その場で着替え始める秀吉
明久達Fクラス男子は、その着替えの光景に絶句

「よし、着替え終わったぞい。ん？皆どうした？」

「さあな？俺にもよくわからん」

「おかしな連中じゃのう」

秀吉が男子達の様子に疑問符を浮かべ、雄二が知らんと言っ

そして、Cクラスの教室の近くまで着いた。先を歩いていた雄二が
振り向き

「さて、ここからは済まないが1人で頼むぞ、秀吉」

Aクラスの木下優子があたしらと一緒にいるのは不自然なため、C
クラスから離れた位置で様子を窺うことになった

「気が進まんのう・・・」

「姉に怒られたら、あたしが無理矢理やらしたとか言っていないから」

「わかったのじゃ・・・」

そう言つて秀吉を送り出す

やっぱ秀吉は乗り気じゃないな・・・当たり前か、あたしも雄二に成り代わつて何かする気にならないし・・・

秀吉がCクラスの扉を開き、まずは一言

「静かになさい、この薄汚い豚ども!」

・・・えっ?

「え!?秀吉の姉さんって、あんなふうなの?」

「秀吉がやってるってことはそうなんだろう・・・」

あたしの疑問を明久が口にして、雄二がそれに答えた

「な、なによアンタ!」

「話しかけないで!ブタ臭いわ!!」

何この理不尽キャラ・・・

「あんだ、Aクラスの木下ね?ちょっと点数良いからって、良い気になるんじゃないわよ!何の用よ!」

「私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの!増してブタ臭い貴女達なんて、豚小屋で十分だわ!」

「なっ!言うに欠いて、私達にはFクラスがお似合いですって!!」

「？」

あたしから言わせれば豚小屋のほう綺麗だと思っな・・・
食用豚育てるのにカビの生えた設備は使えんし・・・

「手が汚れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相
応しい教室に送ってあげようかと思うの。覚悟しておきなさい。近
いうちに、私達が薄汚いブタの貴女達を始末してあげるから！」

そう言い残し、靴音を立てながら秀吉はCクラスの教室を出て来る
それと同時に、Cクラスから代表のと思われるヒステリックな声が
響き渡る・・・

「Fクラスなんて相手にしてられないわ！Aクラス戦の準備を始め
るわよ！」

作戦成功だな・・・

「上手くいったな。流石は根本の彼女、ヒステリックな事で」

「はあ？根本ってBクラス代表の？へえそうなのか・・・なるほど
なあ・・・ペアリングでも送ってやるか」

思いつき趣味の悪いデザインで・・・やめとこ勿体無い・・・
にしてもあんなのどこがいいんだ？

あたしら4人はFクラスへ戻る

そして午前9時、BクラスVS Fクラス、再開

「ドアと壁をうまく使うんじゃ！戦線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が飛ぶ中での、右側と左側の扉でぶつかりあうBクラス
教室攻略戦

雄二の指示は、教室内に敵を閉じ込めるの一点であり、戦況的には
そこそこ順調

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！補給も念入りに行え！」

なぜ秀吉が指揮しているのかと言えば、本来指揮する筈の瑞希が機
能していないためだ

何か気懸かりでもあるのか？とあたしが聞いても答えなかった
何かあったんだろうと思ったが、瑞希だけにかまってるほど余裕は
ない・・・とりあえず、こんな状態じゃまともに指揮もできないか
ら秀吉に代わりをやらせている

「ごめん、遅くなった！」

明久が、援軍として数人を率いて戦線へやってきた

「姫路さん、どうかしたの？・・・」

明らかに様子がおかしい瑞希に明久が声をかける

「なっ、なんでもないんですっ」

瑞希はあたしの時と同じように突っぱねる。だけど、そのあからさまに動揺した態度は隠し切れていない。明久もそれは勘づいており、真剣な表情で

「そうは見えないよ。何かあったら話してくれないかな。それ次第では作戦も大きく変わるだろうし」

「ほ、本当になんでもないんです！」

だが、言葉とは裏腹に苦しそうな顔をしている・・・絶対何かある・・・

「右側出入り口、押し戻されています！」

「戦力が足りない！援軍を頼む！」

味方から支援の要請が来る・・・

「瑞希、指揮ができないならせめて戦いな！」

あたしがそう言って戦闘に送り出そうとする

「はいっ！あっ・・・」

動こうとしたが、急に動きを止めて俯く

何かあるのかと明久は、瑞希の見ていたほうを向き・・・何かに気づいた

「あれは・・・！」

「どうした、明久？」

あたしは明久の視線を追う、根本の手に握られている封筒に気がついた
それを見て様子がおかしくなった事を考えるにあの封筒は瑞希のものだろう・・・

「姫路さん」

「は、はい・・・？」

「具合が悪そうだから、あまり戦線に加わらないように。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気を付けてもらわないと」

明久がなだめるように瑞希を戦線から外そつと説得
あたしも瑞希の頭に手を置き・・・

「今まで気づいてあげなくてごめん・・・」

優しくそう言った

「秀吉！ここを任せる！何が何でも戦線を維持しろ！」

「わかったのじゃー！」

「明久、行くぞ」

「了解！」

前線の指揮のすべてを秀吉に任せあたしと明久は雄二の所へ向かった
向かう途中・・・

「面白いことしてくれるじゃないか、根本君」

明久がそんな事を言った

「へえ・・・漢らしい顔付きもできるじゃないか」

「ホレそう?」

「どんだけ漢らしくても趣味に金突っ込みすぎる男は嫌だね。あ
たしを落としたいなら金の管理をしっかりとしな。でもまあ、瑞希や美
波だったら落ちたかもね」

さあて、そんなことよりどうあいつをぶっ飛ばすか・・・

覚悟しろよ根本・・・あたしの仲間に出したことをたっぷり後
悔させてやるからな・・・

11話

「雄二！」

「どうした明久。脱走か？それならチヨキでシバくぞ」

Fクラス教室にて

周りが回復試験を受けている中で、ノートを広げて戦力分布を書き記す雄二がこつちを見ずに言った

「雄二、話がある」

「姉貴？・・・とりあえず聞こうか」

雄二があたしの声を聞いてやっと顔を上げた

「根本君の着ている制服が欲しいんだ」

「・・・お前に何があつたんだ？」

まあ今の明久の言葉だとそう思うな・・・

「こつという事だ雄二、このまま勝って、はいさよならじゃ色々されてるのに割りに合わねえだろ。だから身包みぐらい剥いでやるうつてことだ。そうすればウチのクラスの怒りもちよつとは収まるだろ」

「確かにな・・・よし、良いだろう」

「それともう一つ・・・理由は言えないが姫路を前線から外しても

「られないか？」

明久が瑞希を外してくれと言うと雄二の顔が曇る

「っ！・・・理由を言えない事は置いておくとしても、どうしてもか？」

「そうだ、雄二あたしからも頼む・・・」

渋る雄二にあたしからも頼む

「・・・条件がある」

「何だ？」

「姉貴達で姫路がする予定だった任務をやれ。どうやっても良いから、必ず成功させろ」

瑞希のやる予定だった任務って確か・・・

「敵本陣、代表に奇襲をかけること。時間は午後3時、遅れは許さない」

「皆のフォローは？」

任務の内容を聞き、あたしがフォローはあるのかと聞く

「ない。しかもBクラスの出入り口は今の状態のままだ」

あたしは瑞希ほど成績が高いわけじゃないから特攻はできないし・・・

・
出入口以外から入る・・・窓は土屋が使うから・・・

「どうやってもだな？雄二」

「そつだ、どうやってもだ」

はあ・・・そういうことか・・・

「・・・難しいね。もし失敗したら？」

明久が険しい顔をして聞く・・・そんなの決まってるんだろ

「失敗させるな。必ず成功させる」

こいつが失敗した時の事を考えてると思うか？

「それじゃ、うまくやれよ」

「え？どこか行くの？」

そして、雄二が立ち上がり教室から出て行くこととする
雄二の作戦がわからない明久が質問する

「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな」

例の件・・・エアコンの室外機の破壊・・・

「明久、行くぞ」

そう言ってあたしは明久を連れて教室を出た

「優紀姉、まだどうやってやるか浮かんでないんだけど」

「どつやってでもいいって言われたんだ。観察処分者のみができる最高の奇襲をしてやるんじゃないか」

「え？ああ、そういうことか・・・痛そうだなあ」

「でもうまくいけば、特等席でクソヤロウの最期を見れるんだぜ」

「まあ、それならがんばってみようかな」

そう話しながら、あたしはある所に向かった

午後2時50分

「・・・2人とも本当にやるのですか？」

「もちろんです」

「雄二の指示を無視しまくるこいつに焼きを入れないと気がすまないんでね」

立会いの先生が困惑している

それもその筈、試召戦争中に同じクラスの人同士が1対1の決闘を

しようとしている
しかも場所はDクラスで

「でもそれならDクラスでやる必要は・・・」

「あたしらは観察処分者だから古い旧校舎で戦ったら校舎が壊れる
けどいいのか先生？」

「・・・わかりました。召喚を承認します」

「「サモン！」」

あたしと明久が召喚獣を召喚する

Fクラス 吉井明久 数学 43

VS

Fクラス 坂本優紀子 数学 514

昨日Cクラスから帰ってきた美波と回復試験を受けたから昨日より
点数が上がっている

あまりの点差に先生も開いた口が塞がらないって感じが

「あたしに一撃入れることができたなら勝ちにしてやるよ」

明久が一人で壁抜きをやらしてくれと頼んできたので怪しまれない
ようにそう言う

間に合わなかったらあたしが本気でやれば一撃で抜けるだろう

「行け！」

明久の召喚獣があたしの召喚獣に殴りかかってくる・・・

「当たるか、よっ!」

ドンッ

あたしはギリギリでかわして、明久の召喚獣の左パンチが壁に当たる

「ぐっ・・・まだまだあー!」

ドンッ

右でまた殴りかかるが、あたしがまたギリギリで避ける

「つう・・・」

その後もあたしは明久の攻撃を避け続けた

2時59分

「時間切れだ明久・・・あたしも暇じゃないんでな・・・一撃で決めてやる」

あたしは召喚獣の腕輪を起動させた・・・

「セカンドモード!」

あたしがそう言うとあたしの召喚獣の持っていたハンマーのヘッド部が変化する

片方から鋭い錐が出てきて、もう片方がブースターに変わった

それを見ていた根本は小さく悲鳴を上げる
そして根本の後ろに・・・

ダンッ　ダンッ

ロープで屋上から降りてきた保健体育の教師と土屋が壊れてない窓
から入ってきて・・・

「・・・Fクラス土屋康太」

「キサマはっ・・・?!」

「・・・Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

「ムッツリイーニーーッ!」

「・・・サモン」

根本の召喚獣を一撃で葬った・・・

11話（後書き）

Bクラス奇襲については書きたいがまま書いたので
無茶苦茶になってるかも・・・
すみません

12話

「優紀子に明久、随分と思いつた行動に出たのう」

「うう・・・痛いよう・・・」

「ピーピー泣いてんじゃねえよ明久」

痛みのフィードバックで、両手を抑えて呻いている明久
召喚獣でやったとは言え、鉄筋コンクリートを殴り続けたフィード
バックは、かなりきついだろう

あたしも反動のフィードバックで腕が痺れてうまく力が入らない・
・それを気づかれないために手をポケットに入れている

「後のことを何も考えず、自分の立場を追い詰める、男義溢れる素
晴らしい作戦じゃな」

「・・・遠回しに馬鹿って言ってない？それにこの作戦考えたの優
紀姉だよ」

「秀吉いー？誰がバカで男義溢れるだつて？」

「いやっ！ちがっ！これはじゃのっ・・・」

秀吉をジト目でからかうと見事にテンパった

「はぁ・・・まあいいよ。あたしもバカだと思っし、明久も漢を見
せたと思っし」

それに腕が痺れてるから何もできないし

「余計なことを考えない奴ほど強いんだぜ、バカでいいじゃねえか」

「違うない」

雄二の言葉にあたしは頷いた

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談と行くか。な、負け組代表？」

「・・・」

根本は放心状態で雄二を見上げる

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

雄二のBクラスからしてみれば素敵な提案に教室がざわつく。Fクラスにしてみれば、Bクラスの設備でも十分すぎるので、Fクラスの連中はやや不満げだ。しかしそれも想定内だ

「黙れお前ら！」

「前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない。ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるうかと思う」

Dクラス戦のときのようにあたしが騒ぐ奴らを黙らす
そして雄二が理由を説明する

「・・・条件はなんだ？」

「条件？それはお前だよ、負け組代表」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やって貰ったし、正直去年から目ざわりだったんだよな」

と、普通に聞けば雄二の言葉は酷い言い様だが、あいつはそれだけの事をやってきた

その証拠にFクラスどころか、Bクラスの面々も誰一人言い返そうとしない

「そこで、取引だ。Aクラスに行って、試召戦争の準備が出来てると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやっても良い。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争が避けられないから、あくまで戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「・・・それだけでいいのか？」

そんな訳ねえだろ

「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃そう」

そう言って雄二が取り出したのは、秀吉の変装の為に用意しておいた女子制服

だからそんなものを持ち歩くなよ・・・

「ば、バカな事を言うな！この俺が、そんなふざけた事を！」

「Bクラス生徒全員で、必ず実行させよう！」

「任せて！必ずやらせるから！」

「それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！」

根本が拒否するがBクラスの面々がそれを許さない……

「んじゃ、決定だな」

「くっ！よ、寄るな！変態くふうっ！」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう。ありがとう」

根本の腹に拳を叩きこんだのは、Bクラスの男子。雄二もその変わり身の早さには驚いてる

「では、着付けに移るとするか。明久、任せたぞ」

「了解っ」

雄二は自然な流れで明久に着付けを任せる。これで明久が言った根本の制服が欲しいという要望がかなえられる……

別にあたしはクソヤロウの裸なんざ見たくないし、明久の手に制服が渡ればいい……

明久が根本の制服を手に入れて、そのポケットから瑞希の封筒を取り出すのを見届けて・・・

「雄二、あたしは先に帰るぞ」

先に帰ろうとし・・・

《ピンポンパンポン》

《Fクラス坂本優紀子、吉井明久、2名は職員室に来るように。繰り返す・・・》

職員室に呼び出された・・・当たり前か・・・

あたしと明久は職員室に行った

明久はあたしが命令したことにして罪を軽くしてやったので数分の説教で済んだ

その分あたしは日が落ちるまでたっぷり説教を食らった・・・

まあ校舎を2箇所破壊して説教で済むだけありがたいけど

そういえば昨日作ったクレーターについては何も言われなかったけどいいのかな・・・？

説教から解放されてかばんを取りに教室へ

あーダライ・・・家まで辿り着けるかな・・・

教室に入り、かばんを取ろうとするが、まだうまく手に力が入らずかばんを落とす

「はぁ・・・」

「お疲れのようじゃな副代表？」

ため息をつき、落としたかばんを拾おうとすると声をかけられた

「秀吉・・・こんな時間まで待つてるなんてストーカーか？」

「酷い言われようじゃな」

「っで何のようだ？」

「腕輪の力とはいえ壁を2回も壊したのじゃ。昨日のと今日のお
主も疲労がピークじゃと思ってるの」

「何だ、心配してくれるのか？」

「そりゃぁ・・・の・・・」

秀吉が顔を背ける・・・暗くて表情は良く見えない・・・
3日連続でこいつに心配されるなんてな・・・

「じゃあ家まで送ってもらおうかな。手に力が入らないから、かば
んも持つてくれ」

なんでだろう・・・

あたしを心配するなんて10年はええよとか言おうかと思ったけど・
・

出てきた言葉はそんな言葉だった

でも・・・悪い気はしない・・・

13話

Bクラス戦決着から2日後・・・
何でかクラスメイトから姉御と呼ばれるようになった・・・
でも他クラスからは鉄槌の魔王とか言われてるらしい・・・
多分彼女にしたくないランキングで美波といい勝負をしてるだろう
な・・・

それは置いて、今日いよいよAクラスに宣戦布告する

「まずはみんなに礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもないみんなの協力があつてのことだ。感謝している」

教壇に立つ雄二がそう言った
あたしはその隣に立っている

「どうしたんだ坂本。らしくないぜ？」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

クラスの男子の一人が茶化すが雄二が普通に答える

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

『おおーっ！』

『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

雄二の言葉に皆の気持ちが一つになっていく

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えている」

『どっいうことだ？』

『誰と誰が一騎打ちをするんだ？』

『それで本当に勝てるのか？』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二が机をバンバン、と叩いて皆を静まらせる

やっぱり一騎打ちという言葉にみんな不安を感じてるな

「やるのは当然、俺と翔子だ」

「バカの雄二が勝てイタツ！」

明久が無理だと言い切る前にあたしがチョークを投げ、頭に当てる
まあ無理だと言いたい気持ちも分からん事もないが・・・

Aクラスの代表、学年主席と学年最低クラスの代表が一騎打ちをする
確かに無理に見える。だが・・・

「最後まで話しを聞きな」

ここに来て負けるためにそんな策に出ると思うのかよ

「まともにやり合えば勝ち目はないかもしれないが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？まともにやり合えば、俺達に勝ち目はなかった。今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない・・・俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今みんなに見せてやる！」

『おおおーっ！！』

「さて、具体的なやり方だが・・・一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。ただし、内容は小学生程度、方式は1000点満点の上限あり。召喚獣勝負ではなく、純粋な点数勝負とする」

日本史の小学生レベル・・・って事は、あれか・・・

「でも同点だったら、きつと延長戦だよ？そうなったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？幾らなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦にしねえよ。俺がこのやり方を取った理由は1つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っている

からだ」

ある問題を確実に間違える・・・
その言葉に全員が静まる

「その問題は・・・大化の改新！」

「大化の改新で小学生レベルとなると・・・何年に起きた、とかか
のう？」

「おっピンゴだ秀吉。お前の言う通り、その年号を問う問題が出た
ら、俺達の勝ちだ」

「大化の改新なら、645年だな」

「ああ。普通ならこんな簡単な問題は明久ですら間違えない」

雄二がそう言うと明久が顔を背ける

「だが、翔子はお前が今言った年号に絶対に間違える！これは確実
だ、だからその問題が出たら俺達の勝ちだ！晴れてこの教室とはお
さらばだって寸法だ！」

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「霧島さんとは、その・・・仲が良いんですか？」

さつきから霧島をアイツとか翔子とか呼んでるし、疑問に思っているのは

当たり前だな

「ああ。アイツとは幼なじみだ」

「総員、狙ええっ！」

「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

その言葉に明久は激高し、号令を上げた

「黙れ、男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

明久が雄二に敵意抜き出しでそう言う

「明久、あんまり話の邪魔をするなよ？次はこれを投げるからな」

あたしがそう言ってかばんから小さめのハンマーを出す

何で持つてるのかって？物作るとき使うからだよ

「あの、吉井君」

「ん？なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。美人だし」

「・・・」

「え？なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢をとるの！？それと

美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険なものを投げようとしているの!？」

明久に攻撃姿勢をとる瑞希を見て、瑞希もFクラスに染まってきたなと思った

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さい頃間違えてウソを教えたんだ」

「それが、大化の改新かの？」

「そうだ。アイツは1度覚えた事は、決して忘れない。だから今、学年トップの座にいる。だが俺はそれを利用し、アイツに勝つ! そうしたら俺達の机は……」

『システムデスクだ!』

Aクラス教室……

「一騎打ち?」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラスに一騎打ちを申し込む」

今回は代表である雄二、あたし、明久、姫路、秀吉、土屋と首脳&主力メンバーがほぼ揃って宣戦布告に来ていた

「うーん、何が狙いなのか？」

「それはもちろん、Fクラスの勝利だ」

現在雄二と交渉しているのは秀吉の双子の姉の木下優子である

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることが出来るのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを冒す必要もないかな」

「賢明だな。ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったよ？何の問題もなし」

秀吉の挑発に乗って昨日Aクラスに攻め込んだCクラス。勝負は半日で決着がつき、今CクラスはDクラスと同じ設備で授業を受けている

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって・・・昨日来ていたあの・・・」

木下優子の顔が少し青くなる

「ああ、あれが代表をやってるクラスだ。幸い宣戦布告はまだのよ
うだが、さてどうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、3ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよな？」

試召戦争に敗北したクラスは3ヶ月の準備期間を取らない限り再び試召戦争を申し込むことは出来ない。これは試召戦争の泥沼化を防ぐための取り決めである

「知っているだろ？実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は和平交渉にて終結つてなっているんだ。規約には何の問題もない。・・・Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

「・・・それって脅迫？」

「人聞きの悪いただのお願いだよ」

「うーん・・・わかったよ。何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

はぁ・・・とため息を吐き、木下優子はそう言った

「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん・・・」

と木下優子はまた顔を青くした

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互い5人ずつ選んで、一騎打ち5回で3回勝った方の勝ち、っていうのなら受けてもいいよ」

「なるほど。こっちから姫路が出てくる可能性を警戒してるんだな？」

「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶

好調だったなら、問題次第では万が一があるかもしれないし」

「安心してくれ。うちからは俺が出る」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みには出来ないよ。これは競争じゃなくて戦争なんだからね」

つと木下優子は口元に指をつけて言った

「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い」

「ホント？嬉しいな」

「その代わり勝負の内容はこっちで決めさせてもらう、それくらいのハンデはあってもいいだろ」

「え？うーん……」

「……受けてもいい」

「うわっ！」

突然の凜とした声に明久が驚き、声をあげた

「……雄二の提案を受けてもいい」

声の主はAクラス代表の霧島……

「あれ？代表。いいの？」

「・・・その代わり、条件がある」

「条件？」

「・・・そう」

霧島が姫路をじっくりと観察するように見て、顔を雄二に向けて言い放った

「・・・負けた方は何でも1つ言うことを聞く」

「・・・(カチャカチャ)」

「ムツツリーニ、まだ撮影の準備は早いよ!というか、負ける気満々じゃないか!」

「あんたら・・・霧島、それは代表として言ってるんだな？」

土屋と明久のやり取りに呆れつつ、あたしは霧島に聞く
どうせこいつのことだ・・・目的も想像つく

「・・・もちろん」

「じゃ、こうしよう?勝負内容は5つの内3つそっちに決めさせてあげる。2つはうちで決めさせて?」

「ま、妥当なところか。交渉成立だな」

そうして宣戦布告と対戦内容の交渉が終わった

14話

翌日、午前10時、Aクラス教室

「改めてみると、すごいな」

「だな・・・」

巨大サイズのプラズマディスプレイ、人数分用意されたシステムデスクにリクライニングシート、パソコンや個人用エアコンや冷蔵庫まであり、その中身も学園側で管理

決戦の立ち会い人は、Aクラス担任であり学年主任である、高橋先生

「では、両名とも準備は良いですか？」

「ああ」

「・・・問題ない」

それぞれの代表が、決意表明

「それでは、1人目の方、どうぞ」

「姉貴、頼む」

「任せな」

雄二に先鋒を任せられ送り出される

「あれ？優紀姉が最初なの？」

「先鋒が派手に勝てば、流れがこっちに来るだろ。だからあたしだ」

「これから俺達の教室になるんだ。あんまり壊すなよ」

「さあね。相手次第だな」

そう言ってあたしは前が出る

「Fクラス副代表、坂本優紀子だ」

それに対してAクラスの1人目は

「Aクラス木下優子よ。始める前にちょっといいかな？秀吉に話があるんだけど」

昨日交渉を任されていた秀吉の姉だ
開始前に秀吉に話があるみたいだ・・・内容はCクラスを罵倒したことかな

「まあここで話すならな。ホラ秀吉！来な！」

「ありがとう」

そう言ってあたしは秀吉を呼ぶ

「秀吉、Cクラスの小山さんって知ってる？」

やっぱりな・・・

「はて・・・誰じゃ？」

「じゃーいいや。かわりにちょっとこっちに来て・・・」

「待て」

そう言っつて秀吉の腕を掴もうとする木下優子をあたしが止める

「あたしはここで話せつて言ったんだ。それにわかつてると思っつが
Cクラスの小山を挑発したのは秀吉だ。あたしが副代表として命令
して無理矢理やらした」

「へえーそう・・・」

木下優子の怒りのボルテージが急上昇していくのがわかる

「だからそのことで秀吉に何かすることは許さない」

「なんでよ!」

「姉にバレた時は守つてやると言つたからだ。でもそれじゃあんた
の怒りは収まらんだらうから、チャンスをやる」

「チャンス？」

このままだとあたしの見えないところでやられるだらうし

「そうだ。知つてると思っつが、あたしは観察処分者だ。と言つこと

は・・・」

「召喚獣の痛みが伝わるって事ね」

「正解、だがそれだけだ、教科の選択権もやらねえ」

「科目は何にします?」

そう話していると、高橋先生が勝負内容を聞いてくる

「そうだな・・・物理で」

「数学じゃないのね」

さすがにあれだけのことをしたら何の教科でやったかまで細かく学年全体に広がるか・・・
だが、甘く見るなよ・・・

「それでは、始めてください」

「「サモン!」」

召喚獣が出てくる・・・

木下優子の召喚獣の武器はランスのようだ

「大丈夫なのか?優紀子」

秀吉が心配そうに聞いてくる

「任せなつて物理は・・・」

Fクラス 坂本優紀子 物理 521

VS

Aクラス 木下優子 物理 398

「数学並みだ」

『さすが姉御！Aクラスなんか潰しちまえ！』

点数が表示されFクラス陣営から歓声が上がる

「なっ！卑怯よ！そんな点数！」

「何が卑怯だ。点数見ただけで諦める根性無しに言われたくないね。ホラかかっておいで、根性叩き直してあげ・る」

点数差に愕然する木下優子を挑発する

挑発に乗って木下優子の召喚獣が突っ込んでくる

「食らいなさい！」

ドスッ

「グッ！」

そしてあたしの召喚獣はランスで腹を貫かれた

一撃で死なないように貫かれる場所は調節したけど……きついな

・

痛みのフィードバックであたしは膝をつく……

「優紀子?!」

「あら?根性叩き直してくれるんじゃないのかしら?」

秀吉があたしの名前を叫ぶように呼び、木下優子が余裕そうに言うてくる

「今からやってやるよ・・・セカンドモード!」

そう言つて腹に刺さつたままのランスを掴み、ハンマーを変形させる

「腕輪?!」

腕輪の発動に警戒するがランスを掴まれているので逃げない・・・武器を放棄すればいいのに軽くパニックになつてて判断力が鈍つてるな

そして変形したハンマーを振りかぶつて・・・

「ブースターオン!」

ブースターの勢いをプラスして頭目掛けて振り下ろした

Fクラス 坂本優紀子 物理 19

VS

Aクラス 木下優子 物理 0

「勝者、Fクラス坂本優紀子」

『おおおおおーーーーー!!!!!!』

高橋先生がそう宣言し、Fクラス陣営からまた歓声が上がった

「気は済んだか？木下優子」

「もしかしてわざと食らったの？」

あたしが膝をついたまま、木下優子に話しかけるとあたしに近づきながら聞いてきた

「まあね・・・あたしが無傷で勝っても、あんたの怒りは収まらないし、そうなるとあたしの見てないところで秀吉に何かされると思ったからね」

あたしがわざと食らったと言つと何か感づいたようで・・・

「ねえアンタもしかして・・・」

つと小声で聞いてくる・・・気づかれた？

勉強ばかりだと思つたらそつちの方も意外と鋭いのね・・・

「さあね？どうだろね・・・」

「そついつことにしてあげる。弟をよろしくね」

あーバレてるね、確実に・・・なら

「任せてください、お義姉さん」

つと言い返した

「まだそれは早いでしょ。優紀子でいいわよね？あたしも優子でいいから、これからよろしくね」

「そうだな・・・よろしく優子」

「立てる？」

「なんとか・・・」

そう言って優子が手を差し出し、あたしがその手を掴んで立ち上がる

「秀吉」

「な、何じゃ姉上？」

優子が秀吉を呼ぶ

秀吉は優子に何かされるのかと少し怯えている

「優紀子に感謝しなさいよ。アンタが受ける罰を代わりに受けたんだから」

「う、うむ・・・ありがとつなのじゃ優紀子・・・」

「気にすんな秀吉、またな優子」

そう言ってあたしと秀吉は下がっていった

15話

あたしの勝負が終わった後

フィードバックの痛みがまだきついと雄二に言って

あたしと秀吉はFクラスの教室に戻った

「優紀子・・・大丈夫か？」

「ああ・・・だいぶ痛みは引いてきたよ」

あたしは壁に寄りかかり座っている

秀吉も隣に座っている

「のう優紀子・・・なんでわしを庇ってくれたのじゃ？」

「副代表だからって言ったろ・・・」

「嘘じゃろ？」

「うっ・・・」

即答すんなよ・・・

こんな所で告白しろとでも言つのか・・・

「聞きたいか？」

「聞きたいのう・・・」

珍しく積極的だな・・・

あたしの気持ち知ってて言ってるんじゃないか？

「じゃあ、あたしも1つ聞かせな。Bクラス戦のとき、何であんたはあたしをそんなに気にかけてくれたんだ？」

「それはじゃの・・・」

秀吉が顔を赤くなった・・・
なんだ、あたしと同じ気持ちか・・・
なら・・・

「ホーラ、お姉さんに話してごらん」

秀吉の顔に自分の顔を近づけ、からかってみる・・・
秀吉の顔がさらに赤くなった・・・
さらに腕を掴んで逃げれなくして・・・

「あたしは・・・好きだからだよ・・・秀吉、あんたのことが・・・」

からかいモードから真剣な顔、声であたしはそう言った・・・
って、あたしが告白してどうすんだ・・・

「優紀子・・・？嘘じゃろ？」

「嘘かどうかは分かってんだろ秀吉？いつもあたしの嘘を100%の精度で見抜いてるくせに」

「うっ・・・えっ・・・と・・・」

オーバーヒート直前って感じだな、秀吉・・・

「わ、わしも・・・」

「わしも？」

「わしも好きじゃ・・・優紀子のことが・・・」

真っ赤な顔をした秀吉がそう言った・・・

「よくできました・・・」

「優紀子・・・?!」

あたしはそのまま顔を近づけ秀吉とキスした・・・
直後・・・

『おおおおおおおー』

「・・・え？」

Aクラス教室のほうから歓声が上がった
まさか盗撮された？土屋ならやりかねんし・・・
でも雄二が止めてくれる筈・・・

「見られたのかな・・・？」

「いや、決着がついたのじゃろ」

そうだよな・・・まああたしは見られてもいいけど・・・

「じゃ行くか。結果も気になるし、優子にあたしらのこと言っておきたいし」

「何で姉上が出てくるのじゃ？」

「さっきの勝負とその前後の会話であたしの気持ちに気づいたんだとよ・・・弟をよろしくって言われたよ・・・」

「姉上・・・意外と鋭いのじゃな」

弟から見ても意外なのか・・・
あたしと秀吉が立ち上がって教室から出ようとすると・・・

「優紀子、ちょっと待つのがじゃ」

「何だ秀よ・・・?!」

秀吉に呼び止められ、振り向きざまにキスされる・・・
あたしのほうが秀吉より少し背が高いので秀吉が爪先立ちをしている・・・

「さっきのお返しじゃ・・・」

そう顔を赤くしながら秀吉があたしに言った
確かに不意打ちは恥ずかしいな・・・

あたしはAクラス教室に着くまで必死に気持ちを落ち着かせていた・・・

「あ、優紀子に秀吉！もう大丈夫なの？」

「ああ痛みは引いたよ。それでどうなってる？」

Aクラスの教室に着くと美波が話しかけてきた

対戦の決着はまだついておらず、まだ第5試合の途中だった

あの後2、3試合とAクラスに取られ、4試合目で瑞希が勝って2対2で大将戦になったようだ

「出たよ！大化の改新！」

「それはホントかの?!」

「本当よ。ここにいるみんなが見てるわ」

「じゃあ、これであの教室からおさらばじゃの」

美波が作戦の鍵となる問題が出てきたと言って、秀吉が勝利を確信する

いや、Fクラスみんなが勝利を確信してるな・・・
でも、あいつのことだから・・・

日本史勝負 限定テスト 100点満点

Aクラス 霧島翔子 97点

VS

Fクラス 坂本雄二 53点

やっぱり最後の最後でこうなるんだよね・・・

16話

「3対2でAクラスの勝利です」

視聴覚室にやってきたあたしらに対する高橋女史の締めめの台詞

「・・・雄二、私の勝ち」

「・・・殺せ」

「いい覚悟だ、殺してやる！歯を食いしばれ！」

「吉井君、落ち着いて下さい！」

雄二に掴みかかろうとする明久を瑞希が後ろから抱きついて止める

「だいたい、53点ってなんだよ！0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと・・・」

「いかにも俺の全力だ」

雄二が堂々と言う

「この阿呆があーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！アンタだったら30点も取れないでしょうが！」

「それについては否定しない！」

美波が明久にそう言っていると明久は堂々とそれを肯定した

「それなら、坂本君を責めちゃだめですっ!」

「くっ! 2人とも何故止めるんだ! この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに!」

「それって体罰じゃなくて処刑です!」

「とりあえず明久、落ち着け」

「ゲフツ!」

そう言っであたしは明久の腹に1発拳を入れる

「・・・でも危なかった。雄二が所詮小学生程度の問題だと油断していなければ負けてた」

「言い訳はしねえ」

「実は油断じゃなかったりして?」

「どづいつことじゃ優紀子?」

「こいつは昔から最後の最後で敵に情けをかけたからな」

「うっ・・・」

あたしの言葉に雄二は気まずそうな顔をする・・・

「つまり最後の最後で手を抜いたと・・・」

「・・・ところで、約束」

「・・・！（カチャカチャカチャ！）」

霧島の言った言葉で、土屋と明久が突如撮影準備を始めた霧島は瑞希に視線をやった後に雄二に視線を戻して・・・

「・・・雄二、私と付き合って」

と、言い放った。やっぱりね・・・

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか？」

「・・・私は諦めない。ずっと、雄二の事が好き」

「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合っ気はないのか？」

「・・・私には、雄二しかない。他の人なんて興味ない」

「霧島、なんで何回も断られるのか、わかってるか？」

雄二のことか好きという霧島にあたしが聞く

「・・・？」

霧島はまったく分からないって感じた

「こんな賭けをしないと告白もできないような、あんたの意気地のなさだよ。まあ告白する意気地がないってだけならいい。なら雄二から告白させるようにとか他にやる事があるだろ？大体それは代表としてじゃなく個人的な命令じゃねえか。ちゃんとAクラス代表として、Fクラス代表に対する命令をしなよ。あたしはあの時ちゃんと代表として言っているのかと確認を取ったんだから」

あたしは霧島の願いは無効だと言う

霧島が俯く・・・不味いな・・・泣いたかも・・・

「わ、わかった、付き合うだけだぞ」

泣いてる？霧島を見て雄二が焦ったようにそう言った

雄二は甘いな・・・

「・・・今からデートに行く」

「嘘泣きか！ぐあっ！放せ！やっぱりなかったことに・・・」

霧島は雄二の首根っこを掴んで教室を出て行った

雄二に手を上げるなんて、矯正しないといけない・・・

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

あたし以外呆然としていたFクラス生徒に野太い声が掛かる

声のしたほうを見ると、そこには生活指導の鉄人が立っていた

「あれ？鉄人？あたしらになんか用か？」

「西村先生だ！今から我がFクラスに補修についての説明をしよう

「思ってたな」

我がFクラス・・・ね・・・

「おめでとつ。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から補習授業担当のこの俺に担任が変わるそうだ。これから1年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『なにいつ!』

クラスの男子全員が悲鳴をあげる

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまで来るとは正直思わなかった。でもな、いくら学力が全てではないといつても、人生を渡っていく上では強力な武器の1つなんだ。全てではないからと言って、ないがしろにしているものじゃない」

そんな強力な武器をないがしろにして、なんでBクラスに勝ってAクラスをあそこまで追い詰めれたんだろうな？

「吉井、それと坂本姉弟は特に念入りに監視してやる。なにせ、開校以来初の観察処分者とA級戦犯だからな」

「そうはいきませんよ！何としても監視の目を掻い潜って、今まで通り楽しい学園生活を過ごして見せます!」

その鉄人の言葉に明久が言い返す・・・
まああたしはどうでもいい・・・別に補習は苦じゃないしとりあえず明日から授業とは別に2時間補習があるらしい

「さあ〜て、アキ。補修は明日からみたいだし、今日は約束通りクレープを食べに行きましようか？」

「え？美波、それは週末の話じゃ・・・」

「へえーそんな約束してたんだ・・・それに・・・」

呼び名もアキと美波にかわってるし

「瑞希もがんばらないとね」

「だ、ダメです！吉井君は私と映画を観に行くんです！」

「ええっ！？姫路さん、それは話題にすら上がってないよ!？」

あたしの言葉に後押しされ瑞希が明久を誘う

「さて秀吉、あたしらは優子のところ寄って帰るぞー」

「そっじゃの」

あたしと秀吉は明久の叫びを背に視聴覚室を出た

そしてあたしらは優子に報告に行くと、そんなにすぐに告白しなくても・・・と呆れていた・・・

17話

Aクラス戦が終わって数日・・・

学園祭が1ヶ月後に控えた今日

あたしは秀吉とデートを兼ねた買出しに出かけた

「学園祭関係の買出しにはまだ早いんじゃないか？優紀子よ」

「1ヶ月なんて準備期間としては短いくらいだよ。演劇だって準備と稽古を1ヶ月じゃ足りないだろ？」

「むう・・・確かに本格的なものだと裏方の準備は1ヶ月じゃ足りないのう」

準備にはまだ早いのではと言う秀吉にあたしはそう言う

「それに去年の学園祭を見て思ったんだが来場者がかなり多い、だから大量に作っておかないとあつという間に売り切れて儲けも少ない」

「売れるという前提なのじゃな・・・」

「売れるかどうかじゃなく売れるようにするんだよ。あたしと秀吉で。完売したら儲けで記念になんかペアのもの買おう。それが高い素材使ってあたしが作る」

ペアのもの・・・作るとしたらブレスレットあたりでいいか・・・

「じゃあ先にデートするか。材料持って周るのも疲れるし」

「う、うむ、そうじゃな」

ん？秀吉の顔が赤い・・・ペアのもので指輪とか想像したのかな？

「じゃあどこ行く？臨時収入があったからいろいろ行けるけど？」

「臨時収入じゃと？」

「そ、臨時収入、設備が落ちたからこそできた商売でね」

Fクラス設備はAクラスに負けてランクダウンし、今は莫産とみかん箱デスクになっている

そこに目をつけたあたしは座布団を作ってFクラスに売りさばき、臨時収入が入った

秀吉にはただでプレゼントしたから、知らなくても不思議じゃない

「さすが優紀子、そう言うところは抜け目がないのう」

「まあねー。っでどこ行く？」

「そうじゃの映画なんてどうじゃ？」

「映画ね、よし行こう」

つと言うことであたしらは映画館に行った

映画館に着くと明久と瑞希と美波がいた

「チケット代、コーラ、ポップコーン・・・映画館、何と恐ろしい場所!？」

明久がなんかグチグチ言ってる

「何みみっちい事言ってるんだ？瑞希や美波とのデートだって言うのに」

あたしは明久に後ろから声をかける

「あれ？優紀姉に秀吉、こんなところで何してんの？」

「買出しついでにデートだな」

明久がこっちを向いて聞いてきた

「デ、デートって秀吉と？」

「変か？」

意外そうに聞いてくる美波

ちなみにあたしと秀吉の関係を知ってるのはお互いの姉弟だけ

「付き合っているんですか?!」

「あ、ああ・・・Aクラス戦のときから・・・」

瑞希がグイツとこっちに迫りながら聞いてくる

「詳しく聞かせてください（なさい）！」

おおっ！恋バナの食い付きすげえ
自身が恋してるからか・・・

「ま、まあ今は明久とのデート中みただし、また今度ね」

「はい」

「絶対よ！」

そう言うと二人は引き下がった

「・・・俺も今回ばかりは、負けを認めざるを得ないぜ」

つとそこへ聞こえてくる雄二の声

声のほうを向くと雄二と霧島がいた・・・

ただし、雄二には手枷が付けられており、逃げられない状態で・・・

「霧島ー？なんで雄二がそんな状態なのかなー？」

あたしは霧島に近づき、そう問いかける

「・・・雄二が逃げるから」

「逃げる男を拘束して彼氏ですってか・・・流石意気地のない人は常識もないね」

あたしが霧島にきつめに言う

はつきり言ってあたしはこいつが嫌いだ

好きって言ってる癖に雄二を傷つけて、さらに男女問わずちょっと誰かと仲良く話しただけで浮気とか言っつて、雄二をまったく信用してない

これで彼女？笑わせんなって感じ

「ホラさっさと雄二を解放しな、じゃないと親に報告させてもらう。あたしが言えばウチの両親だって考えを変えるだろうしねえ」

そう言つと霧島は渋々雄二の手枷を外した

「ったく……デート誘うのにそんな拘束しないとできないなんて情けない……」

「ちよつと優紀子、その辺にしなさいよ」

さらにあたしが文句を言つてると美波に止められた

「彼女だつて言つたら雄二を信用して傷つけるな。じゃないとあたしはあんたを彼女だなんて絶対認めないよ」

その後、霧島は落ち込み、雄二が励ますように2人でどこかに行ったはあ……普通にしたら雄二も嫌がらないだろうに……

あその後、5人で映画を見て

そろそろ買出しをするため、あたしと秀吉は3人と別れた

「そついえば何を作るつもりなのじゃ？」

材料を買う店に向かいながら秀吉が聞いてきた

「ん？とりあえず召喚獣のぬいぐるみを大小2種類作るうかと思ってる。小さいのはケータイストラップ用して売るつもり」

「そうか。って誰の召喚獣を元に作るつもりじゃ？」

「今のところは、あたし、瑞希、美波・・・かな？土屋から召喚獣の写真も買ったし、ぬいぐるみ、ストラップ各10個ぐらい」

「わしのは無いのか？」

秀吉が自分が無いのが意外そうに聞いてきた

「秀吉のは誰にも売りたいくないから、あたし用に1セットだけ作るよ」

「そ、そうか・・・」

「あたしのも売って欲しくない？」

そう聞くと少し赤くなって頷いた

「わかった。じゃあ秀吉用に1セットだけ作ってあげる」

じゃあ2人のを各15個に増やすか・・・

「っでどこで素材を買うのじゃ？」

「ああ、それは馴染みの店があるからそこで買つよ。つと着いたぞ」

そしてあたしはその馴染みの店に入った

中にはぬいぐるみやぬいぐるみ製作に使う材料や道具が並んでいる

「いらつしゃい」

「春休みぶりだね」

レジのところにいるお婆さん（店長）に挨拶する。秀吉は店の中を
キョロキョロしている

「おやおやデートかい？」

「まあね つとそれより学園祭でぬいぐるみ作つて売ろうと思うん
だけど、2種で大小2サイズで各15個の計60個の予定なんだけ
ど、あと……」

店長に作る予定のぬいぐるみの細かいサイズやデザインを伝える・

・
店長はそれを聞いて何がどれくらい必要かを頭の中で計算して店の
置くから持ってきた

「全部で……円だね」

支払いを終えて店から出る……

座布団の利益が全部飛んでった……

「さてこれから最低でも毎日大小1個かがんばるぞー」

あたしが柄にもなくそう言う・・・

「わしもできることがあれば手伝うぞ」

目指せ完売、そしてペアのブレスレット

17話(後書き)

学園祭編は書き溜まるまで投稿しないかも・・・
このペースだとあと3、4日かな

秀吉とのデートから3週間とちよつと

文月学園では、新年度最初の行事である清涼祭の準備が始まりつつあつた

あたしはあれから毎日ノルマをこなしている

学校で作っていたら瑞希と美波に明久の召喚獣で作つてと言われた。
・
・
仕事増やすんじゃないやねえよ・・・

「姫路、学園祭では何かしたいものでもあるかの?」

秀吉が何かないかと案を求める

あたしはぬいぐるみを作りながら聞いている

「そうですね・・・やっぱり皆で一緒に楽しめるものがいいです」

「島田はどつじや?」

「ウチは特にこれといったものは無いわ。でも瑞希の意見には賛成ね」

「そつじやな。学園祭なのじゃから、楽しまないと損じゃ。優紀子は何かあるかの?」

秀吉があたしに話を振ってきた

「あたしは特に・・・これの販売やるから、そのスペースが確保できるならなんでも」

っと作っているぬいぐるみを少し持ち上げる

「どうでしょうか？このままだと出し物が決まりませんよ？」

「というか、4人で決めるのに無理があるだろ？」

今教室にはあたしと秀吉、島田と姫路しかいなかった
他のFクラスメンバーバカどもはと言うと、校庭で野球をしていた

ガラッ

「どうだ？出し物は決まった・・・これはどういうことだ？」

「バカどもなら校庭で野球してます」

「まったく、あいつらは・・・」

鉄人は額に手をつけて溜息をはく。よっぽど呆れているのだろう

「・・・ちょっとあのバカどもを連れ戻してくる」

「さて、そろそろ春の清涼祭での出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが、とりあえず議事進行並びに実行委員として誰か任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

心のそこからどうでも良さそうな態度の雄二。興味がないからとはいえ、もうちょっと真面目にやりなよ・・・

まあぬいぐるみ作りながら聞き耳だけ立ててるあたしが言えた義理じゃないが

「んじゃ、実行委員は島田という事で良いか？」

「え？ウチがやるの？うん・・・ウチは召喚大会に出るから、ちよつと困るかな？」

「雄二、実行委員なら、美波より優紀姉や姫路さんの方が適任なんじゃないの？」

「え？私ですか？」

話を振られて瑞希は反応するが、あたしは無視した

「姫路には無理だな。多分全員の意見を丁寧に聞いてるうちにタイムアップになる。それに姉貴は忙しそうだし・・・」

「そうだね・・・」

あたしは雄二が教壇で話すときはいつも一緒に前に出るが、今日は自分の場所でチクチクとやっている

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会にでるのよ」

「え？そうなの？」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

「へ」。学校の宣伝みたいな行事なのに。二人とも物好きだなあ」

今年は試験召喚システムを公開する場として、清涼祭の期間中に試験召喚大会という企画が催される

最初はあたしと秀吉で出て製品持って宣伝しようと思ったんだけど実物のほうが宣伝効果高いと思って2人に任すつもりだ
宣伝について2人に言っていないけどね・・・言つと分け前寄越せとかいいそうだし・・・特に美波

「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね。瑞希つてば、お父さんを見返してやりたいって言って聞かないんだから」

「お父さんを見返す？」

「うん。家で色々言われたんだって。Fクラスのことをバカにされたんです！許せません！って怒ってるの」

「あらら。姫路さんが怒るなんて珍しいね」

「だって、皆のことを何もわかっていないくせに、Fクラスっ理由だけでバカにするんですよ？許せませんっ」

まあ否定はできないけどね・・・

「3人とも。こっちの話が続けていいか？」

「あ、ごめん雄二。美波が実行委員になる話だったよね？」

「だからウチは召喚大会に出るって言ってるのよ」

「なら、サポートとして副実行委員を選出しよう。それなら良いだろう?。」

「うーん・・・そうね。補佐次第ではやっても良いけど」

「そうか。ではまず皆に、副実行委員の候補を上げてもらう。その中から島田が2人を選んで投票したらいいだろう」

そう告げられると、教室がざわめき始める

まあ面倒な役は御免被りたい、と思うのは皆一緒

「吉井が適任だと思う」

「やはり坂本がやるべきじゃないか?」

「前線指揮官ならやつぱ久遠だろ」

「姫路さんと結婚したい」

所々で、候補の選別が始まった・・・とりあえず最後のやつは殴る

なんだかんだで副実行委員は明久になったみたいだ

「ウチは議事進行やるから、アキは板書お願いね」

「ん。了解」

「それじゃ、ちゃっちゃと決めるわよ。クラスの出し物でやりたいものがあれば挙手してもらえる?。」

「はい、土屋」

「・・・写真館」

「・・・土屋の言う写真館って、かなり嫌な予感がするんだけど」

写真館はレイアウトも自由にできて、こっちのスペースも確保しやすいな・・・

美波の言いたいことも分かるけど・・・

「次。はい、横溝」

「メイド喫茶・・・と言いたいけど、流石に使い古されていると思うので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します」

「ウェディング喫茶？それってどういうの？」

「別に普通の喫茶店だけど、ウェイトレスがウェディングドレスを着ているんだ」

花嫁が給仕してどうすんだよ・・・

しかし、ウェディングドレスは面倒だけどメイド服召喚獣はありかもな・・・今からは作れないが

「さて、他に意見は・・・はい、須川」

「俺は中華喫茶を提案する」

「中華喫茶？チャイナドレスでも着せようっていつの？」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。そういつてイロモノ的な格好をして稼ごうってワケじゃない。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉があることからわかるように、こと食えるという文化に対しては中華ほど奥の深いジャンルはない。近年、ヨーロッパ文化による中華料理の淘汰が世間では見られるが、本来食というものは・・・」

須川はあたしと同じで興味があるものにとことんな性格のようだにしても、チャイナドレスか、ありだなあ・・・チャイナドレス仕様なら1つくらい作れるかな？1つだけ作って限定品として値段倍で売ってみるか・・・

ガラッ

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

そんなことを考えてると、鉄人が教室に入ってきたようだ

「今のところ、候補は黒板に書いてある3つです」

「・・・補修の時間を倍にした方が良くかもしれんな」

その言葉を聞いて初めてあたしは黒板を見た

候補1 写真館 秘密の覗き部屋
候補2 ウェディング喫茶 人生の墓場
候補3 中華喫茶 ヨーロピアン

なんだこれ・・・？

色々あつた結果Fクラスの出し物は中華喫茶に決まった・・・
はあ・・・写真館がよかつた・・・

「お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

そう須川が言った

またあたしはチクチクとぬいぐるみを作っている

「ムツツリーニ、料理なんか出来るの？」

「・・・紳士の嗜み」

明久が土屋に料理の腕前を聞くが、土屋は問題ないかのようにそう
答えた

「そう、わかつたわ。厨房班は須川と土屋のところ、ホール班はア
キのところを集まって！」

明久はいつの間にかホール班のトップにされていた

「それじゃ、私は厨房班に・・・」

「ダメだ姫路さん！キミはホール班じゃないと！」

平然と厨房班に入ろうとした姫路を明久が止める

あれから料理の腕はどうなったか知らないけど、まあホールにいる
ほうが売り上げは上がりそうだな

「あ、えーっと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客さんに接していたほうがお店として利益が痛あ、っ！み、美波！僕の背中ではサンドバックじゃないよ！？」

美波遊んでる暇はないぞ

「アキ。ウチは厨房にしようかなー？」

「うん。適任だと思う」

「・・・」

自業自得だな明久・・・

「それなら、ワシも厨房にしようかの」

「秀吉、あんたはあたしの手伝いだ」

「いや優紀子も秀吉も喫茶店のほうを手伝ってよ」

えーあたしはこれの販売に専念したいんだけど・・・

「副代表でしょ」

うっそう言われると・・・

「分かったよ・・・じゃあたしは秀吉とホールで」

そのほうが利益上がりそうだし

結局、美波もホールになってた

「優紀子、アキ、ちょっと良い？」

帰りのHRが終わり、現在放課後

何やら神妙な顔をした美波から、あたしと明久は声をかけられた

「ん、何か用？」

「どうしたんだ、美波？」

「うん。どっちかというところ、相談なんだけど……」

相変わらずあたしはチクチクやっている

「多分、2人が言うのが1番だと思うんだけど……その、やっぱり坂本を何とか学園祭に引っ張りだせないかな？ほら、あの様子じゃ坂本が仕切らないと……」

まー確かに美波じゃこのクラスを仕切るのは力不足かもな

「でもそれは難しいなあ……さっきも言ったけど、雄二は興味ない事に徹底的に無関心だからね」

「でも、優紀子かアキが頼めばきつと動いてくれるよね？」

「え？別に僕が頼んだからって、雄二の返事は変わらないと思うけど」

「ううん、そんなことない。きっと優紀子やアキの頼みなら引き受けてくれるはず」

まるで確信めいた様子で、美波は言葉をつづけた

「優紀姉はわかるけど、なんで僕？」

「あんた達、愛し合ってるんでしょ？」

ブスッ

「いったあ！」

「大丈夫か優紀子？！」

なんて事を言うんだ、間違えて指に針を刺してしまったじゃないか

「もう僕、お婿に行けない！！！」

明久もさめざめと泣き続け、ショックは大きい様子

「誰が雄二なんかと！だったら僕は、断然秀吉の方が良いよ！」

「すまん明久・・・わしは優紀子と付き合っておるので・・・」

「ひ、秀吉！これは誤解で・・・っていうか振られた？！」

明久は心に大きなダメージを負った・・・

明久が復活するのを待って・・・

「とにかく坂本は動いてくれないってこと？」

「え？あ、うん、そういうことになるかな」

「本当に何とかできないの？このままじゃ喫茶店が失敗に終わるよ
うな・・・」

美波が不安そうな声で言う

「お主らは何の話をしておるのじゃ？随分と深刻そうな話じゃが・・・」

「・・・本人には誰にも言わないでほしいって言われてたんだけど、
事情が事情だし・・・けど、秘密の話だから、誰にも言わないでね
？」

そう美波が確認して・・・

「・・・実は、瑞希なんだけど・・・あの子、このままだと転校す
るかも知れないの」

なんだって・・・？

あたしの手が止まる

「美波それは本当か？」

「本当よ」

「なんであたしに相談してくれなかったんだ・・・」

「あんたいつも忙しそうにぬいぐるみ作ってるから瑞希も声かけづらかったんでしょ」

あーそれは瑞希に悪いことをしたな・・・

「そんなことより明久が処理落ちしかけとるぞ」

「秀吉再起動してやれ」

秀吉が明久の肩を揺すって再起動する

「明久、しっかりするのじゃ」

「秀吉・・・モヒカンになった僕でも、好きでいてくれるかい？」

「あたしが再起動し直してやる」

プスッ

裁縫箱から待ち針を取り明久の腿辺りに軽く刺す

「痛！って美波！ 姫路さんが転校って、どっいう事さー!？」

「どうもごうも、そのままの意味。このままだと瑞希は、転校しちゃうかもしれないの」

「島田よ……その姫路の転校と、喫茶店の話が全然つながらん
じゃが……」

「そつでもないのよ……」

Fクラスをバカにされたこと、体の弱い瑞希、鉄人が言つてた学園
祭の出し物で設備の向上……

「転校の理由はFクラス的环境つてことか？」

「どついつことじゃ優紀子」

「こんな最低の設備で周りはバカだらけ。そりゃ転校させたくなる
わな」

「なるほどのう……じゃから喫茶店を成功させて設備を向上させ
たいというわけじゃな」

「瑞希も召喚大会で優勝してFクラスを見直してもらおうとしてる
けど、やっぱり設備をどうにかしないと……」

体を壊したら間違いなく転校だな……

瑞希がなに言つても親が強制的に手続きするだろう……

「わかった。そついうことなら、何としても雄二を焚きつけてやる
さー！」

「そつじゃな。ワシもクラスメイトの転校と聞いては、黙っておれ
ん」

「それじゃまず、雄二に連絡を取らないとね？」

明久は携帯を取り出し、雄二へと連絡
少し時間がたつて・・・

「あ、雄二？ちよつと話が・・・え？雄二、何してるの？・・・雄二！？もしもし！もしもし！」

と、何やら意味不明の会話が行われ、通話が切られた

「大方、霧島翔子から逃げ回っているんじゃないか。あれはああ見えて、異性には滅法弱いからの」

「あの女・・・きつーく言い聞かせないといけないみたいだな・・・」

「優紀子？！ちよつと落ち着いて！」

あたしが怒気をこめて言うと美波に止められた・・・

「でもそうになると、坂本と連絡を取るの難しいわね」

「いや、これはチャンスだ」

美波が困った風に言うと、そう明久は言った

「え？どういうこと？」

「雄二を喫茶店に引つ張り出すには丁度いい状況なんだよ。2人と
もちよつと協力して」

「でも坂本の居場所わかるの？」

「大丈夫。相手の考えが分かるのは、なにも雄二だけじゃない」

つと明久は自信満々に言った

まああそこだろうな・・・

やっぱりというか何とか・・・

雄二は女子更衣室にいました

あたしに電話してくれば、逃げなくて済むのに

まあ霧島がボコボコに言われるのが雄二は嫌なんだろうな・・・

雄二の嫌がることはしたくないけど、こればかりは将来に関わるし・・・

「そうか。姫路の転校か・・・」

雄二はあたしと同じようにFクラス的环境、莫産やミカン箱と言った設備、健康を害する教室、バカばかりのクラスメイトが問題だと言った

そして設備は喫茶店の収益で、クラスメイトについては召喚大会で優勝すればいい、と言った

「でも瑞希と美波が優勝したとしても、瑞希の力だけで勝ったとか言われたらどうするんだ？」

「じゃあ優紀子も出てよ」

「え？まあ最初はその予定だったから別にいいけど・・・いいか秀吉？」

「うむ、いいぞ優紀子。そうなると後の問題は教室じゃな・・・」

教室の改修は、流石に生徒や喫茶店の利益では賄えないし、あたしも左官の真似事はできない

業者の立会も必要になる以上学園の許可が必要になるでも許可が出なかったら、あたしが見様見真似で・・・

「そんなの学園長に直訴したらいいだろ？」

「それしかないよな。けど学園長は偏屈だって噂だし、大丈夫か？」

「こんな教室作るくらいだし・・・」

「あのお、ここは曲がりなりにも教育機関だぞ？幾ら方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼすような状況であるなら、改善要求は当然の権利だ」

そうは言うが、要求が通ってれば、こんな教室最初からないよ

「それなら、早速学園長に会いに行こうよ」

明久がそう提案した

「それじゃ、さっさと行くぞ。行くのは、あたしと雄二と明久でいいか？」

「じゃあ島田は、学園祭の準備計画でも考えておいてくれ」

そう雄二が言って、あたしらは学園長室に向かった

新校舎の一角、学園長室前にて

『……賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月グラウンドパークに……』

「どうした、明久？」

「いや、中で何か話をしているみたいなんだけど」

「とりあえず、学園長が居るとわかったんだから、さっさと中に入るぞ」

そう言つて雄二はドアをノックし、返事を待たずドアを開けた

「失礼しまーす」

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

あたしも同感だね

そう言つたのは、長い白髪が特徴の藤堂カヲル学園長
試験召喚システム開発の中心人物

「やれやれ、取り込み中だと言うのに、とんだ来客ですね。これでは話を続ける事も出来ません……まさか、貴方の差し金ですか？」

それに相對していたのは、竹原教頭

メガネをいじりながら、学園長を睨みつける

「バカを言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなせこい手を使わなきゃいけないのさ？ 負い目があると言う訳でもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠しごとがお得意のようですから」

「さつきから言っているように、隠し事なんてないね。あんたの見当違いだよ」

「・・・そうですか。そこまで否定されるなら、この場はそういう事にしておきましょう」

「おいおい・・・負い目とか隠し事とか生徒の前で言っているのか？
会話を終え、教頭は学園長室を出て行った

「んで、ガキ共。アンタらは何の用だい？」

「今日は学園長にお話があつてきました」

「アタシは今、それどころじゃないんでね。学園の経営に関する事なら、教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀つてモンだ。覚えておきな」

「あんたの人のこと言えた義理じゃないけどな」

「失礼しました。俺は2年F組代表の坂本雄二」

「同じく、2年F組副代表、坂本優紀子です」

「そしてこつちが・・・2年生を代表するバカです」

「雄二・・・そんなボケかましてる暇はないんだよ・・・」

「ほう・・・そうかい。あんた達がFクラスの坂本姉弟と吉井かい？」

通じんのかよ?!

「気が変わったよ、話を聞いてやるうじやないか」

「ありがとうございます」

「礼なんか言う暇があったら、さっさと話しなウスノロ」

「わかりました」

雄二のやつがんばって耐えてるね・・・

「Fクラスの設備について、改善を要求しに来ました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましい事だね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みその様に穴だらけで、隙間風が吹きこんで来るような酷い状況です。学園長の様に戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われ
ます」

・・・表面だけは

「要するに、隙間風が吹き込む様な教室の所為で体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババア、という訳です」

実に簡潔で的確なまとめだ・・・学園長は何やら思案顔になる
ってそうじゃなくて・・・

「失礼な表現があつた事を謝りますが、つまりはそう言うことです。
学園長」

あたしが気休め程度にフォローをする

「却下だね」

「雄二、このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう」

学園長の言葉に明久が雄二にそう言う

「・・・お前、もう少し態度には気を使え」

あんたがそれ言うか・・・

「理由を教えてくださいませんか？学園長」

「そうですね。教えてください、ババア」

あたしの言葉に明久がつづく・・・

邪魔すんならこの部屋から蹴り出すぞ

「理由も何も、設備に差を付けるのはこの学園の教育方針だからね。
ガタガタぬかすんじゃないよ、このなまっちろいガキども」

「確かにそうですけど、それで実際、体を壊した生徒が出てきたら
責に・・・」

「・・・と、いつもなら言っているんだけどね。可愛い生徒の頼みだ、こちらの頼みも聞くなり相談に乗ってやるうじゃないか」

あたしの話の途中で学園長はそう言った

学園長はニヤリと笑っていて

あたしは、ああ、メンドくさいことになったなあと思った

21話

「その条件って何ですか？」

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「ええ、まあ」

「じゃ、その優勝賞品と準優勝品は知っているかい？」

召喚大会の優勝賞品は、トロフィーと賞状と白金の腕輪
そして副賞として、如月グランドパークプレオープンプレミアムペ
アチケット

「で、それが何か？」

「話は最後まで聞きな。あわてるナントカは貰いが少ないって言葉を知らないのかい？」

「はい、知りません」

「堂々と言っんじゃないよ！・・・まあ良いさね。この副賞のペア
チケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。出来れば回
収したいのさ」

ドアの前で聞こえた話の中に、如月グランドパークという単語があ
ったな・・・

「回収？それなら、商品に出さなければ良いじゃないですか」

「そうできるならしたいさ。けどね、この話は教頭が進めたとはいえ、文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。今更覆す訳にはいかないんだよ」

「契約する前に気付いてくださいよ、学園長なんだから」

「うるさいガキだね。腕輪の開発で手一杯だったんだよ！それに悪い噂を聞いたのはつい最近だしね」

学園長としての仕事を疎かにするなら、研究者一本でやれよ
って言いたいけど、あたしも瑞希の話聞いてあげれなかつたしな・

「で、悪い噂ってのは？」

「如月グループは、如月グラウンドパークに1つのジnkクスを作ろうとしてるのさ。ここを訪れたカップルは幸せになれるってジnkクスをね」

「？そのどこが悪い噂なんです？良い話じゃないですか」

「プレミアムチケットを使って来た2組カップルを、結婚までコーデイネートするつもりらしいのさ。企業として、多少強引な手段を用いてもね」

「な、何だと！？」

それを聞いて、血相を変えたように大声を上げる雄二

「どうしたのさ、雄二？」

「慌てるに決まってるだろうが！今ババアが言った事はプレオープンプレミアムチケットでやってきた2組のカップルを、如月グループの力で強引に結婚させるってことだぞ！？」

まあ確かに霧島が手に入れたら不味いな・・・
あたしも企業相手じゃどうすることもできないし・・・

「・・・絶対にアイツは参加して、決勝進出を狙ってくる・・・行けば結婚・・・」

雄二もそれが不安みたいだ・・・

「ま、そんなワケで本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の将来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

「つまり、交換条件ってとは・・・」

「そうさね。召喚大会の優勝賞品と交換。それが出来るなら、教室の改修くらいしてやるうじゃないか」

「無論、優勝者から強奪なんてマネするんじゃないよ？譲って貰う事も不可だ。アタシはお前らに召喚大会で優勝しろと言っているんだからね」

「うっ・・・」

やるうと思っていたのか、苦虫をかみつぶしたかのような顔をする
明久

「・・・僕達が優勝したら、教室の改修と設備の向上を約束してくれるんですね？」

「何を言ってるんだい。やってやるのは教室の改修だけ。設備についてはうちの教育方針だ。変える気はないよ」

ま、そりゃそうだな・・・

「ただし、清涼祭で得た利益でなんとかしようっていうなら話は別だよ。特別に今回だけは勝手に設備を変更することに目を瞑ってやってもいい」

本当はダメなのかよ?! 鉄人が言ったことは嘘か?

「で、でも・・・」

「明久、無駄だ。ババアに譲る気が無いのは明白だ。この取引に應じるしか方法はない」

「あんたまさか自信がないのか？」

あたしらはBクラスに勝って、Aクラスをあと一步まで追い詰めたんだ

特にあなたは点に勝る相手に操作技術一本で戦ってきたじゃないか

「わかりました。この話、引き受けます」

「そうかい。それなら、交渉成立だね」

学園長はニヤリと笑って言った

「ただし、こちらからも提案がある」

「何だい？言ってみな」

「召喚大会は2対2のタッグマッチ。トーナメント形式で、1回戦が数学だと2回戦は化学、といった具合に進めていくと聞いている」

試合の派手さを出すためにも、選手たちは1試合ごとに科目を変えて戦う

もちろん科目は全員共通で

「それがどうかしたのかい？」

「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

雄二の目つきが鋭くなる

この顔は相手の裏を探ってる顔だね

「ふむ……いいだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していたけど、それくらいなら協力しようじゃないか」

「……ありがとうございます」

「そういえば、あたしと秀吉も出るんだ。雄二達とは決勝まで当たらないようにしてくれ。1、2回戦辺りで潰し合いなんて御免だからね」

店やぬいぐるみの宣伝的な意味で

「ああわかったよ。っで、ここまで協力してやるんだ。当然召喚大会で、優勝できるんだろっかね？」

「無論だ。俺達を誰だと思っている？」

雄二の表情がやる気全開のそれになっている・・・いい面だ

「絶対に優勝して見せます。そっちこそ、約束を忘れないように！」

「それじゃ坊主ども。任せたよ！」

22話

学園祭初日の朝

Fクラスの教室はいつものような小汚さはなく、中華風の喫茶店へと変わっていた

端のほうにあたしのぬいぐるみ販売スペースもある・・・
ちなみにぬいぐるみ販売に関してFクラスは無関係であたし個人の出店だ

「このテーブルなんて、ぱっと見は本物と区別がつかないよ」

明久がテーブルを見てそう言う

そこに並べられたテーブルは、みかん箱を重ねてその上にクロスをかけた物

演劇部である秀吉作で、小道具作りでの経験を生かした一品

あたしから見れば、まだまだただだけどね

別に2日間壊れなければいいだけだから、適当な木を釘でテーブルっぽく組み立てればいいのに・・・

ぬいぐるみ作ってたからできなかつたけどね

「ま、見かけはそれなりの物になったがの。その分、クロスを捲るとこの通りじゃ」

秀吉がクロスをまくと、そこには汚いみかん箱

少なくとも、食べ物扱う店では適切な代物ではない以上、イメージダウンは免れない

綺麗なダンボールぐらい手に入れなかったのか？

「これを見られたら、店の評判はガタ落ちね」

「まあ大丈夫だろ。こんなところまで見る訳ないし・・・」

意外と客はそう言うのに気づくもんだよ？

「・・・見てもきつと見なかった事にしてもらえって」

「そうですね。わざわざクロスを剥がしてアピールするような人は来ませんよね」

「そう願いたいね・・・」

明久・・・あたしら変なことに首突っ込んでるんだから、少しは警戒しておくれ・・・

「・・・飲茶も完璧」

「おわっ！」

「土屋か・・・厨房はどうだ？」

「・・・味見用」

明久の後ろにいつの間にかいた土屋は、木のお盆を差し出したその上には、陶器のティーセットとゴマ団子

「わあ・・・美味しそう・・・」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「・・・(コクリ)」

「では、遠慮なく頂こうかの」

あたし、瑞希、美波、秀吉の4人が手を伸ばし、作りたてで温かい胡麻団子を食べる

「お、美味しいです！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところも良いのう」

「だな・・・」

「やっぱり女の子。甘いものが好きなんだなあ、4人とも」

秀吉も女にすんな

明久、ぶっ飛ばされたいのか？

「お茶も美味しいです」

「本当ね・・・」

瑞希と美波の目がトロンと垂れる。あまりの美味しさにトリップしているね

「それじゃ僕も貰おうかな？」

「……(コクコク)」

さらに残ったゴマ団子を、明久は一口

「ふむふむ、表面はゴリゴリでありながら中はネバナバ。甘すぎず辛すぎる味わいがとても……ンゴパっ!!」

明久の口からありえない音が出て、目がグルンと垂れて白目をむく

「あ、それはさつき姫路が作った物じゃな」

「コラッ! 瑞希! 料理勉強し直したんじゃないのか?!」

そう言っつて瑞希のおでこにデコピンを食らわす
流石に平手打ちはしないよ

「うう……ごめんなさい……」

「うーっす。戻ってきたぞ……って、どうして明久が倒れてるんだ?」

そこへ雄二が戻ってきた

「明久はじゃな……」

「ん? なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ?」

「雄二! ダメ! あっ……」

雄二は明久の食べかけを、あたしの制止も空しく口に入れた

人の食べかけ平気で食うなよ・・・

「・・・大した男じゃ」

「雄二、このバカ・・・」

「？姉貴達が何を言っているのかわからんが・・・ふむふむ、表面はゴリゴリでありながら中はネバナバ。甘すぎず、辛過ぎる味わいがとっても・・・ンゴパっ!!」

2人目の被害者が・・・

「みーずーきー」

「ふえええん。ごめんなさい！」

とりあえず瑞希のおでこが真っ赤になるまでデコピンしてやった・・・

「ふっ。何の問題も無い」

大丈夫だったのか雄二？

「あの川を渡ればいいんだろう？」

おいおいおい・・・

「ゆ、雄二！その川はダメだ！渡ったら戻れなくなっちゃう！」

「帰ってきな、雄二！」

三途の川を見せるとは・・・パワーアップしてないか？瑞希の料理明久が雄二に心臓マッサージをして、あたしは気道確保・・・最近では心臓マッサージさえしてれば人工呼吸しても脳に障害が残る可能性はかわらないって事をニュースでやってたな・・・本当か知らんが

「6万だと？バカを言え。普通渡し賃は6文と相場が決まって・・・はっ！？」

蘇生成功。とりあえず雄二が死ななくてよかった・・・

「・・・瑞希、お願いだから厨房に立たないで。これが一般客に出回ったら確実に営業停止にされるから」

「・・・そうします。本当に、ごめんなさい」

営業停止どころか事件になっちゃっよ・・・

「ところで雄二は、どこに行っておったのじゃ？」

「ああ、ちょっと話しあいにな」

学園長室にて、例の試験科目の指定をしてきたところだろうなでもそんな事を言う訳にもいかないし、適当に誤魔化したな

「ご苦労様雄二。喫茶店はいつでもいけるよ？」

「ばっちりじゃ」

「・・・お茶と飲茶も大丈夫」

ついでにあたしのぬいぐるみの露店も・・・

「よし、少しの間喫茶店は姉貴と秀吉、ムッツリーニに任せる。俺と明久は、1回戦済ませてくるから」

「あれ？あの、吉井君と坂本君も出るんですか？」

「美波には言っただけど、あたしと秀吉も出るよ？ぬいぐるみ宣伝のためにね」

瑞希が雄二と明久に尋ねる

学園長からあたしらはチケットの裏事情について誰にも話すなと口止めをされていた

「そっか・・・」

一応、瑞希の為にも頑張ると言っつて、美波を安心させる

この場に瑞希が居る為、転校を阻止することについては話せない
瑞希は美波以外知らないと思ってるからね

「はいじゃあ解散！雄二と明久は召喚大会がんばれよ」

そう言っつて手を叩き、雄二と明久を送り出した

そのあとを瑞希達がついていき、明久に賞品のプレオープンチケットは誰と行くのか問いただしていた

23話

それから少したって、あたしと秀吉の1回戦

喫茶店はクラスの人と交代して

ぬいぐるみ販売は休業中と看板を立てた

「えー、それでは試験召喚大会1回戦を始めます。3回戦までは一般公開もありませんので、リラックスして全力を出してください」

審判兼立会の先生がそう言った

今日は4回戦までで、明日準決勝と決勝が行われる

1回戦の科目は数学であり、あたしの得意科目である

「ワシはあまり力になれんかも知れんが、よろしく頼むぞい」

「任せなつて」

対戦相手は2年B組の近衛部隊だった2人・・・

「げっ、坂本優紀子っ?!」

あー・・・やっぱりそんな反応になっちゃうよな・・・傷付くなあ・・・

「秀吉、自由に好き勝手に攻めな。あたしがフォローするから」

「わかったのじゃ」

「では、始めてください」

「『『『サモン！』『』『』」

4人の掛け声で、場に召喚獣が姿を現した

青い袴に薙刀という、秀吉の召喚獣

そういえば試召戦争のとき、秀吉の召喚獣はあんまり見てなかったな・・・

Fクラス 坂本優紀子&木下秀吉 数学521&78

VS

Bクラス 元近衛部隊A&B 数学186&201

対戦相手の2人は固まっているとまとめて潰されると思ったのか少し離れている

「んじゃ秀吉、負けてもいいから思いっきりやりな」

「うむ」

そう言って、あたしは点が高いほうに突っ込み一撃で相手を落とした

「秀吉ーちゃんと見ててやるからがんばれー」

「・・・う、うむ」

あれ？秀吉がなぜか引いてる・・・

その後、秀吉が50点ぐらい削って、あたしが止めを刺した

「勝者、坂本、木下ペア」

すまんね・・・ぬいぐるみの宣伝のために一般公開まで負ける訳にはいかないの・・・

「さて帰るか秀吉」

「そうじゃの」

そう笑い合ってステージを去る

「なんか違う意味で悔しい・・・」

後ろからそんな声が聞こえた
なんじゃそら・・・

「マジできつたねえ机だな！これで食べ物扱っていいのかよ!？」

戻ってきた教室で2人を出迎えたのは、騒ぎの声だった
やっぱり隠し通せるものじゃないか・・・

「うわ・・・確かに酷いな・・・」

「クロスでごまかしていたみたいだね」

「学園祭とはいっても、一応食べ物のお店なのに・・・」

周りの客も、それを見て自身のテーブルのクロスを捲りあげる
ここまで騒ぎになるとこの先厳しいな・・・

「何だあいつら？」

「ああ、良い所に来た姉御に木下！」

クラスメイトの1人があたしと秀吉の下に来る

雄二達はあたしらより先に1回戦行ったはずなのに、まだ帰ってきてないのか

「あの様子からして、営業妨害じゃな。まずいぞ優紀子、ここでの悪評はかなり痛手となる」

「たく・・・あたしが対応するしかないか・・・」

「秀吉は雄二を探して指示を仰げ。あいつらはあたしが対応する」

「わかったのじゃ」

「ちょっときつめにいくか・・・」

営業妨害をしているのは2人、中肉中背の坊主とソフトモヒカンの男。

「まったく、責任者はいないのか！このクラスの代表ゴペッ！」

あたしは坊主のほうの顔にごぶしを一発入れて

「私がこのクラスの副代表です。何かご不満な点でもございましたか？」

ニツコリ笑って普段使わない言葉遣いで言った

「不満も何も、今連れが殴られたんだが・・・？」

「それはウチのクラスの代表のモットー、パンチから始まる交渉術でございます」

「ふ、ふざけんなよこの野郎・・・何が交渉ふぎやあつ！！」

ソフトモヒカンが殴りかかってくるが、やってきた雄二に蹴り飛ばされた

「こちらがウチのクラスの代表、そしてキックでつなく交渉術でございます」

そう2人に言ったあと雄二に小声で話しかける

「秀吉にあつたか？」

「ああもうすぐ来るはずだ」

後は雄二に任せるか

「最後はプロレス技で締める交渉術が待っていますので」

つと雄二が2人に言う

「わ、わかった！こちらは夏川を交渉に出そう！俺は何もしないから交渉は不要だぞ！」

「ちょ、ちょっと待てや常村！お前、俺を売ろうと言つのか！？」

夏川に常村ね・・・忘れそうだな・・・

「それで常夏コンビとやら。まだ交渉を続けるのか？」

常夏か、いいセンスしてるじゃないか雄二

「い、いや、もう充分だ。退散させてもらおう」

モヒカンが雄二の剣呑な雰囲気を感じ取って撤退を選ぶ
賢明な判断だな

「そうか。それなら・・・」

大きく頷いた後、坊主の腰を抱え込む雄二

「おいつ！俺はもう何もしていないよな！どうしてそんな大技をげぶるあつ！」

「これにて交渉は終了だ」

バックドロップを決めて平然と立ち上がる・・・流石、雄二だ

「お、覚えてろよっ！」

倒れた相方を抱えて走り去っていくモヒカン
これで1つ問題は片付いた

「流石にこれじゃ、食ってく気はしないな」

「折角おいしそうだったんだけどね」

「食ったら腹壊しそうだからなあ」

あとはこの客を何とか引き止めないと・・・

なぜかいた教頭が立ち上がると他の客が立ち上がり始める

「失礼しました。こちらの手違いでテーブルの到着が遅れていたの
で、暫定的にこのような物を使ってしまいました。ですが、たった
今本物のテーブルが届きましたのでご安心ください」

そう言つて客たちに頭を下げる雄二。その後ろには、Fクラスの男
子数名が立派なテーブルを運んでくる姿がある

あれは・・・演劇部で使っている大道具のテーブルか。なるほど、
こうしたらお客さんの目の前できちんと衛生面を改善した姿を見せ
られる

雄二の指示だろうな・・・

「あれ？テーブル入れ替えているの？」

そんな時、後ろから美波の声が聞こえてきた

「あ、おかえり。美波に姫路さん。1回戦はどうだった？」

「はいっ。なんとか勝てました」

明久が1回戦の結果を聞くと、瑞希が嬉しそうにVサインをしている

「そんなことより、テーブル入れ替えちゃってもいいの？演劇部に

あるテーブルなんて、そこまで多くないでしょ？」

「大丈夫だよ。雄二もちゃんと考てるさ」

美波の指摘にあたしはそう答えた

「それでは、他のテーブルも届き次第順次入れ替えさせていただきますので、ご利用中のお客様はひとまずこちらのテーブルにお移りの上、ごゆっくりとおくつろぎください」

そう締めて、雄二があたしらのところに戻ってきた

「ふう。こんなところか」

小さく息をつく。慣れない丁寧語に疲れたんだな……

「明久2回戦まであとのくらいだ？」

「小一時間つてとこかな」

「ならちやつちやと行くか」

そう言つて雄二と明久は教室から出て行った

大方、色んな所からテーブルを盗んでくるんだらう……
今回は瑞希のためだし、大目に見るか

「さて、あたしらで店の評判を回復させるよ。とにかく笑顔で愛想
良く、だ」

「はい！がんばりますっ！」

しばらくぬいぐるみの販売はできそうにないな・・・
はぁ・・・

24話

雄二が出て行って少したら、クラスメイトがどこからかテーブルを持ってきた

雄二が盗んだのを回収してきたのだろう

そして召喚大会2回戦

教科は英語、対戦相手は3年C組の男2人

審判兼立会人は少し顔の赤い遠藤先生・・・風邪？

「先生？風邪ですか？顔が赤いですよ」

「えっ？だ、大丈夫です。それより、始めてください」

明らかに動揺して大丈夫って言われてもね・・・

「まあいいか、行くぞ秀吉」

「うむ」

「・・・サモン！」「・・・」

Fクラス 坂本優紀子&木下秀吉 英語 296&81

VS

Cクラス 生徒A&B 英語 147&162

「あれって・・・」

「て、鉄槌の魔王……」

対戦相手2人が、あたしの召喚獣を見てそう言った

その異名3年にまで拡がってるんだ……

彼女にしたくないランキングはあたしの独走かもな……

まあ秀吉がいるからいいけど……

その後、2回戦はあたしが対戦相手をホームランにして勝った

「あれ？全然人がいないな？」

「うむっ……風評の改善はしたと言うのに、何故ここまで閑散としておるのじゃ？」

喫茶店に戻ると客が全くいなかった

「あ、優紀姉に秀吉、おかえり。3回戦進出おめでと」

後ろから明久に声をかけられる

だからなんでこいつらのほうが先に対戦終わってるのに帰ってくるのは後なんだ？

「はあ……まあ、ありがと……っでこの状況はなんだ？」

「うわっ……お客が誰もいないや」

「それで、雄二は？……ん？明久は何持ってんだ？」

「雄二はトイレで、これは・・・」

根本恭二写真集・・・題名、生まれ変わった私を見て

「2回戦のキーアイテム」

遠藤先生・・・まさか見たのかな・・・？

「お兄さん、すみませんです」

「いや、気にするな、ちびっ子」

「ちびっ子じゃなくて、葉月ですっ！」

そこへ、雄二の声と一緒に小さな女の子の声が響いた
そこでガラッと扉が開かれ、雄二が姿を現す

「んで、探しているのはどんな奴だ？」

と、雄二は連れて来た少女に声をかけた

「お、坂本。妹か？」

「可愛い子だなーねえ、5年後にお兄さんと付き合わない？」

「俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ」

2人はあつという間に、Fクラスの面々に囲まれた
とりあえず後ろ2人はぶっ飛ばす

「あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですっ」

「お兄ちゃん？名前はなんて言うんだ？」

「あう……わからないです……」

「？家族の兄じゃないのか？それなら、何か特徴は？」

雄二はあたしと同じでメンドくさがりだが、面倒見がいい
明久に対してを除いて……

「えっと……バカなお兄ちゃんでした！」

なんとも凄い特徴だ

「そうか……沢山いるんだが？」

否定できなえな

「あ、あの、そうじゃくて、その……」

「うん？他に何か特徴があるのか？」

「その……すっごくバカなお兄ちゃんだったんです！」

『吉井だな』

……だな

「全く失礼な！僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！絶対に人違い・・・」

「あっ！バカなお兄ちゃんだっ！」

明久の姿を見るや否や、満面の笑顔で駆け寄る少女

その少女はそのまま明久に抱きついて、腹に顔を埋めた

「絶対に人違い、なのか？」

「・・・人違いだと、いいなあ・・・って、キミは誰？見たところ小学生だけど、僕にそんな歳の知り合いはいないよ？」

「え？お兄ちゃん・・・知らないって、ひどい・・・」

明久の言葉を聴いて、少女の顔が歪む

「バカのお兄ちゃんのバカあっ！バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命バカなお兄ちゃんを知りませんか？って聞きながら来たのに！」

子供は時に残酷だなあ・・・無邪気に明久の心をえぐっている

「明久・・・じゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」

「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう？」

「ホラ泣かないで、ぬいぐるみをあげるよー」

今にも泣き出しそうな少女を慰める

1個も売れてないし1個ぐらいいつか・・・

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに・・・

」

ぬいぐるみを持って少女はそう言い、空気が固まる

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「殺るわよ！」

「じぶあつ!？」

突然現れた2人によって明久の首筋に攻撃がはいる

「姫路に島田か。どうやら、勝ったようだな」

と、雄二はいたって落ち着いている

「瑞希、そのまま首を真後ろにひねって。ウチは膝を逆方向に曲げるから！」

「こ、こうですか？」

「はいはい、あんたら食べ物扱う店で暴れんじやないよ！」

また衛生面で文句言われるだろ

「結婚の約束なんて、僕は全然・・・」

「ふえええんっ！酷いですっ！ファーストキスもあげたのにーっ
！」

あーもう！せつかく2人が明久から離れそうだったのに、この子は
なんて事を言うんだ

「坂本、包丁持ってきて！5本あれば足りると思う！」

「吉井君、そんな悪い事をするのはこの口ですか？」

もうイヤ・・・ぬいぐるみ販売に専念させて・・・

25話

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ!」

つと葉月と名乗る少女が美波に声をかける

「ああっ!あの子のぬいぐるみの子か!」

明久がガバツと起き上がりそう言った

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ」

明久の発言にぶうつと頬を膨らませる葉月

「そっか、葉月ちゃんか。ひさしぶりだね。元気だった?」

「はいですっ!」

「それより、よく僕の学校が分かったね?」

「お兄ちゃんこの学校の制服着てましたから」

そう言っつて葉月ちゃんは明久の制服を引っ張る

「あれ?葉月とアキッて知り合いなの?」

「うん。去年ちょっとね。美波こそ葉月ちゃんのこと知ってるの?」

「知ってるも何も、葉月はウチの妹だもの」

「へ？」

へえー美波の妹か・・・

好きな男を振り回すところとかよく似てるね

「吉井君はずるいです・・・どうして美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合いなんですか？私はまだ両親にも会ってもらってないのに・・・もしかして、実はもうお義兄ちゃんになっちゃってたり・・・」

「瑞希、とりあえず落ち着きな」

瑞希もすっかりFクラスに染まった気がする

「あ、あの時の綺麗なお姉ちゃん！ぬいぐるみありがとうでしたっ
！」

「こんにちは、葉月ちゃん。あの子、可愛がってくれてる？」

「はいですっ！毎日一緒に寝てます！」

瑞希も知り合いなんかいつ！

「良かった。気に入ってくれたんだ」

瑞希が嬉しそうに微笑む

「ところで、この客の少なさはどういう事だ？」

雄二の言葉で、明久達は再度辺りを見回した

「そう言えば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ?」

「ん?どんな話かな?」

あたしが葉月の目線を合わせて聞く

「えっとね、中華喫茶は汚いから行かない方がいい、って」

また営業妨害か・・・

「ふむ・・・例の連中の妨害が続いているんだろうな。探し出してシバき倒すか」

「例の連中の妨害って、あの常夏コンビ?まさか、そこまで暇じゃないでしょ」

あの2人が暇つぶしでやってて、営業妨害のみが目的なら・・・

「どうだかな。ひとまず様子を見に行く必要があるな」

「だね・・・少なくとも、噂がどこまで拡がっているのかを確認しないかね」

雄二の言葉にあたしが続く

小学生の葉月が聞いたぐらいだから、かなり拡がってるんだろう

「お兄ちゃん、葉月と一緒に遊びに行こっ!」

「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させなきゃいけないから、あんまり一緒に遊べないんだ」

明久が葉月の頭を撫でている

「むー折角会いに来たのにー」

「なら、葉月ちゃんもつれてってやったらどうだ？」

「そうだな。飲食店をやっている他のクラスの偵察する必要もあるからな」

あたしの提案に対し、雄二からのフォローが入る

「んー・・・そっか。それじゃ、一緒にお昼ご飯でも食べに行く？」

「うんっ」

葉月の表情が先ほどまでと一転して満面の笑みになる

「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね」

美波の口調がいつもと違って優しい。ちゃんとお姉ちゃんやってるんだな・・・

「ふむ。ならば姫路と雄二も一緒に行くと良いじゃろ。召喚大会もあるじゃろっし、早めに昼を済ませてくると良い」

「いいんですか？ありがとうございます。木下君」

「じゃあ行つてらっしゃい。葉月ちゃん、そのぬいぐるみの宣伝よろしくねー」

「わかりましたっ!」

そう言つて5人を送り出す

さて、やっとぬいぐるみ販売に専念できそうだ・・・
でも喫茶店に客が来ないから全く売れそうにないな・・・

結局売れず3回戦

教科は物理、あたしの得意科目

問題なく潰した(クレーターは作ってないよ)

「わし要らなくないかの?」

「いや秀吉がいるから、秀吉のためにがんばってんだよ」

「そ、そうか・・・」

「さて、失った客を取り戻すためにも、何かインパクトが欲しいところだな」

相変わらず教室の中は空席だらけで、とてもうまくいってると思えない光景

悪評が広まっている以上、それを払拭する何かが必要

手っ取り早くそしてインパクト大な方法っていうと・・・

「で、一応用意したのがコレだ。安直だが、効果は絶大な筈」

雄二は刺繍も見事な、水色と白のチャイナドレスを取り出した
そうなるよな・・・というかそんな女物の服をどこで手に入れて来
るんだ・・・

「これなら確かにインパクトはある筈だけど・・・」

「ほう。若干裾が短いような気もするが、これならば確かにインパ
クトはあるじゃろうな。コレを宣伝用に・・・」

「ああ。コレを・・・明久が着る」

インパクトだけは大きいな・・・

「ちよっ・・・！お願い、許して！メイド服の次にチャイナまで着
たら、きつと僕はホンモノだって皆に認識されちゃう！」

明久・・・メイド服は着たんだ・・・

「冗談だ。これは姉貴と秀吉と姫路と島田に着てもらおう」

「あ、なんだ。良かったー」

「わしが着るのは冗談ではないのかのう・・・？」

雄二、あたしはいいけど、あたしの彼氏になんてものを着せよう
すんだ・・・

まあ今のところそれ以外案もないし仕方がないか・・・

「たっだいまー！って、なんだ。アキつてばメイド服脱いじゃったんだ」

「あ・・・残念です。可愛かったのに・・・」

「お兄ちゃん。葉月、もう1回見たいなー」

ちょうど女子3人が帰ってきた

3人とも精神年齢が同じくらいだな・・・
好きな人をいじめる的な意味で

「ちょうど良かった。実は・・・って案が出たんだ、やるか？」

「え！それを着るの!？」

「さっ流石に、それは・・・」

人には着ろって言う癖にな・・・

「やれ、明久」

「オーケー！へっへっへ、おとなしくこのチャイナドレスに着替え痛あっ！マジすんませんでした。自分チョーシくれてましたっ！」

素直に頼めよ

「どうしてまた、急にそんなことを言い出すのよ？前に須川はチャイナドレスを着たりすることはない、って言ってたと思うけど」

「店の宣伝の為だってよ」

美波の質問にあたしが答える

「あと明久の趣味だ。明久はチャイナドレスが好きだよな？」

「大好・・・愛してる」

それに雄二が付け加える

「・・・アンタって本当に嘘をつけないヤツね・・・し、仕方ないわね。店の売り上げの為に、仕方なく来てあげるわ」

「そ、そうですね！お店の為ですしね！」

瑞希と美波がそれぞれ服を手取る

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い・・・？あ、うん！手伝うから、あの服葉月にもちようだい！」

葉月が手伝ったらぬいぐるみの宣伝要員が・・・

「けど、ごめんね。気持ちは嬉しいんだけど、葉月ちゃんの方は数が・・・」

「……！！（チクチクチクチク）」

土屋がどこからともなく現れて、すごい速さでチャイナドレスを作っている

あいつに頼んだらぬいぐるみ60個も楽にできたんだろうな……

「ム、ムツツリーニ！どうしてそんな凄い勢いで裁縫を！？っていうかさっきまでいなかったよね！？」

「……俺の嗅覚を舐めるな」

つ、土屋……

「じゃあ葉月ちゃんこれ持ってお客さん呼び込んでくれない？これは1つしかないから後で返してね」

そう言つて、あたしは召喚獣チャイナドレスバージョンを渡す

これで喫茶店とぬいぐるみの宣伝をまとめてできる
作つてよかったチャイナドレスバージョン

「それじゃ、3回戦が終わったら着替えますね」

「いや、今着替えてくれないか？ 宣伝の意味合いもあるから、できれば頼む」

「「え？」」

2人の声が八モる

「宣伝の為だ。そのまま召喚大会に出てくれ」

ということは・・・

「雄二・・・もしかしてあたしらも・・・？」

「ああ。姉貴と秀吉も次の試合からチャイナドレスで出てもらう
やっぱりね・・・

「こ、これを着て出場しろって言うの・・・？」

「流石に恥ずかしいです・・・」

「お願いだ！」

と言って、明久は頭を下げた

「もしかして吉井君達、私の事情を知って・・・」

「仕方ないわね。クラスの設備の為だし、協力してあげるわ。ね、
瑞希？」

「あ、は、はいっ！これ位、お安いご用です！」

「それならスグに着替えて会場に向かってくれ。大会では自分たち
の所属がFクラスであることを強調するんだぞ」

これなら宣伝効果は絶大だな・・・

「じゃあ、頼むぞ」

しばらくたって・・・

「ただいまー」

「ただいま戻りましたー」

瑞希と美波が戻ってきた

「おかえり、丁度良かった、2人ともホールに回って」

2人が大会に向かった後、あたしと秀吉は2人でチャイナドレスを着てぬいぐるみを持ち、校内を回った

というよりストラップの移動販売をした

そのおかげでストラップはだいぶ売れた。あとはぬいぐるみの宣伝を召喚大会で・・・

移動販売のついでに喫茶店の宣伝もしたので喫茶店は活気を取り戻しつつある

「はいっ」

「オツケー」

2人とも勝ったみたいだし4回戦から一般公開される・・・
やっとないぐるみが売れ始めるかな・・・

25話（後書き）

霧島のメイドとの婚姻届は実印が手に入らなかったなので実行されず
実印の管理は優紀子がやってるので母親に頼んでも意味無し

26話

「では、ゴマ団子2皿と本格ウーロン2つですね？では少々お待ちくださいませ」

なれない言葉遣いでウェイドレスをしながらぬいぐるみの販売をしていたあたしは、ふと明久と秀吉の2人と話す教頭を見つけた

ん？なんでまた教頭が？さっきの営業妨害のとき、真っ先に席を立ったのに、また来るなんて考えにくいな・・・

「姉貴？どうした？」

「いや、ちよつとな・・・ん？」

あたしは明久達を見ている他校の者と思われるガラの悪そうな3人が見つける

明久と秀吉が、美波から何やら指示を受けると、2人して教室の外へそれを見ていた3人が、それを追って出て行った

「雄二、ちよつとここを頼む。それと教頭から目を離すな」

「教頭？なんでだ？」

「勘の域を出ないが、なんか怪しい」

そう雄二に小声で言って、明久達を追って、一路空き教室へ空き教室から声が聞こえ、そこで戸が閉められた

「おい明久ー、サボりか？ならちヨキでシバくぞ」

つと言いなから中へ

そこには、秀吉をかばう明久の姿と、先程明久達を見ていたチンピラ

「ゆ、優紀姉！」

「この女どうする？」

「面倒だから、一緒にやつちまおうぜ！その後お楽しみつてのもありか」

吐き気がするようなこと好き勝手言ってくれるじゃないかクソヤロウ共……

1人があたしのほうに向かってくる……

「いい度胸してんじゃないか！クソヤロウ」

チンピラが繰り出したパンチをかわし、腹に拳を一発

よろけたチンピラを明久達に殴りかかろうとするチンピラに向かって蹴り飛ばす

「あたしのクラスマシに手を出すなんてな！！」

あたしは悪鬼雄二羅刹の姉なんだ……ただで済むと思うなよ……

「おつ、覚えてろっ！」

「テメエの面、忘れねえから！」

「夜道に気を付けろよ！」

チンピラ共が、よろよると逃げ出して行った

「大丈夫か？怪我はないか？秀吉」

「大丈夫じゃ優紀子」

「僕の心配もして欲しいんだけど・・・優紀姉、あの連中何だったの？」

「さっきの営業妨害の続きかもしれないな」

喫茶店の営業妨害、秀吉と明久を狙った襲撃、両方で近くにいた教頭・・・

うーん・・・まだ断定はできないな・・・

「とにかく、戻るぞ」

「はいよ」

「承知した」

喫茶店には、既に教頭の姿はなかった

「秀吉、しばらくあたしから離れるな」

「なんでじゃ？」

「営業妨害に今回の襲撃、これで終わるとは思えないからな。あんたはあたしが守る」

「優紀姉、僕は？」

「あんたは守る側だ瑞希や美波を守れ」

恋人としてかは知らんが、お前もあの2人が好きなんだろう？男なら好きな人を守ってみせな……
って言いたいけど秀吉の前じゃな……

「う、うん……」

イマイチはつきりしないな……
とりあえず雄二に襲撃の報告をした

それからは特に何もなく4回戦の時間

今日召喚大会で唯一ぬいぐるみの宣伝ができる機会

あたし……この対戦が終わったら、ぬいぐるみ販売に専念するんだ……

いよいよぬいぐるみの宣伝ができる

あたしと秀吉はぬいぐるみを抱いてステージに出る

今回の教科は古文、得意とまではいれないがそれなりにできるとい
う程度

対戦相手は・・・

「やほーっ、優子の弟君とその彼女さん。可愛い物持ってるね」

「どこで手に入れたのですか？」

「あたしの手作りだ。Fクラスで売ってるよ」

優子の友達の工藤愛子という人、そして佐藤美穂という人
2人とAクラス戦のときに2戦目、3戦目を戦った人らしい

Fクラス 坂本優紀子&木下秀吉 古文 248&64

VS

Aクラス 工藤愛子&佐藤美穂 古文 295&215

こりゃ不味いかもしれんね・・・熟練度しだいでは・・・

「秀吉、先に点の低い佐藤を潰すから、その間工藤を引き付けつつ逃げる。あの武器だと攻撃方法は限られるからうまく避けて逃げ続けるんだ。カウンターは狙わなくていい、あんなの当たったら一撃で落ちかねん」

工藤の召喚獣の武器は巨大な斧だ・・・あんなの食らったら点で勝つていたとしても一撃死の可能性がある

でも、武器が巨大な分、動きも多少遅くなってるだろうし、機動力は250点相当だろう

攻撃方法も振り下ろすか薙ぎ払うかの2つに1つで攻撃の初速が遅いから回避も簡単

点差的に勝つのは難しいだろうけど引き付けるだけなら持つ！あたしは秀吉を信じてる！

「始め！」

審判兼立会いの先生が試合開始を宣言する

開始と同時にあたしは佐藤に向かって突っ込む

とにかく2人を引き離さないと・・・

佐藤の召喚獣の武器は鎖鎌で、一撃が軽く小回りが利く・・・回避に専念されたら厄介だな

とにかく、あたしは点で勝ってる内に佐藤を落とす！

秀吉・・・生きて逃げ延びてくれよ・・・

「うらあ！」

「くっ！」

鎌を投げってくるかと思ったが投げてこない・・・まだ武器の扱いに慣れていないようだ

それでここまで上がって来れたんだからすごいけど・・・

でも、こっちは観察処分者なんだ、(痛いし宣伝活動のために)負けるわけにはいかない！

Fクラス 坂本優紀子&木下秀吉 古文 225&33

VS

Aクラス 工藤愛子&佐藤美穂 古文 295&0

操作技術の差を前面に押し出して戦い、何発か攻撃を当てて佐藤を倒した

でも、急いで倒すために多少カウンターをもらってしまった

秀吉も掠ったりしたみたいだ・・・
そして残るは無傷の工藤・・・

「やるね、坂本さん優子と戦ったときは全然違うよ」

そりゃそうだ、あれは優子の怒りを静めるためにわざと食らったんだし・・・
かなり痛かったんだぞ・・・

「当たり前だ。あんなの二度とごめんだ・・・っで、まだやるか？」

あんたはあたしに攻撃を当てれないよ？

「うーん・・・勝ちたいからね。続けるよ」

そう言っつて構える工藤・・・
フォロー役の佐藤がないのに続けるとは諦めの悪い・・・
でも、その勝ちを諦めない姿勢・・・いい、最高だ

「秀吉、サシでやりたいんだけど・・・いいか？」

「むう・・・やっぱり、わし要らなくないかの？」

全く秀吉はそんなこと気にして・・・

「あたしが佐藤を倒せたのは秀吉が工藤を引き付けてくれたからだ・・・あとでご褒美あげるからね・・・」

つと優しく言う

ご褒美という言葉赤くなる秀吉・・・

「あの・・・そろそろいい？」

工藤が気まずそうに聞いてきた

「あ、ああ、ごめんね。いいよね秀吉？」

「わかったのじゃ・・・」

よし！秀吉もわかってくれた

「来な！工藤！」

・・・結局、あたしらの勝ちは変わりませんでした

対戦後・・・教室に向かう廊下

「秀吉ーごめんってば・・・」

「いいんじゃないんじゃない・・・どうせ、わしは優紀子に守られるし
かできないんじゃない・・・」

すっかり拗ねてしまった・・・

「秀吉・・・」

あたしは秀吉を後ろから抱きしめる

「そんなこと言わないでよ・・・あたしは・・・」

「ちょっといいかなあー？面貸してほしいんだけど？」

あ？なんだこいつら？あたしらの邪魔するなんて・・・
潰される覚悟はできてんだろうな？

27話

「・・・優・・・紀子・・・優紀子・・・優紀子!」

「秀吉?」

あたしが目を覚ますと秀吉の心配そうな顔があった

ここはどこだ・・・?

チツ縄で後ろ手に縛られてて動けねえな・・・

「やっと起きたか」

「あ?」

何だこいつら・・・何のつもりだか知らねえがぶっ潰してやる・・・

「ゆ、優紀子さん・・・」

あたしと秀吉の他にも瑞希と美波がいて、葉月が男達に捕まってる・

・

この面子って事は・・・

「さてどうする?坂本と・・・吉井だったか?そいつら、この人質を盾にして呼び出すか?」

「待て。吉井ってのは知らないが、坂本は下手に手を出すとまずい。今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしていたらしいからな」

喫茶店の営業妨害か・・・いや雄二と明久を呼ぼうとしてる点から
召喚大会のほうかもな・・・

「坂本って、まさかあの坂本か？」

「ああ。できれば事を構えたくないんだが・・・」

「気持ちはわかるがそうもいかないだろ？依頼はその2人とこの女
を動けなくすることなんだから」

そう言つて1人があたしを指す

「お、お姉ちゃん・・・」

「アンタたち！いい加減葉月を離しなさいよ！」

美波が怒鳴る・・・

「お姉ちゃん、だつてさ！かつわいいー！」

『ギャははははー！』

・・・気色悪い、吐き気がする
ぶっ潰すなんて生温い、ぶっ殺してやる・・・

「・・・灰皿をお取替えます」

・・・土屋？

仕事が早いじゃないか、雄二

「おう。で、このオネーチャンたちどうする？ヤっちゃっていいの？」

「だったら俺はこの巨乳チャンがいいなー！」

相変わらず、この手の奴らは吐き気がするな

「あ、あのっ！葉月ちゃんを放して、私たちを帰らせてください！」

瑞希が男達にそう言う

「だってさーどうする？」

「それはオネーチャンたちの頑張り次第だよな？」

「やつ！さ、触らないで……」

「そいつに触るな……ぶっ殺すぞ……」

あたしがそう言って立ち上がる……

「ゆ、優紀子……？」

「優紀子さん……？」

「ぶっ殺すだってよ？やれるもんならやってみるや！」

男の1人が殴りかかってきた

後ろ手に縛られながらもそれをかわし、体当たりで相手を倒し、あたしも一緒に倒れ……

「あゝ あああああ！」

ゴンッ

倒れる勢いを使って頭突き食らわせる・・・

「テ、テメエ！」

「ゴフッ！」

「優紀子っ！」

倒れたあたしは蹴られて床を転がる・・・

秀吉があたしを叫んだ、その時・・・

ドオンッ！

部屋のドアが蹴り開けられ雄二が入ってきた・・・遅えよバカ

「さ、坂本だ！」

「どづしてここが！？」

「とにかく、来ているならちよつど良い！ぶち殺せ！！」

「・・・」

ドゴォ

雄二は無言で、男達に近づき1人の顔を殴り、ぶっ飛ばした

「テ、テメエ！」

「・・・」

その近くにいたチンピラが雄二の顔面を殴り、お返しとばかりに雄二が顔面に拳を叩き込む

ああ、これはいつもの雄二じゃない・・・中学時代の悪鬼羅刹と呼ばれていた頃の雄二だ・・・できれば二度と見たくなかった・・・

「雄二?! 僕に落ち着けて言ったくせにどうしたんだよ?!」

そう言つて明久が入ってきた

その声は雄二に届かず、雄二は無言でチンピラ共に殴りかかっている・・・

「坂本君・・・?」

「坂本・・・?」

瑞希や美波が怯え始めた・・・まずいな・・・

「坂本よお。この女がどうなってもいいのか?」

そう言つて1人の男があたしを人質に取った

雄二の動きが鈍る・・・

「雄二! あたしにかまっ・・・!」

「黙れっ！」

あたしに構うなと言おうとすると男に頭を押さえつけられ止められる

「大人しくしているよ？さもないと、ヒデエ傷を……」

「……負うのはお前」

男の後頭部を、土屋がクリスタルの灰皿で殴った

「お、お姉ちゃん！お姉ちゃん！」

「葉月っ！よかった……怖かったよね……？」

男共があらかた伸され、あたしの縄も解かれ、瑞希達も解放されたのに雄二がまだ喧嘩をやめない……

「雄二もつやめな！」

あたしが言葉で雄二を止めようとするが全く止まらない……
チツやっぱりあたしの声も届かないか……こんな雄二を止めるの
久しぶりだ……

「いい加減にしろおおおおお！」

男をマウントポジションで殴ってる雄二を背中から蹴り飛ばす
飛ばされて仰向けに倒れた雄二にあたしが乗りかかり、両腕を押さ
えて……

一応目上でもこんな厄介ごと持ち込んだ人間に払う礼儀なんざ坂本家にはないんだよ

「用事もくそも・・・この一連の妨害の原因は、あのババアにある筈だ。事情を説明させないと、気がすまん」

「ババアに原因が・・・えええっ!?!」

「何じゃと!?!」

事情を知らない秀吉はともかくなんで明久が驚くんだよ・・・

「あ、あのババア!僕らに何か隠してたのか!」

「・・・やれやれ。わざわざ来てやったのに、随分とご挨拶だねえ、ガキどもが」

と、ここで学園長が扉を開けてやってきた
秀吉だけが立って礼をした

「来たかババア」

「出たな諸悪の根源め!」

「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい?それに1人増えてるさね」

「召喚大会に関係しそうだし、あんたのくだらん厄介ごとに巻き込まれたんだ。話くらい聞かしてやりたい」

学園長に秀吉のことを言う

「そういうことらしい・・・まあ黒幕ではないだろうが、俺達に話すべき事を話してないのは充分な裏切りだと思っが？」

「ふむ・・・やれやれ、賢い奴だとは思っていたけど、まさかアタシの考えに気がつくとは思わなかつたよ」

雄二を甘く見たな学園長

「最初の取引の時点でおかしいんだよ、あんなのあたしじゃなく、Aクラスの奴にでも頼んだほうが確実だし、そもそも教室の改修に関して渋るなんて教育者としてありえない。こんなくだらない教育方針のせいで生徒が病気になるたら裁判が起こるぞ。学園側、ましてやその長が反対するなんて普通はありえない。まあ学園長様は教育者としての常識に欠けているようですがね」

あたしが嫌味を言う

雄二じゃなくてもこんなことあたしでもわかる・・・

「つまりは優紀子らを召喚大会に出場させる為に、わざと渋ったと言っ事じゃな？」

「そう言う事だ。あの時俺がババアに1つの提案をしたのを、覚えてるか？」

「提案？えーつと」

「科目を決めさせろつてヤツだ」

「なるほどね。アレでアタシを試したってワケかい」

「ああ。めぼしい参加者全員に同じような提案をしている可能性を考えてな、もしそうだとしたら、俺達だけが有利になるような話には乗ってこない。だが、ババアは提案を呑んだ」

やっぱりあの時裏を探っていたのか

「じゃあ学園祭の喫茶店ごときで営業妨害が出たり、明久と秀吉を狙ってチンピラが襲いかかったり、あたしらが勝ち上がったら困る奴がいるってことか？」

「ああ。それに何より、俺達の邪魔をしてくる連中が姉貴達を連れだしたのが決定的だった。ただの嫌がらせなら、ここまではしない」

「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかったのか・・・すまなかつたね」

つと頭を下げる学園長

常識はないが志はあるってか

「アンタ達の点数だったら、集中力を乱す程度で勝手につぶれるだろうと最初は考えていたのだろうけど・・・目論見が完全に潰されて、焦ったんだろうね」

「さて、ここまでであった以上全部話^仕せや・・・あんたがあたしらを選んだ本当の目的を」

「はぁ・・・アタシの無能をさらすような話だから、出来れば伏せ

ておきたかったんだけどね・・・」

そして学園長が真相を語りだした

学園長は事の真相を話し始める・・・

「アタシの目的は如月ハイランドのペアチケットなんかじゃないのさ」

「ペアチケットじゃない！？どういうことですか!？」

「腕輪の方ってことか？」

「そう。アタシのとっちゃあ企業の企みなんかどうでもいいんだよ。アタシの目的は白金の腕輪との方なのさ」

白金の腕輪・・・これには2つの種類があり、1つはテストの点数を半分してもう1体の召喚獣を作る腕輪。もう1つは教師の変わりに立会人になって召喚フィールドを作ることのできる腕輪。召喚フィールドの科目はランダムで選択される

「そうさ。その腕輪をアンタらに勝ち取って貰いたかったのさ」

「僕等が勝ち取る？回収して欲しいわけじゃなくて？」

「あのな・・・回収が目的だったら俺達に依頼する必要はないだろう？そもそも、回収なんていう真似は極力さげたいだろうし、な」

「本当にアンタは頭がよく回るねえ・・・そうさ。できれば回収なんて真似はしたくない。新技術は使って見せてナンボだからね。デモンストレーションもなしに回収なんてしたら、新技術の存在自体

疑われることになるさね」

「それで、何でその白金の腕輪を手に入れるのが僕等じゃないとダメなんですか？」

「・・・欠陥があつたからさ」

苦々しく顔をしかめる学園長

技術者にとっては新技術の欠陥は耐え難い恥じである。それを生徒に明かすのだから無理もないかもしれない

あたしも作つたものにダメなところがあつたら悔しいし・・・

「その欠陥は俺達であれば問題ないのか？」

「そうさ。アンタたちが使うなら暴走が起こらずに済む。不具合は入出力が一定水準を超えたときだけだからね。だから他の生徒には頼めなかつたのさ」

「なるほどな。得点の高い優勝候補を使えないわけだ」

だから雄二達のような優勝の可能性を持つ低得点者が選ばれたわけか・・・

あたしらは優勝したらいけないのかな・・・

「えーっと、つまり・・・？」

「つまり白金の腕輪は、バカにしか使えないってことだ。そして学園長が選んだバカがあんたら」

「何だとババア！！！」

「説明されぬとわからん時点で、否定できないと思うんじゃないか？」

秀吉のツツコミで、明久は苦々しい顔をした

「2つある腕輪のうち片方の召喚フィールド作成用はある程度まで耐えられるんだけどねえ・・・もう片方の同時召喚用は、現状のまだまだと平均点程度で暴走する可能性がある。だからそっちは吉井専用にと」

やっぱりあたしらは優勝しちゃダメか・・・

「雄二、これは褒められていると取っていいんだよね？」

「バカにされてんだよ！」

「なんだとババア！」

「いい加減自分で気づけ！」

「あんた黙ってな！話が進まない」

あんたは、はつきりとバカって言わないと気付かないのかい？

「そうか。そうになると、俺達の邪魔をしてくるのは学園長の失脚を狙っている立場の人間・・・他校の経営者とその内通者といったところだな」

「雄二、そうやって僕を会話から置き去りにするのはやめて欲しいな？」

「……だから、あたしらの邪魔をするってことは腕輪の暴走を止められると困るといふことだ。そんな学園の醜聞で得する奴は、この学校に生徒を取られた他校の経営者くらいしかない」

ちつとは頭使えよ……

「ご名答。身内の恥を晒すみたいだけど、隠しておくわけにもいかないからね。恐らく一連の手引きは教頭の竹原によるものだね。近隣の私立校に出入りしていたなんて話も聞くし、まず間違いないね」

「となると、わしらの邪魔をしてきた常夏コンビや、例のチンピラは……」

「教頭の差し金だろうな。協力している理由はわからんが」

教頭なんだ、推薦ぐらい勝手に出したりできるだろうな

「あのさ、コレって……かなりまずい話じゃない？」

「そうだ。文月学園の存続がかかった話だ……あんたらが優勝できなかつたら……極端な話、学園はつぶれる」

試召戦争と試験召喚システムは、その特異な教育方針と制度で存在自体の是非が問われているものだ。そんな状態で暴走なんていう問題が起きたら、学校そのものの存在意義も問われることになる

「よし、聞きたいことは聞けたな。じゃあ帰るぞ秀吉。ああ、そうだ……」

そしてあたしは学園長に1つ要求をして、秀吉と教室から出ていった

帰り道・・・

「・・・」

「・・・」

はあ・・・まだ秀吉の機嫌が直ってないのかな・・・

「なあ秀吉・・・」

「な、なんじゃ・・・」

なんか素っ気無いな・・・

「4回戦のこと・・・まだ・・・」

「・・・」

無言・・・か・・・

「わしは・・・優紀子とつりあっておるのかのう・・・」

「秀吉？」

「わしは守られてばかりじゃ・・・」

秀吉・・・

「あんだだっちゃんとおたしの事を守っているんだよ・・・Bクラス戦のとき、あたしのことを気にかけてくれて・・・なにもあたしのようにやるだけが守ることじゃないよ」

「優紀子？」

「あんたはちゃんとあたしを支えて、守ってくれたんだよ。だから・・・」

あたしは秀吉を抱きしめ・・・

「自信を持って、あたしの隣にいて・・・」

つと囁いた・・・

次の日、あたしと雄二は秀吉と優子を迎えに行つてから学校に言った
昨日の一件から1人で登校するのは危険と判断したからだ

優子も秀吉と似ているから間違えられる可能性があるのと一緒に登
校した

秀吉はまだ昨日のことを気にしてるようだ・・・
やっぱり言葉だけじゃどうしようもないか・・・

「ったく・・・姉貴のせいで朝一でテストを受けなおさないといけ
なくなつたじゃないか・・・」

「どうせ決勝科目のテストを受け直すんだろ？そんなにかわらねえ
じゃないか」

昨日あたしが学園長にした要求のは準決勝科目の変更

最初、保健体育だったのをあたしの得意な物理に変え、保健体育教
師を学園警備に駆り出し、全教科の召喚フィールドを形成できる補
習教師の鉄人も警備に、同じく全教科召喚フィールドの形成ができ
る学年主任も学園長が適当な理由を付けて召喚大会準決勝の立会い
ができないようにした

「でも優紀子達が学園を左右することに巻き込まれるとはね・・・
」

「あたしらじゃなく雄二らだな・・・あたしと秀吉が優勝してもダ
メだから」

優子には昨日事情を話してある

秀吉を送り届けたときに全て話して準決勝で雄二達を勝たしてくれるように頼んでおいた

霧島にも電話で頼んだ・・・渋られたけど、お前が勝つと雄二が守ろうとするものが壊れると脅した・・・

「勝ち確定してんだからいいじゃねえか。あたしらの相手は常夏だからガチ勝負で絶対負けれない・・・それよりマシだろ」

「まあな・・・っで、常夏コンビには勝てそうなのか？」

「ぶっ潰ししてやる、文字通りな」

あたしの召喚獣なら召喚者ごといけるしな・・・

「警察沙汰は勘弁してくれよ・・・」

「チツ・・・努力はするよ」

優子と別れ、明久と4人で補給試験を受け終わって教室に戻ると瑞希達が来ていた

「4人とも早いですね」

「朝一番でテストを受けてたからね。ふわぁ・・・」

「確かに、急遽準決勝の科目が変わったしな・・・きついな・・・」

瑞希の言葉に明久とあたしが返す

あたしを変させた、なんて言えない

「でも、どうして急に科目が変わったのかしら」

「昨日羽目はずすぎた生徒いたり、チンピラが学園に入ったから警備を強化するんだとさ……」

「そ、そう……」

美波の疑問にあたしが答えると美波は心当たりがありすぎるのでスツと納得した

召喚大会準決勝第2試合

雄二達はちゃんと決勝に進んだ

あたしは……こいつらを潰す！

「秀吉……ごめん、今回囿になってくれないか？それも敵諸共倒される囿に……」

「優紀子……わかったのじゃ。どんな形であれ頼ってくれて嬉しいぞい」

《それでは準決勝戦を始めたいと思います。出場選手は入場してください》

そしてあたしらはステージに出た

満員の客の前に立つあたしと秀吉

むこう側からは常夏コンビがやってくる

「なんだよ、2-Fが相手かよ」

「これなら楽勝だな！」

「弱い犬ほどよく吠えるとはよく言ったもんだ・・・」

「テメエっ、先輩に向かってなんだその態度は？」

「長く生きてるだけのクズに払う敬意も礼儀もねえんだよ！」

「ああっ!？」

あたしの挑発に、常だか夏だかが睨んでくる・・・

「君たち！何をしていますか!？」

それを立ち会いの教師に見咎められリアルファイトは防がれる

「じゃあ秀吉、突っ込んで注意を引いてくれ。あたしが一撃で仕留める」

「うむ」

「先生ー！」

「なんですか？」

「ステージの外からフィールド形成してくれませんか？思いつきり

動きたいので」

そう言っただけの先生を避難させる

先生は、わかりましたと言っただけの外からフィールドを形成した

「サモン！」

2 - F 坂本優紀子 & 木下秀吉 物理 548 & 97

VS

3 - A 常村勇作 & 夏川俊平 物理 210 & 193

「なっ・・・!？」

「Fクラスだから楽勝なんだろう？もちろん勝てるよな？男が一度言っただけを覆したりはしねえよなあ!!」

「始め！」

開始と同時に秀吉が召喚獣だけを2人に向かって突っ込ませる
常夏が秀吉の召喚獣に気を取られてる隙に

「サードモード！」

腕輪発動、ヘッド部を巨大化させる・・・

その大きさは召喚フィールドをほぼ全域叩き潰せる大きさで・・・

「ちよっ!!！」

「楽勝なんだろう？だからこっちの本気でいかしてもらおうぞ！」

「そんなもの振ったら、お前の相方だって・・・」

「手段も選ばず、なあっ！」

「「うわあああああー！」」

常夏が悲鳴を上げて逃げ始めるがもう遅い・・・というか逃げ場など無い！

「だああありゃああああー！！！！」

ドシンッ！！！！！！！！

あたしの召喚獣の一撃でステージにヒビが入り、学園中が揺れる
攻撃で起こった風で常夏が壁にぶつかった

「ゲホッゲホッ・・・物理干涉？観察処分者？」

「殺す気か？」

あら？知らなかったのか？

あの異名が3年にまで拡がってるから知ってると思っただけがな・・・

あの2人が情報通だったのか？でも教頭が知らないはずが無いし・・・

常夏が教頭にとって、こんな程度の存在だったってことか

「そつだ！あたしは観察処分者だ。今の一撃、あたしがその気ならあんたら今頃死んでただ。そのことを肝に銘じてこれから精々生

きるや」

そう言ってあたしは点数表示を確認する・・・

2 - F 坂本優紀子 & 木下秀吉 物理 3 4 7 & 0

VS

3 - A 常村勇作 & 夏川俊平 物理 0 & 0

勝ったことを確認して秀吉と一緒にステージから去る

危険行為とかで失格かもしれんけど

そんなのどうでもいい・・・

30話

準決勝から2時間・・・

《さて皆様。長らくお待たせ致しました！これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！》

いよいよ召喚大会決勝・・・

聞こえてくるアナウンスの声は聞いたことの無い声
プロでも呼んだか？

《出場選手の入場です！》

アナウンスの指示で、雄二達が入場する

《2年Fクラス所属、坂本雄二君と、同じくFクラス所属、吉井明久君です！皆様拍手でお迎え下さい！》

雄二達に盛大な拍手が浴びせられます

《なんと、最高成績のAクラスを抑えて決勝に進んだのは、2年生の最下級であるFクラスの生徒コンビです！これはFクラスが最下級であるという認識を、改める必要があるかもしれません！》

いい事言うじゃないが、流石プロ

《そして対する選手は・・・》

雄二達が定位置に着き、雄二達の対戦相手が紹介される・・・

《2年Fクラス所属、坂本優紀子さんと、2年Fクラス所属、木下秀吉君です。皆様、こちらで拍手でお迎えください!》

結局準決勝はあたしらの勝ちで確定した

物言いが無かったわけじゃないが、あたしを観察処分者にしたのは学園だし、常夏も怪我をしたわけじゃないと言うことで棄却された

《なんと、こちらで最高成績のAクラスを抑え決勝に進んだのは、吉井明久君と坂本雄二君とのクラスメイトであるFクラスの生徒コンビです! 決勝がFクラス1色とは、これは流石に驚きを隠せません! さらに坂本優紀子さんと坂本雄二君は双子の姉弟! 決勝で姉弟対決です! これは・・・》

「たたく余計なこと言うんじゃないよ・・・あとで八百長とか言われたらどうするんだよ」

《それでは、ルールを簡単に説明します。試験召喚獣とは・・・》

ルールの説明が入るが、4人ともすでに周知のことだから無視

「わかっておったとは言え、雄二と明久が敵となるのはの」

「ああ。だが勝負は勝負だ、勝たせてもらおう」

「明久、日本史は数学や物理ほどできないから純粋な操作技術勝負だ」

「うん、負けないよ」

試合前に握手をして会話をする

秀吉には適当なところで雄二に負けるように言った
八百長と思われないように、その分あたしは明久とガチでやる
観察処分者としての意地とプライドの一戦

《それでは試合に入りましょう！選手の皆さん、どうぞ！》

立会いの先生の指示で開始線に移動する・・・

「秀吉・・・明久との勝負・・・瑞希の転校とかぬいぐるみの宣伝
とか全て捨てて勝ちにいく。だから、あたしが勝つって信じてくれ」

「優紀子・・・？うむ！わかったのじゃ！信じるぞ！」

秀吉が力強く返事をして頷いた
そして4人同時に叫ぶ

「！！！！サモン！！！！」

2 - Fクラス 坂本優紀子 & 木下秀吉 日本史 2 4 1 & 8 3

V S

2 - Fクラス 吉井明久 & 坂本雄二 日本史 2 6 6 & 3 1 5

それぞれの召喚獣が出てくる・・・

改造制服を着て、木刀を持った明久の召喚獣

こちらも改造制服を着て、メリケンサックを持った雄二の召喚獣
よくまあこんな装備で決勝まで来れたな・・・

「点数で明久に負けるなんてな」

「雄二が日本史を熱心に勉強してたから、便乗して一緒にやったんだよ。大半教えてもらったけど」

「こいつはこいつで、自主的にやってたみたいだな。正直、すごい集中力だったぞ？」

「決勝戦！始め！」

立会いの先生がそう合図をした

「らあっ！」

「ぐっ！」

開始と同時に明久に突っ込みハンマーを振り下ろす

明久は木刀でハンマーの柄を受ける・・・

その衝撃で明久の点数が減った

「やっぱり重いね」

「ったりまえだ！」

木刀が傾き、ハンマーの柄が木刀を滑る

あたしはその勢いに逆らわず、ハンマーをぶん回し、頭を狙うしかしマトリックス風にかわされ、あたしに隙ができる・・・

明久は木刀で攻撃ができないのであたしに蹴りを入れてきたそれを食らって距離が離れる

明久は無理な体勢で蹴ったから尻餅をついていた

V S

2 - Fクラス 吉井明久 日本史 252

それから何回か激しく打ち合い・・・

いつの間にか雄二と秀吉のほうは決着がついていた

「ハア・・・ハア・・・明久・・・」

「ハア・・・なに？」

息を切らしながら話しかける

「次の一撃で決めよう」

「わかった」

そう言ってお互い構え・・・

「「だあああああ！」」

同時に動き出した

明久は突っ込みながら木刀を上段に構え

あたしもハンマーを両手に持って頭上に振りかぶる

そしてほぼ同じタイミングでお互いの得物を振り下ろす

その軌道は重なって・・・

「だああありやあああああ！！！」

「ブツち抜けええええええ！！！！！」

ハンマーのヘッドが木刀の切っ先に当たり・・・
木刀をへし折った・・・
そのままハンマーは頭に当たり・・・

2 - Fクラス 坂本優紀子 日本史 4 3

V S

2 - Fクラス 吉井明久 日本史 0

明久の召喚獣は消えた

「ぎゃあああああ！頭が！！」

のた打ち回る明久をほつといて・・・

「雄二！」

2 - Fクラス 坂本優紀子 日本史 4 3

V S

2 - Fクラス 坂本雄二 日本史 1 3 2

この点差なら一撃で負けるな・・・

雄二に突っ込む

「姉貴だろうが手加減はしない！」

「食らえええええ！！」

雄二はあたしがハンマーを振ると綺麗に避けて・・・

「すまんな姉貴」

腹に拳を一発決めて落とした

《吉井・坂本ペアの勝利です!》

歓声が響き渡り、勝者のコールが告げられた

あたしは疲労と痛みのフィールドバックでその場に座り込んだ

「優紀子?!」

「姉貴!大丈夫か?!」

秀吉と雄二が心配して駆け寄ってくる

「大丈夫だ。それより雄二、勝者なんだからあたしに構わず観客の歓声に応えてやんな」

そう言っつて秀吉の肩を借りて立ち上がりステージを一旦去る
観客から見えないところに行っつて・・・

「秀吉・・・勝ったよ。あんたが信じてくれたから勝てたよ」

「優紀子・・・?!」

そう言っつて抱きつきキスをした

30話(後書き)

この辺りは勢いで書いてます

31話

あの後授賞式や腕輪のデモンストレーションを終えて
あたしらは教室に戻ってきた

「お兄ちゃん！ すつつつごい格好よかったよ！」

「ぐふっ！は、葉月ちゃん・・・今日も来てくれたんだ。ありがとう」

終わった帰り、すぐに葉月が明久に抱きついて・・・というか、体当たりをした
流石、美波の妹

「4人とも、お疲れ様。特に優紀子とアキの勝負は、すごかったわね」

「ガチだったからな」

「お兄ちゃん、すごいですーっ！」

「葉月つてば、アキが困ってるわよ？」

明久はやんわりと葉月を引き離した

「あの、吉井君！」

「あ、姫路さん。見てくれた？」

「はいっ！とっても素敵でした！今度土屋君に、ビデオをコピーして貰おうと思う位！」

「……（プイっ）」

瑞希の眼がきらきらと輝き、もう興奮していた

それとあたしが土屋に目を向けると、本人は目をそらす撮ってなさそうだな……

「そ、それで、ですね……」

「ん？ああ、なにかな？」

明久と話している瑞希が、体の前で指をもじもじとしている

「後夜祭の時、お話があるので駐輪場まで来てください！」

顔を赤くしてそう告げると、ダツシュでウエイトレス業務へと戻った

「いよいよ告白か？美波も頑張らないとね」

「話し込んでいるところ悪いのじゃが、喫茶店を手伝うぞ？わしらの優勝と準優勝のおかげで、客が増えて大変そうじゃ」

そうだ！これがぬいぐるみを売る最後のチャンスだから頑張らないと……

《ただ今の時刻をもって、清涼祭の一般公開は終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください》

「ふうっ……」

「お、おわった……」

「売り切った……」

「じゃが流石に疲れたのう……」

「……（コクコク）」

放送を聞き、体から力が抜けて行った5人

メイン格の4人は、特に注目も浴びた為疲れも一際である
あたしの場合にはぬいぐるみで赤が出なくて安心して力が抜けたんだ
が……

「そう言えば、姫路さんのお父さんはどうしたんだろ？」

「ん？お義父さんが気になるのか？明久？」

「なっ！？べ、別にそう言う訳じゃなくて！」

「後夜祭の後で、話をしに行くと言っておったのう。結論はその時
じゃな」

喫茶店も儲かったし大丈夫だろ

「じゃ、ウチらは着替えて来るわ」

「そつだな、秀吉も着替えるぞ」

あたしら女性陣と秀吉が更衣室に向かおうとして

「ええっ、どうして!?!」

「どうして、って言われても・・・恥ずかしいからに決まってるでしょ?」

「すみません。すぐ戻りますので」

2人はあたしらを置いて、先に行ってしまった

「あたしらも行くぞ秀吉」

「うむ」

「させるかつ!せめて2人だけは着替え・・・」

「潰されたいか?」

止めようとする明久をあたしが黙らす

「おいおい、遊んでないで学園長室に行くぞ?」

「わかった。着替えていくから、先行つてな」

あたしと秀吉が着替えて学園長室に向かっていると携帯に雄二から電話が・・・

内容は常夏に学園長室での会話を盗聴されて、今追っているとのこと
雄二のことだから真っ先に放送室は押さえるだろう・・・
ならあたしは・・・

「秀吉、校庭に出るぞ！」

「校庭？なんでじゃ？」

「放送室は雄二が押さえるだろうから他の放送設備・・・召喚大会会場だ！」

プロのアナウンス雇ったってことはマイク等放送設備ある・・・

「わかったのじゃ！」

召喚大会会場・・・

「ここじゃないのか？」

「そつみたいじゃな・・・」

「無駄足か・・・クソッ！」

そして校舎に戻ろうとした、その時・・・

ドオーン！！パラパラ・・・

新校舎の屋上で打ち上げ花火が爆発した

「外したぞ明久！もうちょい下だ！」

そんな雄二の声が校庭から聞こえてくる・・・

「いけ、点火っ！」

「了解！」

ひゅー・・・ドオン！

2発目で屋上のスピーカーが吹き飛ばした・・・
屋上に放送設備設置して流すつもりだったのか
にしてもなんてバカなことを・・・

「雄二達が何とかしたみたいだから打ち上げ行くか」

「そうじゃな・・・」

ここで注意しに行つて共犯とかにされたらイヤだし立ち去るか・・・
あたしらは気付かれないように打ち上げ会場に行った

その後、遠くから2回花火の爆発音がして、2回目の直前に鉄人の
と思われる怒鳴り声、直後の何かが崩れる音が聞こえたが気にしな
い・・・あーあー聞こえない聞こえない

「む。やっと来たようじゃな？ 遅かったのう」

「・・・先にはじめておいた」

「ああ、ごめんごめん、ちょっと鉄人がしつこくてさ」

「当たり前だ。あんなこととして、警察に突き出されなかっただけマシだろ」

打ち上げが行われている公園で明久と雄二を迎える
2人共、顔の面積が倍になってる・・・

「しかしお主ら、もはや学園中で知らぬ者はおらんほどの有名人になってしまったのう」

「・・・(コクコク)」

「あたしのと看より被害額は上だろつな」

「・・・コイツと同じ扱いだとは不本意だ」

「それは僕の台詞だよ・・・」

「でも、あれだけのことをやっておいて、退学どころか停学にすらならないんだもの。妙な噂が流れて当然でしょ？ ウチだって気になるし」

美波はそう言いながら明久と雄二にジュースの入った紙コップを手

渡す

あたしときは試召戦争の作戦と言う理由があったしな・・・

「ん、ありがと。そういえば、お店の売り上げてどうだったの？」

明久はジュースを飲みながら、美波に質問する

「そうね。凄いつて程じゃなかったけど、たった2日の稼ぎとしては結構な額になったんじゃないかしら」

美波が明久に収支の書かれたノートを見せる

「ふむ、どれどれ・・・」

雄二が明久の後ろからノートを覗き込む

「この額だと、机と椅子は苦しいな。畳と卓袱台がせいぜいだ」

「やっぱり、出だしの妨害が痛かったな・・・」

「すいまえん。遅くなりました」

つと、そこへ瑞希が遅れてやってきた

「瑞希、どうだった？」

「はいっ！お父さんもわかってくれました！みんなの協力のおかげですー！」

どうやら転校は阻止できたようだ

その言葉を聞いて、ホッと一息つく明久

「姫路さん、お疲れ様」

「あ、吉井君……」

明久の顔を見て、一瞬だけ瑞希が微妙な表情を見せた
そういえば明久、お前駐輪場行ったか？

「すみません。私も飲み物を貰っていいですか？ 沢山お話したので
のどが渴いちゃって」

「あ、うん。どうぞ」

「ありがとうございます」

明久が持っていた紙コップを瑞希に渡す
それをためらいなく一気に飲み干す瑞希……

「間接キスだな……」

そう言っつて、あたしは近くにあつた缶を開けて一口飲んだ
ん？ 少し苦いな……

32話

読者のみんなこんにちは、いやこんばんわじゃな・・・木下秀吉じゃ
今回はわしの視点で送るぞ・・・
つと現実逃避を試みる・・・

「秀吉いー」

わしは今優紀子に抱きつかれておる・・・泣かれながら
ムツツリーニが鼻血でダウンしとるがまさか百合とか言わぬじゃろ
な？

それに、わしを散々女扱いしとるFFF団が殺気立ってきよる・・・
雄二が睨みを効かせて黙らせておるが・・・

優紀子からは少しアルコールっぽい匂いがするからお酒でも飲んだ
のじゃろう

しかし優紀子が泣き上戸とは・・・

「あたしのこと好き？」

「ゆ、優紀子。す、好きじゃぞ」

他の者があるのに・・・恥ずかしいのじゃ・・・

「本当か？嘘じゃないな？」

いつもの自信に満ちた風格はどこへやら・・・これじゃ普通の女の
子じゃな・・・

まあいつもの優紀子も普通の女の子なんじゃがな・・・ただ面倒見

が聞いてだけで

「嘘じゃないぞ。わしは優紀子が好きじゃ」

大事なことなのでもう1回言ってみるのじゃ・・・

「でも・・・昨日のことまだ気にしてるでしょ・・・?」

む・・・やっぱりわかるか・・・

確かに、あんまり頼りにされてないことを悩んでおるのじゃが・・・

「あたしはお姉ちゃんだから、頼りにされても頼ることができないんだ・・・何もできない情けないお姉ちゃん、なんて思われるのが怖くて・・・」

難儀な性分じやの・・・

「優紀子、わしはまだ弟分なのかの？彼氏じゃなかったのかの？」

「・・・彼氏」

「じゃったら頼ってもいいんじゃないかの？女が恋人の男に頼る、普通のことじゃ。それともわしは頼りないかの？」

「そんなことないよ・・・秀吉は・・・」

「わしは？」

「初めて・・・姉という枠を取っ払って対等に・・・付き合いたいと思った人だから・・・」

優紀子……

「秀吉……ずっと傍にいて……ZZZZ」

寝たか……

召喚大会と喫茶店の疲労にアルコール……無理もないの……

「秀吉」

優紀子の寝顔を見てると雄二に声をかけたれたのじゃ

FFF団を抑えてたはずじゃが……

標的が明久に変わったみたいじゃから、やめたみたいじゃな……

「姉貴を頼むぞ……泣かせたら、秀吉だろうと容赦はしないからな……」

「う、うむ……肝に銘じとくのじゃ」

そう言つて、雄二は優紀子をおぶって帰っていったのじゃ……

あの姉弟は本当に通じおうとするの……

「さて……わしも帰るかの……」

遅くなると姉上が怖いからの

そつえば初めて優紀子と会った時に姉上の愚痴を言ったのじゃつたな……

〈回想〉

「雄二！昼飯持ってきたぞ」

「ああ姉貴、今行く。あとでな秀吉」

「おつ雄二、可愛い友達ができたな。お邪魔だったかな？」

「む、わしは男じゃぞー！」

「わかつてるよ。男子制服着てんだから」

「それでも男装じゃとか言うものはおるがの・・・」

「なんだ悩んでんのか？相談のるぞ？昼飯一緒に食うか？」

「いい姉上じやのう雄二・・・」

その後悩みを言うと・・・

「そんなことか・・・あたしも男っぽいとか言われたりするぞ。中学時代喧嘩とかしてたからな。告白はされんけど・・・まあ気にすんなよ、さらに女に見られるぞ？」

「でも姉上が不機嫌になるのじゃ」

「男だろ、悩むな。女の嫉妬くらい付き合ってやれ」

く回想終わりく

そのドンツと自信に満ちた風格に、わしがどれだけ女々しかったか反省したものじゃ……

あれ以来ウジウジ悩むのはやめたが……
結局優紀子のアドバイスはあんまり効果はなかったの……

あれから優紀子と話すようになったのじゃが、わしは部活が忙しくて話す時間は少なかったのう……
話してるときは弟扱いでそれが妙に悔しかったものじゃ……
今思うとあのときから好きになってたのかもしれない……
家族以外の女子で初めて異性と認めてくれた。でも男じゃなく弟と扱われるのが悔しかったのじゃろうな……

そして2年になって、同じクラスになったのじゃ。Fクラスの教室に入ったとき優紀子がいたのは驚いたぞい。Aクラスも狙えると言われていたからのう……

姉として副代表としてクラス代表の雄二を支えて……
姫路を料理の事で叱って……

Bクラス戦のときはフィードバックの事を隠して戦って、さらには校舎の壁まで破壊して……

後から聞いたのじゃが、あれは姫路と明久のためにやったらしいの
そんな優紀子を好きだと自覚して、同時に心配になった……

そしてAクラス戦……姉上に連れて行かれそうになったわしを助けてくれた。あのまま連れて行かれてたら、きつと腕の関節を全て外されていたじゃろう……

優紀子はわしを庇って、姉上の怒りが自分に来るように挑発までした……姉上の怒りを一身に受けて、でも副代表として流れを作る

ために勝った

姉上との勝負が終わった後、2人っきりの教室で告白されたときは嬉しかったが・・・不安じゃった・・・

わしは優紀子に相応しいのか、優紀子の隣にいていいのじゃろうか・

・
そう思ったが気付いたら、わしも好きじゃと言っていた・・・

付き合ってからデートもしたが、わしの扱いはそんなに変わってなかった

基本優紀子は全て自分でやってしまう。全く頼りにされてない・・・
学園祭で儲けて記念になる物を買おうとか言って1人でぬいぐるみを大量に作ったり、召喚大会で対戦相手を1人で圧倒したり、さらに不良に絡まれたときもわしを守って・・・

やっぱりわしじゃ優紀子に相応しくないのじゃないかと思った

でも優紀子は・・・自信を持って、傍にいてくれと言った

姉貴分としての次は彼女として心配をかけたことに情けなく思うの
じゃ

まだまだわしは女々しいの・・・

いつか・・・自信を持って優紀子の隣にいて・・・優紀子が安心して頼ってくれるような男になれるじゃろうか・・・

いやいやいや・・・なるのじゃ！なってみせるのじゃ！

32話(後書き)

回想以降は頭ぐちゃぐちゃで

イマイチちゃんとまとめられなかったな・・・

33話

学園祭が終わって振り替え休日も過ぎ、最初の登校日

なんかクラスのみんなの視線がおかしい・・・どことなく余所余所しいというか・・・

でも一番おかしいのは秀吉だ

なんっていうか・・・無理してる

「秀吉？なんか無理してない？」

「い、いや、そんなことはないぞい」

怪しい・・・今日の夜、優子に電話で聞いてみるか・・・

「秀吉の様子がおかしい？そういえば学園祭終わってから朝のジョギングの時間が増えたって母さんが言ってたわね。夏場の部活に耐えるためとか言ってたみたいだけど、去年はそんなことしなかったわ」

うーん・・・

「あと昨日関節技かけてて思ったんだけど・・・」

人の彼氏に何してんの優子？

「秀吉、体鍛えてる。いままで体力トレーニングはしてたけど、筋

カトレーニングはあまりやってなかったのに・・・』

はぁ・・・大体わかった

「ありがとう優子。あんまりあたしの彼氏をいじめんなよ」

『アンタの彼氏でもアタシの弟なの』

そう言って電話を切った

全く秀吉は・・・

次の日・・・

「秀吉、少し話がる」

「う、うむ。わかったのじゃ」

そう言って秀吉を屋上に連れて行く

「秀吉、学園祭終わってから無理をしてないか？」

「昨日も言ったがしてないぞい」

あくまで白を切るつもりだな・・・

「朝のジョギングの時間を延ばしたり、あまりやってなかった筋トレをやるのは無理じゃないのか？」

「な、なぜそれを?!」

秀吉が驚いてる

「昨日優子に聞いた」

「姉上……」

「秀吉……そのままの自分であたしと付き合つのは不安か? あたしは……あなたの居場所になってやることはできないのか?」

「そんなことはないのじゃ! でも……」

「でも?」

「優紀子の隣に立つには今のわしじゃダメな気がするのじゃ」

そう俯いて言う秀吉……

「バカだな……居場所つてのはさ……自分があるのままの自分でいられる……そういうところのことを言うんだよ」

あたしは秀吉を抱きしめて……優しくそう言った

「優紀子……」

「あんたがあんたらしくいてくればそれでいいんだよ。頼りにされないとか守られるとかそんなこと気にせずだね。自信が持てないなら持てなくていい……でもあたしは今のあんたが好きだよ。あの

時言った自信を持って隣にいてって言うのも堂々と胸張ってって意味じゃなく、せめて誰に恥じることなくあたしの隣にいて欲しいってことだよ……」

「やっぱり敵わんのう……」

秀吉が笑って言う

その時……

「ちよっ!」

「押すなバカ!」

バンッ

「キャッ!」

バタバタバタ

ドアが開いて、ドアの向こうで覗き見してたやつらが数人倒れてきた

「なんじゃ?!」

「あんたら……」

出てきたのは明久、土屋、美波、瑞希とあと雄二に優子まで……

「ごめん優紀子。昨日の電話でやっぱり気になっちゃって……」

「2人して真剣な顔でどこか行くのが見えて……」

「その後、木下さんから聞いて私達も気になって……」
優子が原因か……

「いや！姉貴、俺は止めようとしたんだぞ！」

「雄二！自分だけ逃れようなんて卑怯だぞ」

「……（コクコク）」

はぁ……っとため息をつく

「別に怒ってないよ。むしろ心配かけたって感じかな」

『へっ？』

雄二達がポカンとする

怒ってはいない……怒ってはいないんだけど仕返しはしたい
だからみんなをからかってみよう

秀吉に甘えるついでに……

「秀吉……」

「ん？なんじゃ？」

名前を呼ばれてこちらを見上げる秀吉に……

「大好き」

つと言つてキスをした

「なっ！」

「ひゃっ！」

「ちよっ！」

「ヒュー」

「……（ブシャアアア）」

「ちよっ！ムツツリーニ？ムツツリイーニイー……」

女子3人は赤面、雄二は口笛を吹いてからかい返してきて、土屋は鼻血の噴水を上げ、明久は少し顔を赤らめながらも土屋の心配をしている

そんな6人を放っておき……あたしと秀吉はイチヤイチャし続けるのであった……

34話

今日は週末、学校も休み

秀吉とのペアの記念になるものは何にしよっかな？

っと朝から考えていると・・・

ドドドドドドドドドドドド！ガチャッ！

『おふくる！どっいう事だっ！？』

『あら雄二、おはよう』

台所から母さんと雄二の声が聞こえる

『おはようじゃねえっ！どうして翔子が俺の部屋にいるんだ！おかげで俺は警察のオッサンに二次元と三次元の区別が出来ない妄想野郎と思われちゃっただろうが！』

あの女あ・・・

とりあえずあたしは部屋から出て台所に向かう

『・・・え？翔子ちゃんか？』

『ああいや、怒鳴って悪かった。俺はてっきりおふくるがアイツを勝手に俺の部屋に・・・』

いやそれで合ってると思うよ雄二

『もう、翔子ちゃんってば奥手ねえ。折角お膳立てしてあげたのに

何もしないでいるなんてもつたいな・・・あら雄二、どうしてお母さんの頭を鷲掴みにするのかしら？」

『やっぱりあなたの所為か！』

台所に着くと雄二が母さんにアイアンクローを決めてたそこへ現れた霧島が、雄二の腕をつかんで邪魔をする

「・・・雄二、お義母さんを虐めちゃダメ」

「止めるな翔子、俺は息子としてこの母親の再教育をしないとけないんだ！それと今、お母さんの発音が普通と違う気がしたんだが？」

「・・・間違っていない、お義母さんであっている。それよりも、言う事を聞かないとこの本をお義母さんと一緒に読む」

そう言って取り出したのは、A4サイズの冊子しかも表紙は・・・

「ま、待てっ！それは女子供が読むものじゃない！早くこっちに寄越すんだ！」

「あら翔子ちゃん。それは雄二が世界史の資料集の表紙をかぶせて机の3番目の引き出しの2重底の下に隠している、秘密の本じゃない？」

あんたら・・・雄二にプライバシーはないのかい？

「わ、わかった。おふくろは解放し・・・」

「いや、そのまま抑えて黙らしてる。霧島・・・あんた、あたしが言ったこと忘れたのか？その頭はお勉強にしか使えないのかい？そうやっていちいち雄二を拘束したり弱み握らないと何もできないのか？これで注意は3度目だな？次からはあたしも手が出るかもしれないぞ？大体・・・」

その後あたしがクドクドと霧島を説教して、雄二が朝飯を食べながら霧島に聞いた

「んで、どうして翔子が来てるんだ？」

「・・・これ」

上着のポケットから、ある1枚の小さな紙切れを取り出す
その様相から言って、チケットである

「あら、如月グランドパークのプレミアムチケット？すごいわ翔子ちゃん、良くこんな物手に入ったわね？」

「・・・優しい人達がくれた」

明久か・・・あたしと秀吉に寄越さず、雄二にやるとはいい度胸じやねえか・・・

それを聞くなりあたしは携帯で非通知で明久に電話する

『ハイもしもし？どちら様ですか？』

「・・・イイドキョウシテンジャネエカ・・・カクゴハデキテンダ
ロウナ？」

『・・・え？ちよ・・・』

プツッ！

そして電話を切る

「・・・雄二、行くろう？」

「嫌だ！」

雄二はチケットの意味を知っているから、頑なに拒否する

これは一部の人間しか知らないが、如月グループの力を以て結婚を強要するという意味合いがある

もちろん霧島はその意味を知らない

「・・・じゃあ、えら・・・」

拒否の姿勢を崩さない雄二に、霧島はさらになにかしようとして・・・

「霧島・・・あなたしつこい。雄二が嫌って言ってんだから無理強いですんじゃねえよ。あなた雄二のことが好きなのか雄二のことを好きにしたいだけなのかどっちなんだ？」

「優紀子どうしてそんなに怒ってるの？」

母さんは笑いながらそう言ってくる

「あんだそれでも母親か？雄二の幸せないがしろにして霧島とくっ

付けようとして！母さんが霧島気に入ってるのは知ってるが、あ
しはこいつが嫌いだ」

「あらどうして？」

「こいつは雄二を物か何かのように扱って人として接していないか
らだ。あんた自分の子供を人として付き合おうとしないような女と
結婚させる気か？」

「・・・そんなことはない」

あたしの言葉を霧島が否定するが・・・

「じゃあなんで雄二の意思を無視する？！映画館で会ったときなん
で雄二は手枷をした？答える！」

「・・・あれは雄二が逃げるから」

母さんの前で霧島の雄二に対する行動を言う

「だからなんで逃げる相手を手枷までして連れ回す？！雄二の意思
を無視してる証拠じゃねえか！あんたら雄二を何だと思ってるだあ！
！」

机をバンツと叩いきながら怒鳴って自分の部屋に戻る

そして着替えて家を出る・・・行き先は特に決めてない
とにかくあの家にいたくない・・・

霧島にボコボコに言って、そのせいで母さんと雄二とは気まずい・・・

・
とりあえず誰かのところに電話してそいつの家にでも行くか・・・

っと思っただが・・・

「なんで今日に限ってみんな・・・？」

都合が悪いんだよ！瑞希も美波も、さらに秀吉まで・・・あれか、みんな霧島に協力してるのか？あたしは悪役か！

「・・・ってことがあつてな・・・」

「なるほどね・・・だから秀吉も今日は朝から出かけてるのね・・・」

っということであたしは今、優子と一緒に喫茶店にいる
家は部屋が汚いからダメって言われた・・・そんなの気にしないの
にな・・・

「それにしても秀吉ったら彼女放って置いて・・・」

「別に束縛はしないからそれはいいけど・・・なんでみんな雄二と霧島をくっ付けようとするんだ？」

「吉井君なんか姫路さんや島田さんに色々されて苦労がわかるはずなのにな・・・」

優子も最初は自分のクラスの代表だから霧島を応援していたが、あたしが霧島の雄二に対するやり方を聞き、もし秀吉がと考えたのか、あたしの味方になってくれた

優子もなんだかんだで、ちゃんと秀吉の姉をしてるんだなと思う

「明久と雄二は助け合う親友じゃなくて、足を引っ張り合う悪友だからな……」

雄二の不幸が明久の幸せつてところだな
逆もそうなんだろうけど

「とりあえず今日はどうする？」

「うーん……とりあえず今日はアクセサリーとか見て回ろう。秀吉に今回の件に協力した罰として指輪でも作って驚かしてやる」

「それは罰なの？」

罰だろ……テンパる姿が目には浮かぶ……
サイズは土屋に聞けばいいだろ……

数日後、週の半ば……

雄二は結局如月グランドパークに行つたらしい……
つたく……おまえがそんな甘いから霧島が調子に乗るんだぞ……
月曜日に雄二は仕返して明久に映画のチケットを2枚あげて、瑞希と美波が明久に、どっちと行くの？と迫られていた

「秀吉！ホラッこないだ言つてたぬいぐるみできたよ」

「ありがとうなのじゃ優紀子。ん？なんか腕にリングをしておるの

う・・・」

「そ、これと同じ」

つと言つて、左手を見せる・・・

あたしの指にはウエディングリング・・・つぱく作った指輪が・・・

「もちろん着けてくれるよね、秀吉？この素材高かったんだよ？」

なんせぬいぐるみの利益で1人分しか買えなかったんだから・・・

秀吉は真っ赤になって頷いた

35話

だんだん暑くなってそろそろプールが恋しくなる今日この頃・・・
雄二が学校に無断侵入してプールに入ろうとして鉄人に捕まった
いくら恋しいからって勝手に入るな・・・

「・・・てな事があって、おかげで散々だったよ」

教室、朝のHRが始まるまでの時間

いつものメンバーで卓袱台を囲い、明久が降りかかった不幸についての説明している

「そうじゃったか。それは災難じゃったのう・・・」

「自業自得だろ」

気遣うような表情を浮かべる秀吉にあたしが突っ込む

「おまけに今週末はプールの罰掃除とくれば、気が滅入るな」

「・・・重労働」

土屋が明久の隣で、ボソリと呟いた

「だよな。あんな広い所を掃除なんて、何か褒美が欲しい位だよ」

「褒美という程じゃないが、掃除をするのならプールを自由に使っても良いと鉄人に言われたぞ？」

「え？そうなの？」

「ああ。だから秀吉とムッツリー二も、今週末にプールに来ないか？」

折角の貸し切りなら、と早速2人を誘い始める
まず最初に土屋が頷こうとして・・・

「ただし、ムッツリー二にも掃除を手伝ってもらっけどな」

「・・・」

「秀吉が行くなら、あたしも行こうかな」

「・・・」

・・・あれ？

「ちなみに、姫路と島田にも声をかけるつもりだ」

「・・・ブラシと洗剤を用意しておけ」

土屋それはどういうことかな・・・？

「うむ、そうじゃな。貸し切りのプールなぞ、こんな時でなければ中々体験できんじゃろうし、相伴させてもらうかの。無論、わしも掃除を手伝おう」

「え？結構大変だと思うけど、いいの？」

「うむ、お安いご用じゃ」

「んじゃ、あとは向こうの2人だな。おい、姫路、島田」

「どうしたの坂本？何か用？」

まず美波が来た

「呼びましたか、坂本君？」

続いて瑞希が来る

「2人とも今週末は暇か？学校のプールを貸切で使えるんだが、良かったらどうだ？」

「え・・・？」

プール、という単語で2人が一瞬ビクンと反応する

「あ、さては2人とも予定があつたりする？」

「い、いや、別に予定はないんだけど。その、どうしようかな・・・？プールって言うと、やっぱり水着だし・・・」

「そ、そうですね。水着ですよ・・・その、えっと・・・」

美波は自らの胸部へ視線を送り、瑞希は腹部に手を当てていた水着となれば、色々と見られる訳なので自身の悩みの個所が晒されるのに、少々躊躇いを感じていた

「明久、女には女の悩みがあるんだよ……でも、あたしと秀吉も行くよ。もちろん水着も着るし……」

「で、どうするんだ2人とも？」

「い、行くわ！その、イロイロと準備をして……」

「そ、そうですね。準備は大事ですよね」

複雑そうな顔をしつつ、2人は一応行くと言った……

「あ、そうだ雄二。霧島さんにもきちんと声をかけておいてね」

なんでありつを呼ぶ必要があるんだ

「……言われなくてもそのつもりだ」

ハア……雄二も甘いなあ……

週末……

雄二と一緒に最初に学校に来たあたしは職員室に鍵を取りに行った
そしてみんなが集まっているところに行くと、明久、秀吉、瑞希、
美波、クーラーボックスを抱えた土屋、雄二に呼ばれた霧島、最後
になぜか美波の妹の葉月がいた

「おはよう雄二、優紀姉」

「おう。きちんと遅れずに来たようだな」

「晴れてよかったな」

「お兄さん、お姉さん、おはようです」

元気よく挨拶をする葉月

「ん？チビツ子も来たのか」

「チビツ子じゃないですっ。葉月ですっ！」

「よく来たね葉月ちゃん。楽しんでっね」

「はいっ」

あたしがしゃがんで葉月の目線に合わせて言っつて、葉月の頭にポンポンと手を置く雄二

「んじゃ、早速着替えるとするか。女子更衣室の鍵は姉貴に預けてあるからついて行ってくれ。着替えたらプールサイドに集合だ」

雄二の言葉に従い、一旦メンバーは男女に分かれる

瑞希と美波と霧島はあたしに

明久と土屋と秀吉と葉月は雄二に……って、おいおい……

「葉月ちゃんはこっちでしょ」

「えへへ。冗談ですっ」

「ほら、遊んでないで行くわよ葉月、秀吉」

あたしの言葉に葉月はテヘッと笑って返ってきて、美波が葉月と秀吉を女子更衣室に連れて行こうとした

「わしは冗談じゃないのじゃが・・・？島田、ついにお主までそんな目でわしを見るように・・・」

完全に女として認識されてる事に、改めて実感した秀吉だった

「ちよつと美波、秀吉は・・・」

「あの・・・それなら、木下君は1人でどこか別の場所で着替えるっていうのはどうですか？」

つとおおずと手を挙げて提案する瑞希

「ぬ、ぬう・・・。納得いかぬが、この際我慢じゃ・・・。水着姿を見せればきつと皆もわしのことを見る目が変わるはずじゃ・・・」

秀吉・・・ちゃんとあたしはわかってるよ・・・

35話(後書き)

土屋は雄二の報復を懸念して優紀子にはそっち方向で反応しません

36話

「待たせたな」

そう言ってあたしは1番に更衣室から出てきた

あたしはワンピースの水着で上にTシャツを着ている

みんなの反応？もちろんがっかりしてる

あたしの本気の水着姿は秀吉にしか見せねえ

次に来たのは葉月のようだ。普通にスクール水着のようだな

「どどどどどどうしよう！？あれってスクール水着だよね！？そんなものを着た小学生と遊んでいたら、逮捕されたりしないかな！？」

「・・・弁護士を呼んでほしい（ポタポタポタ）」

「あのな・・・落ち着け2人と。小学生の水着姿でそこまでとりみだすな」

「というか、別にやましい事してる訳じゃねえだろ？あと土屋、小学生相手に鼻血垂らすな」

雄二の冷静な突っ込みと、あたしの呆れたかのような突っ込みが入る

「お兄ちゃん達、お待たせです」

と、息を弾ませて駆け寄ってきた葉月

2人はある程度冷静になる様に・・・

「懲役は2年程度で済みそうだね」

「・・・実刑はやむおえない（ボタボタボタ）」

「・・・いや、冷静ではなかった

ダメだこりゃ・・・」

「お前ら冷静なフリしてるだけだろ」

「まさかと思うが何かする気なのか!？」

「こ、コラ葉月っ!」

動揺している2人も呆れている2人も、一斉に聞こえた声の方向へと目を向けた

現れたのは、胸元を手で隠している美波

「お姉ちゃんのソレ、勝手に持っていったらダメでしょ!？返しなさいっ!」

「ソレ?・・・何のことだろ?」

「あうっ、ズレちゃいました」

明久と土屋を動揺させていた、小学生とは思えない胸のふくらみそれがいつの間にか、そのふくらみがおなかの方へ行っている

「ん?今美波が返しなさいって言っていたのは、葉月ちゃんが付けている胸パツ・・・」

「この一撃に、ウチの全てを賭けるわ……！」

「落ち着け。その一撃は明久の記憶どころか命も奪いかねない」

つと明久と美波の間に入って、あたしは美波を宥める

「うう……折角用意して来たのに……葉月のバカ……」

「明久、励ましてやれ」

「へ？あ、うん」

「な、何よ。やっぱりこの格好、どこか変なの……？」

「い、いや。そんなことないよ！そのすっごく似合ってるよ……！」

「え……？アキ。それ、本当……？」

「まあ、そうだね。手も足も胸もバストもほっそりしてて、すっごくきれいだと脚の親指が踏みぬかれた様に痛い……！」

「今ウチの胸が小さいって2回言わなかった!？」

明久もバカだなあ……秀吉早く来ないかな……
つとそんなことより……

「コラ霧島！テメエ今雄二に何しようとした？」

雄二を襲おうとした霧島を、顔面を掴み止める

「……雄二が他の子を見ないように」

「目潰しってか？何様だお前？」

チヨキにしていた手を見て行動を予測して言う

「雄二が呼んでなかったら、お前は今日ここにはいないんだぞ？わかってるのか？それがなんでこんな行動に出るんだ？帰らせるぞ？」

「その辺にしなさいよ優紀子」

霧島に怒っていたら美波に止められた・・・
つたく、なんでお前らは霧島の味方なんだ？

「すみません！背中 of 紐を結ぶのに、時間がかかって・・・」

つと声が聞こえ、声のほうを見ると駆け足でこちらに来る瑞希の姿があった

それを見て、大量の出血をして倒れるムツリーニと、それと同様に出血多量で倒れた明久

「Wor auf für ein em Standard hat
Gott jene unter schieden, die
haden, und jene. Die nicht hab
en!? Was war für mich ungenue
nd! (神様は何を基準に、持つ人と持たざる人を区別しているの
!?) ウチに何が足りないっていうのよ!」

「何語だよ?!」

そして・・・美波が錯乱した
全くなんでプールに入る前にこんな疲れんだよ・・・

「っで?あとは・・・秀吉か」

「遅れてすまぬ。着替えはさほど手間取らんかったのじゃが、いかんせん校舎からプールまでが遠くての」

・・・え?

「
×(ううん、そんなに待ってないよ秀吉)」

「落ち着け明久、ここは地球だ」

秀吉の格好は、確かにトランクスだった・・・女物の

上は肌に張り付く様なショートタンクトップでやっぱり女物・・・

「秀吉・・・それ女物だ」

「な、なんじゃと!?!」

本気で男物だと思ったのかよ・・・
あたしはため息を吐く・・・

「ち、違っのじゃ! わしは本当に男物を買った筈なのじゃ! きちんと店員にも普通のトランクスタイプが欲しいと言ったのじゃぞ!?!」

「上がある時点で気付けよ・・・」

あたしがついて行って一緒に水着買えばよかったな・・・

色々な騒動が収まり、みんなそれぞれプールで遊んでる

「……………はあ」

「お疲れじゃのう」

「秀吉・・・あたしの水着期待してた？2人つきりだったら本気の水着を着てきたけど、あんた以外に見せるのもね・・・」

「そうじゃな・・・わしも優紀子の本気の水着姿つてのを他の者に見られるのは悔しいのじゃ」

「言うじゃねえか・・・いつか2人でどこか行こうな」

「うむ」

「でもまず一緒に水着を買いに行こうな」

「・・・そうじゃな」

そんな会話をしていたら、近くで・・・

「おい、霧島さん！」

「・・・何？」

「雄二と水中鬼って遊びをやって見せてほしいんだ。ルールは簡単で、雄二を水中に引きずり込んで、溺れ・・・」

明久が霧島を呼び、何か吹き込んでいる

「明久・・・覚悟はできてるな？あたしがあんたと水中鬼をしてやるよ」

「ちよっ！優紀姉！」

容赦なく水中に引きずり込んでやった
まあ溺れない程度にだけど

「あれ？プールを使っているのは誰かと思ったら、代表達だったの？」

「・・・愛子？」

プールにいるみんなが声にしたほうを向く
そこには召喚大会4回戦で戦った工藤愛子がいた

「あれ？確かAクラスの工藤？どうしてここに？」

「あつ、優子の弟君の彼女さんじゃない。ボク、水泳部だから」

呼称が長い

「呼び名が長いぞ。優紀子だ、坂本優紀子。それより今日、水泳部は休みのはずだぞ？」

「優紀子ね、ボクも愛子で。すっかり忘れていて学校に来てやっと
思い出したんだけど・・・人の声がしたから寄ってみたんだ。良か
ったらボクも混ぜて貰って良い？」

「別にいいんじゃないか？あたしらのプールってわけでもないし・
ん？」

ふと見ると、そこにはある珍客が既にいた

「お姉さまっ！どうしてプールに行くのなら美春に声をかけてくれ
ないのですか！？」

「美春！？アンタどうしてここにいるのよ！プールで遊ぶなんて誰
にも言わなかった筈なんだけど！？」

「美春にはお姉さまを害虫から護る為のトクベツな情報網がありま
すから！」

その珍客は美波に襲いかかっていた

「あれ誰？」

「Dクラスの清水じゃな」

「なんで美波を？」

「同性愛者で美波を愛しとるんじゃないと・・・」

ふーん・・・ま、美波ならいいか。霧島側の人間だし、これで雄二
の辛さもわかってくれればね・・・

「じゃあボクも水着に着替えて来るね？」

スポーツバッグを掲げて、女子更衣室へと向かう愛子
すると途中で振り向いて・・・

「覗くなら、バレないようにね」

つと言い残していった

なんでみんな爆弾落とすかな・・・

37話

バシーン・・・バシーン・・・

水面にビーチボールが叩きつけられる音が響く

「あのさ、雄二と優紀姉それに秀吉」

「なんだ？」

「なんだ明久？」

「なんじゃ？」

あたしはその様子をプールサイドから見ている

「僕の気のせいかもしれないんだけど・・・あの2人、ヤケに険悪な雰囲気で水中バレーをやってない？」

「大丈夫だ。俺達にも険悪な雰囲気に見える」

「雄二に同じ」

「じゃな」

険悪な雰囲気をかもしだしてる2人をあたしらは眺める

「美波ちゃん！絶対に譲りませんからね！」

「上等よ瑞希！スポーツでウチに勝とうなんて思わないことね！」
ボールよ割れると言わんばかりに全力で打ち合う瑞希と美波
最初は仲良くやっていただけ、いつのまにかあんなことになっ
てる

「ときに明久」

「ん？なに、雄二？」

「この前、俺がお前にやった映画のチケットはどうした？」

ああ、如月グラウンドパークの仕返しのあれね・・・

「美波と姫路さんが随分と見たがってたから、2人で見て来ると良
いよって」

「そうか・・・間違いない。それが原因だ」

「へ？何が？」

「なるほどな・・・」

「あの2人が可哀想じゃな」

改めてプールの2人を見る

「負けた方が諦めるって約束、忘れてないわよね！」

「もちろんです！美波ちゃんこそ負けても約束を破らないでくださ

いね！」

「そつちこそ！」

やっぱり2人は映画のチケットを賭けて戦っているようだ

「それにしても、島田の相方は動きが不自然じゃな」

ちなみに瑞希の相方は霧島で、美波の相方は清水である

「手を抜いてんだろっな」

「あ、秀吉と優紀姉もやっぱりそう思うっ？」

美波の相方はさっきからミスばかりしてる。サーブは全部外してるし、ボールが飛んできたら落とすか場外へと飛ばしてる。構えや動きを見てる分だと下手には見えないのにな

「美春。アンタ、絶対手を抜いているでしょ……！」

「そんなことありませんお姉さま！美春はお姉さまの為に全力です」

「これにはウチの大切な物がかかっているんだから本気でやりなさい！」

おーい……口喧嘩してる暇はあるのかな？

「ほらお姉さま！ボールが来ましたよ！」

「あつ！？もう、早く言いなさいよっ！」

美波達が何かを言い争っているうちに、瑞希が打ったサーブが2人の陣地に静かに落ちた

「はい。これで15点。1セット目は代表&姫路さんチームの勝ちだよ」

審判をやっている工藤が手を挙げて、最初の勝負の終了を告げる
・・・1セット目？

「1セット目？」

「大方3セットマッチだろ。5セットもやるとは思えないからな」

「遊びの割には随分本格的にやってるなあ」

「瑞希も体力付いてきたな・・・」

「うむ・・・」

結局勝負は清水がビーチボールを素手で割って無効になった

「さて、どうする？」

「そうだね。少しお腹すいてきたし、何か食べない？」

「弁当作ってきたが人増えたり足りないかもな。誰か何か買いに・・・」

「・

工藤は部活のつもりで来てたから弁当用意してそうだけど、清水と葉月の分がないし・・・

でも土屋がダウンしてて食べそうにないし、だったら葉月の分をみんなの分から少しずつ取れば・・・

「あ、そういえば、ちょっと失敗して人数分用意できなかったんですが・・・」

そう笑って言う瑞希に嫌な予感がよぎる

「実は今朝作ったワッフルが3つ」

「瑞希・・・味見したか？」

「え？・・・してませんよ？だって太りますし」

「アウトだ！今までお前が作ったものとそれを食った結果をよく考えて、食わせるつもりなら今ここで試食をしる。プールで動いてカロリー消費したから太らんぞ？」

つと云っても食われても困るんだけど・・・
結局食べなかつたし説得成功・・・

その後、昼飯を食べて、落ち着いた後

「ねえねえ、お兄ちゃん達」

「ん？」

「お兄ちゃん達の中で、誰が泳ぐの一番早いの？」

「誰が・・・か」

葉月の言葉がきっかけで水泳対決をすることになった男連中

1位には工藤が保健体育の実技とかふざけて言ったら秀吉以外マジになってる

「よーい・・・スタートっ！」

「くたばれええっ！！！」

愛子の合図と同時に、明久と雄二はとび蹴りを互いに放った

「明久、テメエ卑怯な真似してくれるじゃねえか！この恥知らずが！！！」

「その言葉、そっくりそのまま返してやる！！！」

「あのさ2人とも、取っ組み合いも良いけど、木下君とムツツリー二君はそろそろ折り返しだよ？」

ふと見てみると、秀吉、土屋の順ですでに折り返しが行われていたと言っか優子の弟君じゃなくて木下君って普通に呼べるんならそう呼べよ・・・

「そうは行くかっ！俺はムツツリー二を止める、明久は秀吉をやれ！！！」

「了解！」

2人はプールに飛び込み、雄二は土屋、明久は秀吉を止めるべく立ちふさがる

「もはや水泳対決じゃねえな」

あたしは呆れたようにそう言った

「な、何じゃ明久！？お主は隣じゃろう！？」

「ダメだよ秀吉！ここは通さない！」

脇を抜けて先に進もうとする秀吉にしがみつくと明久
水中だとうまく捕まえられず、難儀している

「明久、離すのじゃ！」

「逃がすもんかあああつ！！！」

まあ溺れさせるつもりでやってるわけじゃないし、いいか……
つとそのときだった……

ズルツ！

「……？なんだろう？」

明久が秀吉の水着の上を取った

「あ、明久君！何をしているんですか！？」

「え？・・・もしかしてこれって、秀吉の・・・？」

「んむ？そういえば胸元が涼しいのう」

「・・・死してなお、一片の悔いなし・・・！！」

土屋を中心に水面が朱に染まっていく

「うおっ！大丈夫かムツツリーニ！？この出血量はマジでヤバくないか！？」

「・・・構わない。むしろ本望・・・！」

「わああっ！ムツツリーニが大変な事に！？血がものすごい勢いで出ているんだけど！」

「とにかく輸血だ！プールから上げる！」

「早く胸を隠さない！土屋の血が止まらないから！」

「いいイヤじゃっ！ワシは男なのじゃ！胸を隠す必要はないのじや！」

「木下君、わがままを言っちゃダメです！土屋君が死んじゃいます」

「・・・愛子。救急車の手配、頼める？」

「はい。やっぱりFクラスの皆は面白いねえ」

「バカなお兄ちゃんたち、いつも楽しそうで羨ましいですっ」

これが楽しそうに見えるのか葉月……

その後土屋は駆けつけた救急隊員の懸命な延命措置で一命を取り留めた

「翔子」

「……隠しごとなんてしてない」

「霧島、まだ雄二は何も言っていないぞ？」

今日は珍しく雄二と霧島と登校している

まあ霧島が無理矢理一緒に登校しようとした家で待ってたんだがな
あたしもこいつは嫌いだが、雄二に反感買ってたまでこいつを遠ざける
真似はしたくないし……

「……誘導尋問なんて卑怯」

「これのどこが誘導尋問なんだろうな？」

「……？」

「つで、今背中に隠した物はなんだ？」

「……別ににも」

「夫だなんだって言うくせに、結局あなたの思いもこんなもんか」

そう言うと霧島は隠していた物を雄二に渡した

「ふむ、MP3プレイヤーか機械音痴のお前がどうしてこんなものを……」

「何が入ってるんだ？」

「・・・普通の音楽」

雄二がスイッチを入れて再生する

『結婚しよう。愛してる、翔子』

雄二の声でプロポーズっぽい台詞が再生された

・・・なんだこれ？

「雄二、今の言葉を言った覚えは？」

「無いな・・・合成だな」

「・・・普通の音楽」

「普通でもないし曲もなかったな。バカには聞こえないってか？ふざけてんのか?!」

「落ち着け姉貴！とりあえず、これは削除して返す」

霧島に掴みかかろうとしたあたしを雄二が止める

「まだ、お父さんに聞か・・・」

「二度と雄二の声を認識できなくしてやるつか!」

この女やっぱり雄二の傍に置いとくべきじゃねえな・・・

「へえっ、そんな事があつたんだ・・・ちよつと危なかつたね？」

「ちよつとじゃねえ!!」

朝、いつものメンバーで、教室で話している

MP3プレイヤーの音声の一件を聞いて、明久が軽く笑いながら話を聞いていた

「でも、まだ結婚程度で済んでよかつたじゃない。僕はてつきり、子供が出来た事にされているのかと・・・」

「・・・明久、笑えない冗談はよせ」

「ぶっ飛ばされたいか？」

結婚程度だと？

「・・・まあいい。でも、霧島はあんな台詞どうやって合成して作つたんだ？」

「そこなんだよ。翔子は機械音痴のはずだから、きつと盗聴と音声の合成に長けた実行犯が居る筈だ」

「誰か、それらに長けた人物が協力してる可能性があるという事が」

「ああ。そこでだ、ムツツリーニ。その実行犯を調べてほしい」

「え？でも、霧島さんは消去を了承したんでしょ？」

「いや、憂いは断った方が良い」

今後も、そういう手段に出ないとも限らない

つと雄二は真剣そのものの顔でそう言った

あたしもこんなことする奴はシバき倒さないと気がすまないし

「言い逃れができん様な台詞を合成される可能性も充分あり得るか
らな」

あたしは紙とペンを取り出して・・・

翔子、俺の子を産んでくれるか

・・・と紙に書いた

「・・・とかな。こんな感じだな。今盗聴されてる可能性もあるか
らこつさせてもらっけど」

「・・・一刻も早く実行犯を探しださないと」

青ざめた雄二が、身震いしながらそう呟いた

「という訳だから頼む、実行犯を探しだしてくれ！」

「・・・わかった」

「すまん。報酬にお前の気に入りそうな本を持ってくる」

「・・・任せておけ」

ガラッ！

「遅くなってすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取ってしまった。HRを始めるから席についてくれ」

鉄人が大きな箱を抱えて教室に入ってきた
その中には、強化合宿のしおりがぎっしりと詰まっている

「さて、明日から始まる強化合宿だが、大体の事は今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。まあ旅行に行く訳ではないので、勉強道具と着替えさえ用意してあれば特に問題は無いはずだが」

つと言いつつ冊子を配っていき、みんなも1冊取ってから後ろに回す作業を始める

「集合の時間と場所だけは、くれぐれも間違えないように」

鉄人の言葉を受けて、それぞれ冊子をめくり始める

「はぁ・・・卯月高原か。結構遠いな・・・」

「でも避暑地だから、結構快適に過ごせるんじゃない？」

「吉井、坂本姉、私語は控える！特に他のクラスの集合場所と間違えるなよ。クラスごとでそれぞれ違うんだからな」

それを聞いて、Aクラスなどは快適なリムジンバスで向かうんだろ

うと、あたりを付ける面々

「それで？あたしらFクラスはどうなんだろう？」

「やっぱり狭い通常のバスじゃない？」

「補助席やつり革かもしれんのか？」

「へたすると、鉄人が引率するだけなんて事もあるんじゃないか？」

あたし、明久、秀吉、雄二がそれぞれの予想を口にする

「いいか、他のクラスと違って我々Fクラスは・・・現地集合だからな！」

『案内すらないのかよっ！？』

あまりの扱いに、全級友が涙した
メンドクせー・・・

39話

電車に揺られて2時間

あたしは窓際に座り、流れてく景色を眺め感慨にふけていた

「どうしたのじゃ優紀子？電車にでも酔ったかの？」

あたしの隣には秀吉が座っている

「いや、よくよく考えると秀吉と遠出するのも同じ建物に泊まるのも初めてだなんてな……」

「そ、そうじゃのう……」

秀吉の顔が赤くなった……

「これで2人つきりならな……」

「全くじゃのう……」

そう言つて2人して周りを見る……

すぐ前の座席で、遅くまで雄二の調べ物をしていた土屋がうとうとと眠っている

そして近くにいつものFクラスメンバーがいる

「今のところ静かだからよかった……明久と美波が居るから割と騒がしい旅になるかと思った」

「確かにのう……」

ビリッ!

何かを破るような音が響いてきた

「坂本、窓開けて!」

「捨てる気!? 僕を窓から捨てる気!?!」

「島田、窓からゴミを捨てるな」

つといつもの様なやり取りが始まった事を確認したあたしと秀吉はあ……つとあたしはため息を吐く

「あんたら……うるさいぞ、騒ぐな。他の客の迷惑だろうが」

「あつ、優紀姉。助かったよ……実は、ちょっと心理テストをやつてて」

「それは騒いでいい理由にならん。でも状況はわかった」

そう言つて美波の持っている本を取り上げ、開かれている個所を見つてみる

「えーつと? 次の色でイメージする異性を上げる、か……明久はなんて答えたんだ?」

「緑が優紀姉で、オレンジが秀吉、青が姫路さん」

「ふーん……一発殴つていいか? あたしの彼氏がなんで入ってん

だ？」

なんで明久から見て秀吉は異性になってんだ？
あたしは同性愛者か？

緑が友達、オレンジが元気の源、そして青が・・・

「あたしは友達っていうより頼りになる姉だろ？あたしもあんたは
弟分な感じだし・・・」

「・・・(トントン)」

「ん？ムツツリーニ。おはようなのじゃ」

土屋が起きてきて秀吉の肩を叩いた

「・・・空腹で起きた」

「なら昼飯にするか。明久、ちゃんと持って来てるのか？」

「今日はお惣菜パンをね」

「そんなんで足りるのか？」

「あれ？優紀姉。僕に奢ったり食べ物くれないじゃなかったの？」

「学園祭で助けてもらった時のお礼だ」

そう言って雄二と秀吉の分も合わせて4人分の弁当を用意する

「ちょっと優紀子！アキを誘惑する気？」

「そうですねよ優紀子さん！木下君がいるのに・・・」

「なんだ？瑞希に美波・・・あんたらも明久の分を作ってきたのか？」

そう言うと瑞希はバスケットを取り出した

「・・・っで？味見はしたか？」

「・・・」

瑞希は顔を背けた

「アウト。ホラ雄二も食べるぞ。土屋はどうするんだ？色々世話になってるから、おかず少しくらいならやるぞ」

「・・・（コクコク）」

そう言うと瑞希と美波ほポツンと取り残された

なんか少し罪悪感が・・・

まあせっかくの合宿をずっと布団の中で生死の境を彷徨わせて過ごさせるぐらいなら悪役くらいになってやるさ・・・

駅から合宿所に向かう途中

明久が両手に華状態で歩いていて、その後ろをあたしと秀吉が並んで、さらにその後ろを雄二と土屋が歩いている

「ところで、なにか情報はつかめたか？」

「……ああ」

雄二が土屋に聞く

あたしもその会話に聞き耳を立てる

「……校内に網を張った。小型録音機、昨日学校中に盗聴器を仕掛けた」

手は選んでられないって感じだな……

それから、土屋が用意した小型録音機が取り出され、そこに収められた会話が流れ始める

「……らっしやい」

『雄二のプロポーズを、もう一つお願い』

『毎度。二度目だから安くするよ』

『……値段はどうでも良いから、早く』

『流石はお嬢様、太っ腹だね。それじゃ明日……と言いたいらるけど、明日からは強化合宿だから、引き渡しは来週の月曜で』

『……わかった。我慢する』

「片方は、霧島でまず間違いないな」

「じゃな。雄二のプロポーズを欲しがる上にお嬢様と来て、この独

特の話し方とくればの……」

あたしと秀吉が録音機から流れてきた会話の感想を言う
つてか話し方は秀吉も人のこと言えんよ……

「姉貴に秀吉?! まあいい、それよりもう動いていたのか……強
化合宿があつて助かった……」

「けど、タイムリミットが伸びただけだ。で、他には？」

土屋が機械を操作し、続いて録音機から声が

『相変わらずすごい写真ですね。こんな写真を撮っているのがバレ
たら、酷い目に遭うんじゃないですか?』

『ここだけの話、前に一度母親にバレてね』

『大丈夫だったんですか?』

『文字通り尻にお灸を据えられたよ。全く、いつの時代の罰なんだ
か』

『それはまた……』

『おかげで未だに火傷の痕が残ってるよ。乙女に対してひどいと思
わないかい?』

「成程ね、尻に火傷のあとか」

「……わかつたのはこれだけ」

確かに、情報である事は間違いない
・・・だが

「でも、有力でもないぞ？個所が個所だけに、確かめようとしたら間違いない犯罪だ」

確かにこの中で確かめられるのはあただけ・・・
でも堂々とはできないからやるとしたらコッソリになる・・・
それに・・・

「合宿所での入浴について」

男子ABCクラス・・・20：00	21：00	大浴場（男）
男子DEFクラス・・・21：00	22：00	大浴場（男）
女子ABCクラス・・・20：00	21：00	大浴場（女）
女子DEFクラス・・・21：00	22：00	大浴場（女）
Fクラス木下秀吉・・・20：00	21：00	個室風呂？

つと秀吉の事は置いとくとして、あたしはABCクラスの女子と一緒に風呂に入れない

「犯人がABCクラスの間人だったら確かめようが無いもんな・・・」

そんなこんなで合宿所に付いた

合宿所についてしばらくして、秀吉から一本の電話が来た

内容は雄二達が合宿所の女子風呂の脱衣所の盗撮犯の容疑がかけら

れたというもの

「誰がやったかしらねえがいい度胸してんじゃねえか！」

あたしが雄二たちの部屋に着くと入り口に女子が集まっていた

「道を開ける！！あたしは今ブチ切れそうなんだ！！ぶっ飛ばすぞ！！！」

適当な女子の襟を掴んで後ろに投げ倒す

その音を聞いて女子が道を開けた

部屋の中では明久が瑞希と美波に拷問され、雄二が霧島にアイアンクローをされてた

それを見た瞬間・・・

あたしはキレた

40話

あたしはまず雄二にアイアンクローをしている霧島の襟を掴み引つ張り倒した

その音で明久を拷問していた瑞希や美波は手を止めた

「雄二に手をあげるなんて覚悟はできてるんだろっな霧島?! あゝあゝっ?!」

倒れた霧島の頭を床に押し付けて言う

「・・・ゆう、じが・・・盗、撮をした、から・・・」

「一応聞くが雄二達はやったのか?」

雄二と明久と土屋は容疑を否定した

「テメエは雄二が好きだとか夫だ妻だつて言ってる割には、雄二を全く信用しねえんだな。いい加減あたしも我慢の限界だ! もう雄二に近づくな!!」

霧島の頭を押さえつけながらそう怒鳴った

「ちょっと優紀子! 言いすぎよ!」

「そうです優紀子さん! 言いすぎです!」

「黙れ! テメエらにも言いたいことがたっぷりあるんだ! おい瑞希! Bクラス戦でクソヤローからテメエ大切なものを取り戻すために

壁まで壊そうとしたのは誰だ?! テメエの転校を阻止するために学園祭でがんばったのは誰だ?! 答える!!」

瑞希は答えない

「美波も! チンピラにテメエらがさらわれた時、助けに来てくれた雄二と誰だ?! 答える!!」

美波も答えない

「ちよつとなによアンタ! こいつらを庇うの?!」

盗撮の証拠品と思われるカメラを持った女にそう問われる

「あん?! 誰だテメエ?! テメエがこの騒動の主謀者か?」

「主謀者? それはカメラを仕掛けたこいつらでしょ?!」

「証拠はあるのか?」

「こんなことをするのはバカのFクラスしかないわ!」

「それが法廷で通る証拠だと思ってるのか? おめでたいな! 邪魔だ! 引っ込んでろ!」

「なっ!」

「ついでだ霧島。 テメエが雄二の合成音声を買ったのはどいつからだ? 吐け!!」

ずっと押さえつけていた霧島に尋問を開始する

「姉貴！」

「雄二、自分を脅迫している相手に情けをかけるのか？あんたの嫌がることはしたくなかったが、さっきも言ったが我慢の限界だ。オラア吐けや霧島あー！」

押さえつける力を強くする・・・

「・・・D、クラ、ス・・・しみ、ず」

Dクラスの清水か

「本人に言われないからって合成した音声にプロポーズさせるなんて、女としてプライドは無いのか？！意気地や常識の次はプライドまで無くしたのか？！もうあんたが同じ女であることすら気にいらねえな」

そう言つて霧島を解放する・・・

霧島は泣いていた

あたしはそれを放つておいて瑞希や美波のほうを向く

「風評だけでFクラスをバカ呼ばわりする奴らに怒つてたくせに、そういう奴らの言うことを鵜呑みにして明久の言うことを聞くことしない、信じない・・・結局テメエらもその女共と同じってことか・・・よくわかったよ」

そう冷たく言い放つ

「雄二、Fクラス全員に連絡しな、今回の事を逆恨みしても軽はずみな行動はするなつて。この件の犯人はあたしが探して落し前をつけるから……」

そう言つて部屋から出た

部屋の入り口にいた適当な女子に清水の部屋を聞きだし向かう

「ここか……清水！いるよな?!」

「なんですの、いきなり?!キヤツ!」

部屋にいた清水に出会い頭に一発、顔面を殴る
殴られた清水は倒れた

「ウチの弟が随分と世話になつたなあ?お礼に来たぜ?」

「な、なんのことです?!」

「霧島が吐いた。つでわかるよなあ?」

清水の顔が青ざめた

「母親にお灸据えられたのにやめないなんて、悪い子だなあ。あたしがお仕置きしてやるよ」

そう言つてマウントポジションで2発3発と殴る
ふと清水の荷物の中身が目に入る

「ん？ふーん・・・脱衣所の盗撮もテメエの仕業か・・・犯人探しの手間が省けたな！！」

さらに一発殴る

「優紀子！！もうやめるんじゃ！！」

駆けつけてきた秀吉に止められる・・・

「秀吉、今わかったが盗撮の犯人はこいつだ」

「なんじゃと？」

秀吉が驚く

「そこにあるこいつの荷物・・・さっき見た盗撮に使われたのと同じやつだ」

「む・・・確かにそうじゃな」

「大方、美波を撮るためってか？」

「そうですね！お姉さまの姿をこの手で保存する義務を果たし、そのついでに吉井明久に美春の愛を邪魔した罰を下したまでです！」

「この分じゃまだ余罪はありそうだな・・・全部吐けや。今吐けばその分については許してやるよ」

あたしは左腕を握り、拳を振り上げて問いかける

「あの豚野郎に脅迫状を出しましたわ。お姉さまに近づくなと、さもなければ女装写真をネットに上げると」

清水は自白した

「ほう・・・随分と美波のことを慕ってるようだな。でも向こうはテメエの事どう思ってたかな」

「お姉さまも美春のことを愛してますわ!!」

「プールで見たがあたしにはそうは見えなかったな。大体テメエのは愛じゃねえ。そんな一方的なもの愛だなんて絶対認めねえ!!」

「もう止すのじゃ優紀子！」

拳を振り下ろそうとしたら腕を秀吉に掴まれた

「それ以上やれば停学じゃすまぬのじゃ！わしはこんなことで優紀子と離れたくないのじゃ！」

「秀吉・・・」

掴まれた腕を見る・・・

あたしの左手の指輪と腕を掴んでいる秀吉の手のあたしのあげた指輪が目に入る・・・

ちゃんと着けてくれてたんだ・・・

「はあ・・・わかったよ。優子に連絡してさっきのカメラ持ってた女連れてくるように言ってくれ。あと雄二達もだな」

「わかったのじゃ・・・」

数分後、秀吉の連絡を受けた優子がさっきのカメラを持った女・・・
Cクラスの小山を連れてきた

雄二達も秀吉から連絡をもらって走ってきた

そして・・・あたしと清水の停学が決まった

退学になるかと思ったが理由が理由だし、試験校だから世論に弱く、
暴力事件で退学はクラス間戦争を奨励する試召戦争制度を問題視さ
れかねないからとのことらしい

合宿期間中は隔離され、合宿終了後あたしは10日間の停学
清水も同様だが停学期間は知らない・・・まああたしと同等かそれ
より短い1週間あたりか？

まあ理由がなんにせよ・・・

秀吉と離れずにすむからよかった・・・

41話

次の日、合宿2日目・・・
あたしと清水は別々の反省部屋に入れられて反省文や課題をやっている

携帯も一旦没収され、外の状況はわからない

その反省部屋で食事や寝起きをして風呂も個別なので他の生徒と一切接触はない

まるで独房だ・・・

別に後悔はしてないが・・・秀吉に会って声が聞きたいなあ・・・

そういえば課題を持ってきた鉄人が少し疲れていた

そりゃあんなことがあればと思ったが、なんと女子風呂を覗こうとした奴らがいたらしい

あたしがあんな事件を起こしたのにバカな奴がいたもんだ・・・

あたしが動くなど言い聞かせておいたからか、Fクラスの生徒ではなかったらしい

そいつらに罰で英語の反省文を書かせたから、その監督でいつもより寝れなかったとのこと

さらに次の日、合宿3日目・・・

昨日Fクラスの男子みんなが鉄人にあたしの停学撤回を求めてきたらしい

しかしさすがにそれを認めるわけにはいかないと鉄人は言っていた
あたしとしてもFクラスに迷惑をかけたから、ちゃんと処分を受け
るべきだと思う

でも嬉しかった・・・

そして昨日も女子風呂覗きが出たらしい
しかも2、30人くらい集まってきたそうだ
Aクラス以外の女子も防衛隊を結成して召喚獣で戦ったが、もつと
人が増えたらどうなるか・・・
鉄人も今日のもつと増えるかもと言っていた
あたしは鉄人にFクラスの男子に誘われても絶対のるなと伝えても
らった

そして今日、合宿4日目・・・

昨日の女子風呂覗きはBとDクラスの男子全員が来たと言われた
女子が代表のACEクラスはまだ参加していない

Aクラスはこんなバカなことはしないだろうが、霧島があれからど
うなったか知らないから、もしかしたら参加してくるかもしれない
CEクラスの男子も参加してくる可能性があると言っていた
Fクラスの男子はあたしの言葉をちゃんと守ってくれてるらしい

あたしに応援要請が来た・・・

「なんで停学中のあたしにそんなことを？」

「Aクラス全員とFクラス男子が坂本姉の停学を取り消し、防衛隊
に参加させれば自分達も協力すると言ってきた」

「具体的に誰が言ってきたんだ？」

「木下優子と坂本雄二だ」

「はぁ・・・あいつら・・・」

優子は自分のところの代表よりあたしを取ったのか
しかも他のAクラスの生徒も説得したのか・・・

「わかった。要請を受ける。でも停学の取り消しはしなくていい」

「でもそれだと処分の撤回を要求してきた生徒は納得しないぞ」

「あたしから話すよ。とりあえずAクラスとFクラス男子と話せる
場所を用意して欲しい」

「わかった。AクラスとFクラスが自習で使ってる広間を使い、ホ
ラこれは返す」

そう言っつて携帯を返された

用意された広間にあたしとAクラス、Fクラス男子が集まっていた
Aクラスの生徒の中にやっぱり霧島の姿はなかった

「まずはあたしの処分の撤回を求めてくれてありがとう・・・まさ
かAクラスまで庇ってくれるとは思わなかったよ」

「さすがに今回は、代表が常識を欠いた、そしてAクラスの威厳を
損なう行動をしたってみんな思ったのよ」

あたしのお礼と疑問の言葉に優子が答えた
じゃあAクラス内で霧島の居場所は無いのか・・・

「処分撤回はありがたい、でもあたしはみんなに迷惑をかけたから、この処分を受けようと思っっている。理由はどうあれAクラス代表の霧島やDクラスの清水に暴力を振るったことは事実だ。そのせいでFクラスは野蛮なんて悪評がついただろっからな」

『そんなの気にしねえから戻ってきてくれよ姉御!』

『そつだ!俺達のためになんで姉御が・・・?』

あたしがそつ言つとFクラスの男子から声上がる・・・

「あたしのことはいいんだ。それより今回の覗きに参加しなかったのを聞いてお前らを見直したよ」

『そりゃ、せつかく姉御が俺達を庇ってくれたのにそんなことできなえよ・・・』

しつかり恩に報いてくれたってことか・・・

「さて・・・じゃあ、こんなことをする奴らはどうするか、わかってるな?FFF団の理念が嘘じゃないことをここで証明しろ!」

『おおおおおおお!』

『我らFFF団!乙女の純潔の守護と悪漢の暴走の駆除を目的とする神聖なる組織!』

『男とは?』

『愛を捨て、哀に生きるもの!』

Fクラス男子がFFF団の衣装に着替えていく・・・

「よし！雄二、Fクラスの指揮は任せるぞ」

「あ、ああ・・・」

発破かけすぎたか雄二が少し引いていた

「大まかな配置は、Fクラス男子は3階でEクラス男子を、Aの女子とBCクラスは1階でBクラス男子を、残りはあたしも含めて2階でCDクラス男子を皆殺した。あたしが言うのもなんだが補習送りってことだからな。土屋、あんたには各階の情報を収集して報告してくれ。ああそうだと各クラス女子を4、5人3階に配置してくれ」

『監視か？そんなことしなくても寝返ったりしないぞ？』

信用されて無いと思ったのか、そんな声が上がる

「お前達の勇姿を学年全体に知らしめるためなのになあ・・・いいのか。そうかそうか・・・」

『さすが姉貴だ！俺達のことを考えてくれてる！』

『おおおおおお！！』

「っつということでBCDEクラスの女子に指示よろしく優子」

「アタシが?!」

「だってAクラス代表代理だろ？」

「こついつのは上のクラスからのほうがすんなり通るものなんだ

「出陣だ！！」

42話

処分通知

2年BCDE組男子生徒全員

上記の者達全員を5日間の停学処分とする

その後5日間の雑用等、奉仕活動を命ずる

2年D組清水美春

上記の者を7日間の停学処分とする

その後3日間の雑用等、奉仕活動を命ずる

2年F組坂本優紀子

上記の者を10日間の停学処分とする

なお連帯責任として2年全員は期末試験終了まで

召喚獣の召喚を禁止する（観察処分者の雑用は除く）

文月学園学園長 藤堂カヲル

次の日・・・

昨日の覗きは結局BCDEクラスの男子全員が来た

しかしAクラスや本気のFFF団には歯が立たず1人残らず補習送りになった

今のFFF団の信用度はAクラス未満、BCDEクラスの男子以上
つてところか

そして合宿の帰り道・・・

本来停学のあたしは他の生徒と一緒に帰れず、他の停学者と同じように帰りも別にされるはずなのだが

他の停学者が多いとか、お前はFクラスだから現地解散で監視が面倒とか言われて、普通に帰された

なら昨日か明日帰せばいいのに、お礼のつもりだろうか・・・

「秀吉・・・」

「なんじゃ？」

今あたしらは駅で帰りの電車を待っている

あたしと秀吉は横に並んで立って線路を見ている

「あの時止めてくれて、ありがとう」

「うむ」

秀吉が短く返事をした

「あたしも秀吉と離れるのはイヤだよ・・・」

「・・・うむ」

少し間があったので秀吉の顔を見たら、少し赤くなってた

「秀吉・・・ありがとう」

秀吉の後ろに回り、後ろから抱きつく

少し顔の顔の赤みが増したかな？

「見せ付けてくれるじゃない優紀子」

「うらやましいです・・・優紀子さん」

「これで2人つきりならな・・・」

「全くじゃ・・・」

「「はあ・・・」」

Fクラスの女子に邪魔された嫌味を言う

「それより明久にはちゃんと謝ったのか？」

「謝ったわよ・・・」

「ちゃんと許してくれましたよ」

「つたく・・・明久も甘いな・・・」

「これに懲りたら、ちつとは明久を信用してやるんだな。それと美波、お前がちゃんとあいつにはつきり言わないからこうなったってのもあるんだがらな？二度とこんなこと起こさせるなよ」

「わかってるわよ」

「どうだかな・・・」

「結局昨日は霧島は出てこなかったな・・・あいつAクラスの中で

の立場とかどうなってるんだろうな・・・あんなのでも雄二の惚れた女だからな・・・」

「そうじゃな・・・実はあれから合宿中、霧島を全く見ておらんのじゃ姉上の話じゃと部屋から出てこなかったらしい」

「はあ・・・酷い人間だな・・・あたし」

「後悔しとるのか？」

「いや・・・後悔はしてない・・・」

「本当に惚れとるなら雄二がなんとかするのではないのか？」

「ま、そうだな・・・」

今はそれを願うだけ・・・か

雄二次第じゃ本当にあいつが義妹になるんだし・・・

「はあ・・・これから10日間秀吉と会えないのか・・・寂しいな。浮気すんなよ」

「せんよ・・・わしを信用しとらんのか？」

「わかってるくせに・・・」

信用してないわけ無いじゃないか・・・

「なんかムカついてきたわ」

「私もです・・・」

おーおーなんかヤバめなオーラが出てきたな・・・
FFF団に女子団員が誕生したな

10日後・・・

停学も明けて久しぶりの登校
教室に入ると・・・

『姉御が帰ってきたぞ!』

『お勤めお疲れっしたー』

あたしはズッコケそうになった・・・

「なんだそりゃ?!普通に停学明けただけだぞ?」

「みんな優紀姉が戻ってきて嬉しいんだよ」

「そうじゃぞ。皆なぜ他の者より停学期間が長いのかと暴走寸前じ
やったからの」

あたしの言葉に明久と秀吉が返してきた
いや、やったことが違うから・・・

「でも召喚禁止は痛いな・・・」

そう雄二が呟く

「別にいいだろ。期末終わっても夏休みまで数日あるし、一気に決着付ければ」

「でももうお互いの戦力はわかりきつとるからの。短期決戦も難しいのではないかの？」

「そこをどうやるかを考えるのが雄二の仕事だ」

「全く、簡単に言ってくれるよ」

今回はいきなりAクラス戦をするってのもありだし
前回と同じ対戦方法だと時間もかからないし・・・

「今度はしくじるなよ。しくじつたら夏休み明けに瑞希が転校して
た、なんてこともありえるからな」

「わかってるさ」

「それと、男なら惚れた女の根性叩き直すぐらいしてやれ」

「ああ、流石に俺もあのままは・・・」

「あのまま？」

霧島がどうかなってるのか？

「学校には来ておるのじゃが・・・かなり塞ぎ込んでおつてのう。
それも暗いオーラが目に見えてわかるぐらいに・・・」

「そんな状態にしたあたしが言えることじゃないかもしれないが、大丈夫なのか？」

ギリギリ居場所はあるみたいだが・・・
まずいな、自殺とか勘弁してよ

《ピンポンパンポーン》

《2年F組坂本雄二、坂本優紀子、吉井明久、3名は学園長室に至急来るように。繰り返す・・・》

「なんだ？」

また厄介ごとか・・・

42話（後書き）

防衛戦を期待した方・・・すみません

防衛戦は人数的にも点数的にも圧倒的過ぎて一方的に虐殺していった感じだと思います

43話

呼び出され、学園長室にやってきたあたし、雄二、明久

「実は今朝、学園内に侵入者があったのです」

そう言うのは学年主任の高橋先生

「侵入者!？」

「召喚システムのデータでも盗みに来たのか？」

「いや、そうじゃないさね。実は2度にわたる校舎破壊にこの前の覗き騒ぎで、学園の評判がガタ落ちでね」

2度の校舎破壊に心当たりがありすぎるあたしらは目を反らした

「だからその汚名返上として、学会に召喚システムのお披露目をする事になってたのさ」

「じゃあその侵入は、その学会のお披露目を狙った奴の仕業ってことか？」

「えーっと、どういう事？」

「学会にシステムのお披露目をして、イメージアップを謀るのがバアの・・・」

「坂本君？」

「……学園長の狙いだから、それを邪魔する奴等が居るってことだ。学園祭の時の様に」

学園祭において、腕輪の暴走を一般観衆の前で引き起こし、文月学園を脅かそうという動きがあった

……が、明久達の活躍によって、それは免れたが

「っで？それとあたしらを呼んだのと何の関係が？」

「まあシステム自体は問題はないが、ハードの方に問題が発生したようだね」

「じゃあ修理すれば元に戻るじゃないか」

「サーバールームの防犯システムにアクセス出来なくて、扉が開かないんだよ。電源を落とそうにも、無停電電源装置があるから1ヶ月は機能するさね」

となると、壁を壊して中に入るしかない……かでも……

「その学会のお披露目とやらがあるから、派手な事は無理ってわけか」

「壁に穴があいてるなんて、いくらなんでも非常識だよな」

「だから、その修理の為にアンタ達を呼んだのさ。システムのコアに近い教師用召喚獣は、完全にフリーズしていて召喚ができず、生徒の召喚獣も暴走状態だ」

「ですから、吉井君と坂本さんに頼むしかないのです」

「さらに雄二を呼ぶってことは教師が召喚フィールドを張れないってことか？」

「はい」

あたしが確認すると高橋先生が肯定した

「明久はともかく、あたしは壁壊した前科があるからなあ・・・いいのか？」

「今は人を選んでる状況じゃないさね。まあ壊さないようにはしてくれよ」

「はいはい」

「一応意識しとくよ」

「その前に、回復試験を受けていいか？あたしは停学が明けたばかりだから覗き騒動で点数消費したままだ」

「では、こちらへ」

あたしは高橋先生に連れられ外へ

そのまま回復試験を受けた

回復試験も終わり、サーバールーム前・・・
あたしと明久、雄二、試験を受けてる間に呼ばれたと思われる土屋
が配置に付く

「さて、行くか。物理か数学が出るまでフィールド張りなおせよ」

「ああ。アウエイクン！」

雄二のキーワードを受けて、白金の腕輪が起動

それを中心に、一発で物理の召喚フィールドが展開される

「さて、やるぞ明久！サモン！」

「うん！サモン！」

Fクラス 坂本優紀子 & 吉井明久 物理 5 4 3 & 8 7

召喚した召喚獣に土屋がカメラをセットする・・・

作戦内容は、システム冷却用の通気口を伝つての侵入

それから、故障個所を探しての修復という、単純な作業・・・だが

「うわ・・・どうやらシステムの方としては、中に入って欲しくな
いらしいな」

「みただね」

召喚フィールド内に、突如召喚獣が数体現れた

Cクラス代表やEクラス代表、Bクラスの元近衛部隊の人達の召喚
獣だ

「倒して進むぞ、やられんなよ明久」

「優紀姉こそ！」

あたしが点差で、明久が操作技術で押して、次々出てくる召喚獣を倒していく

中には美波の召喚獣もいて明久を執拗に狙っていたりもした倒した数の割合はあたしが7割、明久が3割くらいか

「ゲツ……」

「まずいね……」

Aクラス 佐藤美穂 & 木下優子 物理 3 9 5 & 3 9 8

VS

Fクラス 坂本優紀子 & 吉井明久 物理 4 3 6 & 6 3

「とうとうAクラスの召喚獣が出てきたな……」

こんな点差、操作技術でカバーできる範囲を超えてる……

「どうしよう優紀姉」

「どうするって倒せそうに無いなら突っ切るしかないだろ！先に行
くぞー！」

あたしは2体の召喚獣に突っ込んで佐藤のほうに一撃入れるが……

Aクラス 佐藤美穂 物理 1 5 3

「浅いか・・・」

通り抜けながらで腕だけで振ったために威力がイマイチだった
その後逃げながらカウンターのみに狙いを絞って何とか2体とも倒
した

たった2体で全暴走召喚獣と戦う様な状況だけに、少しずつ点数も
体力も消耗していた
観察処分者の疲労のフィードバックがカメラを通しての戦いで増大
してる感じた

「はぁ・・・」

「大丈夫、優紀姉？」

息が切れてきたあたしを明久が気遣う

明久は高得点の召喚獣のフィードバックについて知らない

この状況で霧島や姫路といったAクラス並みの奴らが一気に来られ
たら・・・

「優紀姉！」

「チツ最悪だな・・・」

そこに現れたのは霧島と愛子と瑞希の召喚獣だった

44話

Aクラス 霧島翔子&工藤愛子 物理 432&312

Fクラス 姫路瑞希 物理 407

VS

Fクラス 坂本優紀子&吉井明久 物理 389&54

霧島の召喚獣は刀で愛子のフォローを充分できる装備、点数だ。つてか召喚大会の時と違ってフォロー役の強いのか・・・でも霧島だけに気を取られたら大斧でバツサリいかれそうだなそれ加えて大剣だけど愛子のよりは振り回しやすい武器の瑞希の召喚獣

そんなことを考えてる隙に霧島の召喚獣が突っ込んできた

「明久！悪いがそいつら2人相手しな！あたしがこいつを倒すまででいいから」

「今の優紀姉じゃ霧島さんには・・・」

「敵わないってか？でも霧島はあたしとやりたいみたいだしな！」

明久との会話中に霧島の召喚獣があたしのに斬りかかってくる明久などまるで目に入ってないかのごとく、あたしのみを攻撃してきた

「おーおーあたしはずいぶんこいつに恨まれてんだなあ・・・ま、あれだけやれば当然か」

執拗に攻撃してくる霧島の召喚獣を見て本人がコントロールしてるんじゃない?とか思ってしまうよ・・・

「でもな・・・そんな曲がった根性で倒されるほど、あたしは甘くねえ!」

ハンマーで霧島の召喚獣の刀を叩き折る

そのまま、霧島の召喚獣を叩き潰そうとした、その時・・・

「ぐあああああつ!!」

「明久!?!ぐつ!」

瑞希の召喚獣が大剣で明久の召喚獣の腹を突き刺していた

あたしも明久に気を取られてる隙に霧島の召喚獣に折れた刀で腹を斬られる

明久の召喚獣が痛みで操作が止まってる隙に愛子の召喚獣が大斧で明久の召喚獣を切り裂いた

ドサツ!

フィードバックに耐えきれず、気絶した明久

そりゃ大斧で体真つ二つにされる痛みを受ければ誰だって・・・

「明久?!しっかりしろ!!」

雄二が明久に駆け寄る

チツこつからはあたし1人かよ・・・と思った瞬間

瑞希の召喚獣は腕をあたしの召喚獣に向けて腕輪を発動した

腕輪が輝き熱線が放たれ、あたしの召喚獣を消し飛ばし・・・

「うつ・・・あ・・・」

0点になると同時に、あたしも意識を失った

「うつ・・・」

「優紀子、大丈夫か？」

「秀吉？」

あたしが目を覚ますと保健室であたしの寝ているベッドの隣で秀吉が座って心配そうにあたしを見ていた

「あつ、気がついたアキ？」

「よかった・・・心配してたんですよ？明久君」

仕切りの向こうで寝かされてた明久も起きたようだ
ん？瑞希が明久君って少し前は吉井君って呼んでなかったか？
あたしの停学中に少し進展したのか・・・

『うつ、うん。ありがとう・・・』

『・・・予想してたとは言え、やっぱりこうなるのね』

『吉井君・・・』

声の感じから明久は2人を畏怖の対象として認識しているようだった
秀吉の召喚獣が出てこなくてよかった・・・

「事情は雄二から粗方聞いたのじゃ・・・」

「ああ・・・」

秀吉が話しかけてくる

「すまぬの・・・わしは何もしてやれんのじゃ。せめてわしの召喚
獣が出てきたら一思いにやって欲しいのじゃ」

「わかった・・・」

秀吉の召喚獣が出てこないことを祈ろう

「明久！」

『優紀姉?!大丈夫だった?』

あたしは仕切りの向こうの明久に声をかける

「お前よりはな。時間が惜しいから2回目行くぞ」

『うん』

「さて、寝起きですぐはきついだろうが、回復試験受けるぞ?」

そう言って保健室から出る

「そういえば、さつき雄二から学会へのお披露目は明日午後1時だと伝えてくれと言われてたのじゃ」

「じゃあ、それまでに何とかしないと」

「だな今更キャンセルなんて、そんな事すれば評判は更にガタ落ちだ」

「学園がなくなると優紀子と一緒にいらなくなるのじゃ」

「そうだな。じゃあ多少卑怯な手を使うか・・・」

そして、視聴覚室にて

「次お願いします!」

明久はさらさらと問題を解いて行く
その問題の内容は・・・

「成程ね。アキでも解ける小学生レベルの問題なら、点が取れる訳ね?」

「そう言うこと」

明久は今、数学(算数)の小学生レベルのテストを受けている
あたしは消費した物理のテストを受けている

そして、テスト終了

Fクラス 坂本優紀子&吉井明久 数学 512&875

「これで戦力的にはかなり改善されたな」

「・・・ああ」

雄二の言葉にあたしは少し迷って返す

明久はあたしも体験したことがない高得点の召喚獣を使う
フィードバックで体がどうなるか全くわからない・・・

「明久・・・気をつけるよ」

「?・・・うん、優紀姉もね」

明久はわかってないようだ

そして、行動開始・・・

「じゃあ行くぞ!・・・アウェイクン!」

雄二の腕輪が、召喚フィールドを展開

数回の展開して数学が選ばれた

前と同じように土屋が召喚獣にカメラをセットして・・・

「優紀子、明久・・・がんばるのじゃぞ!」

雄二の近くにいる秀吉から声援を送ってくる

「ああ、行くぞ」

「うん！早速きたみたい」

「今回はとにかく点数削られないように攻撃される前に潰せ。そのために高得点を取ったんだ」

「わかった！」

あたしと明久は最初に仕掛けてきた常夏の召喚獣共を潰したそれから召喚獣を倒しながらサーバールームに向かう教科が変わったので1回倒した召喚獣も復活していた

「さて、そろそろサーバールームだ」

意外にも1回目の時あたしらを倒した瑞希達の召喚獣はまだ出てきてなかった

今回はそれに加えて美波の召喚獣も出てきていないカメラに外れているケーブルが映し出された、その時・・・

「出てきやがったな・・・」

「だね・・・」

Aクラス 霧島翔子&木下優子&工藤愛子 数学 4 6 7 & 3 9 5
& 3 2 7

Fクラス 姫路瑞希&島田美波 数学 4 1 3 & 1 7 9
VS

Fクラス 坂本優紀子&吉井明久 数学 5 0 3 & 8 6 2

「2対5か・・・きつそうだな」

文月学園、試験召喚システム・サーバールーム

その中で召喚獣による学園と命を懸けた戦いが今始まる・・・

といっても命が懸かっているのはこっあたしち側だけが・・・

45話

「とにかく相手の数を減らすぞ。まずは美波だ」

「わかった」

狙いを美波に絞って特攻する・・・
他の4人に対しては回避だけか、少しカウンターする程度
相変わらず霧島はあたしを執拗に狙ってくる

Aクラス 霧島翔子&木下優子&工藤愛子 数学 447&385
&307

Fクラス 姫路瑞希&島田美波 数学 413&0

VS
Fクラス 坂本優紀子&吉井明久 数学 457&798

何とか美波の召喚獣を倒した
しかしこっちは2人合わせて100点以上削られた

「はぁ・・・はぁ・・・」

「明久、大丈夫か？」

「うん・・・」

霧島の召喚獣の攻撃を避けながら明久を気遣う

やっぱり800点台なんて超高得点の召喚獣のフィードバックはか
なりきついみたいだ

相手はシステムだから体力なんて無限だし長期戦は圧倒的に不利・・・

「明久、ここはあたしに任せて突っ切れ。あんたもう体力的に戦闘はきついだろ」

「そんな！それじゃ優紀姉が！」

「あたしをなめるなよ明久。あたしはあんたより観察処分者の経験が長いし高得点召喚獣の扱いも慣れてるんだ。それに・・・」

実はあたしは明久が観察処分者になるより前からそれになっていたつまり観察処分者としてあたしは明久の先輩だったりする

「・・・あたしの召喚獣の本領はぶつ潰すことだ。適材適所つてことだよ。行け！」

「わかった」

明久が点差を活かして霧島の召喚獣以外の3体の召喚獣を間を突っ切る

途中、攻撃をしてきた愛子の召喚獣に一撃入れて、その後超高得点の機動力をフルに使って3体を振り切ってた

「さあかかって来い！4対1だから手加減はせんぞ？」

Aクラス 霧島翔子&木下優子&工藤愛子 数学 430&385
&127

Fクラス 姫路瑞希 数学 413

VS

Fクラス 坂本優紀子 数学 455

まずは4体のうち機動力が一番低い愛子の召喚獣
点数も削られてるし一撃で落とす！

愛子の召喚獣に向かって突っ込み、一撃を叩き込むが大斧で防御さ
れた

大型の武器だけあつて防御性能はそこそこつてとこか・・・

「チツ・・・ぐっ!!」

防御されて隙ができてランスが足に刺さる・・・足を狙うなんて、
なぶり殺しにする気か・・・
ランスは優子の召喚獣のものだ

Fクラス 坂本優紀子 数学 395

「サードモード!」

あたしはハンマーを振り上げ、腕輪を起動させてハンマーのヘッド
部を愛子の召喚獣の大斧ぐらいの大きさにする

「おりゃあああ!」

バットのようにスイングして追い討ちをかけようとした霧島と瑞希
の召喚獣と一緒に優子と愛子の召喚獣を吹っ飛ばした

Aクラス 霧島翔子&木下優子&工藤愛子 数学 347&305
&0

Fクラス 姫路瑞希 数学 353

VS

Fクラス 坂本優紀子 数学 393

愛子の召喚獣を倒し、残り3体・・・
明久はまだなのか・・・

「明久！まだケーブルはつながらないのか？！」

「まだ・・・ケーブルをつなげようとするすると召喚獣が数体で襲ってくるから時間がかかって・・・」

「やっぱり1人じゃ難しいか・・・さっさとこいつら倒さないと・・・」

ハンマーを元に戻し、構える

「まずいな・・・足をやられたから動きが・・・」

機動力の落ちた召喚獣で攻めるに攻めれず、防戦を強いられる
しかしいつまでも避けてはいられず、徐々に攻撃を食らい始める・・・

Aクラス 霧島翔子 & 木下優子 数学 347 & 305

Fクラス 姫路瑞希 数学 353

V S

Fクラス 坂本優紀子 数学 190

「うっ・・・」

痛みのフィードバックが全身に来て、あたしは膝をつく・・・

「優紀子！」

雄二の近くにいた秀吉が駆け寄ってきて肩を支える

「しっかりするのじゃ優紀子！ここで負けたら・・・」

「秀吉・・・」

そうだ・・・あたしは秀吉との学園生活を守るために戦ってるんだ・
・
熱くなつてすっかり忘れてた・・・

「ぐうつ・・・だああありやあああああ！！」

明久も慣れない高得点召喚獣の疲労や増えていくダメージのフィードバックで膝をつく
最後に最大に一撃と言わんばかりの攻撃で数十体の召喚獣を倒した
その後明久は前に倒れかけ・・・

「アキ！」

「明久君！」

明久は瑞希と美波に支えられてギリギリ倒れないですんだが意識は無いようだ・・・
やっぱり800点越えの召喚獣のフィードバックなんて人間が耐えられるものじゃなかったのか？

「これ以上はもう無理です！やめさせましょう！」

「・・・」

その様子を見ていた高橋先生が諦めの言葉を投げかける
それに対し、学園長は何一つ答えない

「生徒に無益な苦痛を与えるのは、教育者として・・・」

「教育者が諦めるのかつ！まだあたしは、点数は残ってる！戦える
！」

あたしは高橋先生の言葉を遮る

「秀吉。しっかり支えててくれよ」

「うむ。任せるのじゃ」

あたしは膝をついた姿勢から床に座り秀吉に寄りかかってカメラか
ら送られてくる映像を見る

そつえば抱きつく時はあたしが後ろからはあっても、秀吉が後ろ
からってなかったな・・・

「さて、なんでか知らんが待っててくれてありがとうよ」

あたしが膝をついてからなぜか攻撃を止めた3体に向かって再度構
える

システムの防衛が目的だからか・・・

「そつちもシステムを守ってるんだろつが、こつちも守るものがある
から通してもらつよ！セカンドモード！」

あたしは再度腕輪を起動しヘッド部を変形させる

足がやられて機動力が落ちたなら武器で機動力を上げればいい

「ブースターオン！^{マックスパワー}最大出力！」

ジェット噴射を起動させて回転を始める
ある程度ヘッド部に速度が付いたところで敵召喚獣に突っ込む
ハンマー投げのハンマーのように回転運動から一直線に
まずは3体中で点の低い優子、ランスで受けるつもりなのか防御の
姿勢をとっている

「抜けるおおおー！」

ハンマーの先端の錐がランスに刺さりランスは砕け優子の召喚獣を
ふっ飛ばし倒す
ブースターをオフにせずそのまま次の敵、瑞希の召喚獣に突っ込み
これまた大剣で防御する姿勢をとっている瑞希の召喚獣を大剣を折
ってふっ飛ばす……

Aクラス	霧島翔子 & 木下優子	数学	3 4 7 & 0
Fクラス	姫路瑞希	数学	0
VS			
Fクラス	坂本優紀子	数学	2 0

「あと1体じゃ！でも点数が……」

「くっ……」

ブースターの出力を上げてるため点数の消費が早く、もうこれ以上
は使えそうになかった
仕方なくブースターをオフにする
そして召喚獣の腕を左右に広げ……

あたしは腕輪を使う

Fクラス 坂本優紀子 数学 10

VS

E Fクラス 生徒4〜50人 数学 計5000くらい

この点数じゃ20点でも同じだから10点くらいいいか

「行くぞおおおおおおおおお！！！」

ハンマーを集団に投げつける・・・3、40体は巻き込めたか
ケープルを持ち、ケープル差込口に向かって傷ついた足で必死に走る
痛みがズキズキくるな・・・

「あたしの勝ちだああああ！！！」

あたしは叫びながらケープルを差し込んだ タツチダウンを決めた

46話

ん・・・？

なんか頭を撫でられてるような・・・
でもいやな感じはしない・・・

「起きたか・・・優紀子」

「うーん・・・あれ？なんで、あたし・・・？」

「ケーブルを差し込んだあと安心したんじゃない？。眠ってしまったの」

だから保健室にいるのか・・・

「よくがんばったのじゃ優紀子・・・」

秀吉が頭を撫でながら言った
なんか恥ずかしいな・・・

「なら・・・ご褒美欲しいな？」

「う、ご褒美か？な、なんでもいいぞ・・・」

あたしがニヤリと笑って言うと秀吉は顔を赤らめて言った

「そっ、なら」

あたしは頭を撫でている手を取ってベッドに引き込んだ

「ゆ、優紀子?!」

あたしの上半身に布団を挟んで秀吉が覆いかぶさる

「なんでもって言ったよな?なら・・・」

そう言っただ目をつぶる・・・

「なっ!ちよ!」

「ホラ早くー」

からかい気味に急かしてみる

そういえば告白した日以来秀吉からはキスされてなかったな・・・
そんなことを考えてたら唇に暖かな感触が・・・

目を開けるとそこには目をつぶった秀吉の顔が・・・

あたしはかかったと言わんばかりに腕をまわして秀吉をホールドする

「?!」

驚く秀吉を余所にキスを続ける・・・

つとその時

ガラッ

「秀吉いー優紀子は目覚め、た・・・?」

「姉、貴・・・」

「「あ……」」

優子と雄二が入ってきた

ホールドが緩んで秀吉が離れる

あたしと秀吉は雄二と優子のほうに首を向け、見た？的な感じで声を出す

そして4人の間に気まずい空気が……

「「ごゆっくり……」」

ガラッピシヤ

そう言っただけ扉は閉められた

「そんじゃ遠慮なく……」

ガラッ

「って許すわけ無いでしょ！！学校で何やってんのよアンタらー！！」

あたしがもう一回キスしようとしたら優子が怒鳴りながら入ってきた

学校からの帰り道

あたしと雄二と秀吉と優子で帰っている

「へえ……まさか鉄人がねえ……」

あたしは雄二達からあたしが眠ってしまった後の事を聞いている

あの後、サーバルームの扉が開いて教師や開発スタッフが入ろうとしたが、雄二が侵入者を手引きした共犯者がこの中にいる、どこかの少年探偵風に言って、土屋がその共犯者が香川先生であることを証拠付きで暴露し、香川先生がフリーズから立ち直ったばかりの召喚獣を使って逃げようとするも、鉄人の800点に迫る高得点の召喚獣に一瞬で倒され、本人も拘束されたらしい

「そういえば明久は大丈夫なのか？800点越えの超高得点召喚獣のフィードバックで気を失って・・・」

「ああ、あいつは大丈夫だ。バカなだけあって体は頑丈にできてるようだ」

「そっか・・・」

バカと体の頑丈さがどうつながるのかは知らんがまあよかった・・・

「それにしてもアンタ達って本当に学園を左右する事件に巻き込まれるわよね」

「そうじゃの・・・呪われとるんじゃないかの？」

優子が呆れたようあたしと雄二を見ながら言って、秀吉がそれに続く

「そうだな・・・でもあたしは自分の手で守れるからイヤじゃないぜ？」

「守れるって学園を？」

あたしがそう言つと優子が聞いてくる

「イヤ、違つ」

「じゃあ何よ」

あたしが優子の言葉を否定すると、教えなさいよつという顔で聞いてくる

「あたしらの日常」

あたしは秀吉の手を掴み引き寄せて抱きつき、そう言った

「・・・」

優子と雄二は呆れて・・・

「はあ・・・」

ため息を吐いた

「アンタよくそんなことサラツと言えるわね・・・恥ずかしさとか無いの？」

「無いよ」

優子の疑問にあたしは即答する

だってもう・・・恋人ってだけじゃなく大切な人って感じだし・・・恋って言うよりこれは・・・愛かな？

「弟の立場としてこれはどうなの？」

優子が雄二に意見を求めた

「俺としては・・・そうだな、姉貴が幸せならそれでいいんじゃないかと思う。それに秀吉に甘えることで前まであった気を張った様子が無くなって良い方向に変わったと思う」

「ふーん・・・お姉さん思いなのね」

「中学の時は迷惑をかけたからな。姉貴には幸せになって欲しいって思ってるよ」

「そ、そう・・・」

真面目な顔で答える雄二に優子が少し顔を赤くした・・・

ほほう・・・これはもしかして・・・

でもあたしは何もするまい・・・これは雄二が自分でやるべきことだ・・・

姉だからといって口出し手出しはするべきではないな・・・

47話

期末テストがもうすぐの今日この頃

あたしと雄二は秀吉と優子と一緒に登校している
何もしないと決めてたがこれくらいはいいだろう・・・

「ねえ優紀子達、もうすぐ期末試験だけど調子はどうなの？」

「ん？まあいつもどおりだな」

「俺は本気で勉強したから、振り分け試験の倍・・・総合で2000点はいけるだろ」

「わしも、優紀子に少し教わったから前よりは点数がとれそうじゃ」

Aクラスの優等生である優子は、特に焦る様子も見せず気軽にそう
問いかけた

元々総合でBクラスのあたし、そのあたしに少し教わっている秀吉
は、妥当な返答を、雄二は久しぶりに本気を出すこともあって最低
目標となる点数を答えた

「へえ・・・坂本君は本当に勉強できたのね」

「能ある鷹はつて奴さ」

「期末後が楽しみだな。試召戦争が解禁されるし、またAクラスを
狙わしてもらおうよ、優子」

「返り討ちにしてやるわ」

そんな会話を登校中にする
早く期末終わらないかな・・・

「そういえば、昨日明久から今夜泊めてくれてメールが来たんだが、なにがあっただらな？」

「さあな・・・電気ガス水道すべて止められたんじゃないか？」

「ありえるのう」

優子と別れFクラス教室・・・

「おはよー・・・」

少し憂鬱そうに明久が教室に入ってきた

「おい明久、昨日のメールなんだが・・・」

「うん・・・今日、家に泊めてくれないかな？ちょっと帰り辛くてさ」

雄二が明久にメールについて確認をする

ガラッ

「ウチにはアキの本心がわからないっ！」

「そういう事はもっと大人になってからですっ！」

ガラッピシャ

「・・・何、今の？」

「気にすんな。っでその帰り辛い理由は何だ」

「うん・・・ちよつとね・・・」

悩ましげにそう言う明久

ガラッ

「アキ、ちよつとおいで？」

「明久君、お話があります」

FFF団女子団員がオーラ全開で明久を手招きした

「そ、それよりチャイムが鳴るよ！鉄人が来る前に前に席に着かないとーんじゃ、そういう事でっ！」

オーラに気圧されて明久が逃げ出した

「吉井、保健室へ行ってきなさい」

午前中の4つの授業にて、その言葉が7回も出て来た。

「全く、しつこいな。1時間に2回以上言っんじゃねえよ……」

「まあ、無理もないとは思うがな」

「アキ、何かあったの？朝から様子が変見ただけど」

「別に何でもないよ、ちょっとまじめに勉強に取り組んでみようと思っただけで」

怪しいなあ……

授業が終わり、放課後

帰り支度をしてる雄二に、明久が歩み寄る

「雄二、頼みがあるんだけど」

「頼みって朝のか？」

「うん、今日だけどさ、雄二の家に泊めてくれない？一緒に期末テストの勉強しようよ」

ざわっ……

「おい……聞いたか今の……？」

「確かに聞いたぜ。にわかには信じがたい事だが……」

「まさか、アイツがな・・・」

「ああ。まさかあの吉井が・・・」

『期末テストの存在を知って居るなんて・・・』

えらい言われようだな・・・

「勉強を教えて欲しいだど？」

「うん」

「やれやれ・・・お前はまだ7の段が覚えられないのか」

「待つて！僕は九九の暗唱に不安があるなんて言った覚えはないよ？！分数の掛け算だつてきちんとできるからね?!」

「雄二、違ちがう違ちがう。明久はな、今三角形の面積の求め方を覚えているところだ」

「底辺×高さ÷2の三角形の面積！いい加減僕をバカ扱いするのはやめなさい！」

「そうだな。後は最後に÷2をすることが出来たら三角形の面積を求めることが出来るな」

あたし、雄二に乗ってボケたつもりだったんだが・・・

「ふう、やれやれ・・・2人は人の揚げ足を取ることにに関してだけ

「は天才的だね」

「凄え！流石の俺でも予想外だ！」

「あの、明久君」

瑞希がやってきた

「あのですね、九九の覚え方にはコツがあるんですけど……」

「言えるからね！？いくら僕でも九九くらいはきちんと言えるからね！？」

さっきのやり取りで、それについても不安になってきたよ……

「しかし、急にどうしたのじゃ？明久が勉強なぞ、特別な理由でもない限り考え難いのじゃが」

秀吉もやってきた

「いや、ホラ。試験召喚システムのリセットされるとか、期末テストの結果が悪いと夏期講習があるって噂が……木刀と学ランなんて装備をそろそろ卒業したいし、夏休みも満喫したいし、頑張ってみようかな、なんて」

「……システムのリセットなんて噂は無い」

「仮にあつたとしても……アキがその程度で勉強をするなんて思えないわね」

土屋と美波も来た

システムのリセットなんて噂あったとしても、この時期じゃ勉強させるためのデマだろ

夏期講習はあってもおかしくないけど

「あー、えつと、実は」

「嘘をつくな」

「急に勉強に目覚めて・・・って、早いよ！まだ何も言っていないに！」

それでも否定はしないんだな

「まあ、次の試召戦争のこともあるし、勉強くらい教えてやらんでもないが」

「え？ホント？」

「ただし、お前の家だ。その方がやり易いだろ」

それが妥当だな

「って、僕の家はダメだよ！今日はちょっと、その、都合が悪いんだ！」

「都合が悪いだと？何かあるのか？」

「う、うん。実は今日、家に改装工事の業者が」

「嘘つけ。本当なら今日はお前の家でボクシングゲームをやる予定だったろうが。改装業者が来るはずないだろ」

あっそういえば昨日雄二がそんなこと言ってたな

「じゃなくて、家の鍵を落としちゃって」

「マンションなんだから管理人に言えば開けてもらえるだろ」

「でもなくて、家が火事になっちゃって」

「火事に遭ったくせに弁当を用意してYシャツにアイロンをかけてきたのか？お前はどこまで大物なんだよ」

でもなくてって言うてる時点で嘘だろ

確かに今日は珍しく明久が弁当を持ってきてたな・・・

「あー、えーっと他には他には・・・！」

「いい加減にしないで。アンタの嘘は底が浅いのよ」

「ぐ・・・」

こつこつこの積み重ねが信用を無くしていくんだらうな・・・

「わかったよ。今日はおとなしく家に帰るよ・・・」

「待つんじゃないか。何をそこまで隠しておるのじゃ？」

鞆を担いで帰ろうとした明久の肩を秀吉が掴む・・・

さらに追い討ちをかけるとは秀吉も案外Sだな

「うえっ？いや、別に何も！」

「何があるのかわからんが、このバカがそこまで隠そうとすることか・・・面白そうだな」

雄二も趣味が悪いな・・・今更だが
まあ・・・

「じゃあ確認しに行くぞ。いいな明久」

あたしもなんだがな・・・

48話

明久のマンション近く・・・

「でも、なんででしょうね？明久君がそこまで隠すものって」

「急に手作りの弁当を持ってきたこと、Yシャツにはアイロンがかかっておったことなども合わせて考えると・・・」

「女でもできたか」

『・・・っ！』

瑞希が明久が何を隠してるのかと言うと、秀吉が推理して、雄二が可能性を提示する

その可能性にその場にいる全員が驚愕の表情を浮かべ明久を見る

「あ、アキツ！どういうこと！？説明しなさい！」

「・・・裏切り者っ！」

「僕、何も言っていないんだけど・・・」

明久、今までこんな状態のこいつらが、あんたの言うことに聞く耳持ったことあるか？

「大丈夫ですよ。明久君が私たちに隠れてお付き合いなんて、そんなことをするはずがありません。私は明久君を信じています」

瑞希は珍しく冷静・・・

「ね、明久君？ 私たちに隠れてそんな人がいたりなんて、しませんよね？」

・・・じゃねえな。目がいつちやってる・・・

そしてとうとう明久の部屋の前・・・

「ま、中に入れば全部わかるだろ。ほら明久、鍵を出せ」

「ヤだね」

雄二が観念しろと言う表情で言うと明久が最後の抵抗を試みる・・・

「明久。裸Yシャツの苦しみ、味わってみるか？」

なんじゃそら・・・？

「え！？ 待つて！ 途中のステップがたくさん飛んでない？！」

「・・・涙目で上目遣いだとありがたい」

「じゃあ、私は・・・家庭的にエプロンとかですか？ あ、後は・・・アキちゃんにでもなってみます？」

土屋は予想できたが瑞希もか

瑞希も鬼畜だな・・・

「2人とも！ポーズの指定を出すなんて、秀吉バージョンと一緒に売る気?!」

「なぜそこでわしを巻き込むのじゃ?!」

「売るならお前のだけだ!」

ぶっ飛ばすぞ、この野郎

「土屋君。できれば、Yシャツのボタンの上2つは開けてください
ね……」

「瑞希、アキちゃんにするならウチに服を選ばせてよね」

「姫路さんも美波も最近おかしいからね?! わかったよ! 開けるよ
! 開ければいいんでしょ!」

最初からそうすればいいんだよ

「……ボタンを?」

「家の鍵を!」

土屋はそこまで執着するんだな……
明久は大人しく諦めて家の鍵を出す

ガチャッ

「それじゃ、あがってよ」

明久に招かれ、入るとそこには・・・

『・・・』

そこには、女性用の下着・・・ブラジャーが・・・

「いきなりフォローできない証拠があーっ！」

明久が叫んでいる中、口々に出る感想

「・・・もう、これ以上ないくらいの物的証拠ね」

「あとは女ができたか盗んできたか・・・」

「そ、そうじゃな・・・」

「・・・殺したいほど、妬ましい・・・!!!」

弁明は不可能。そしてこの状況で何故か瑞希は笑顔で明久に近寄って・・・

「ダメじゃないですか、明久君」

「え？何が？」

「あのブラ、明久君にはサイズが合っていないですよ？」

『認めない気だ・・・』

現実逃避をし始めた

瑞希の身体の回りに絶対認めねえオーラが見えた気がした

「姫路さん、これは僕のじゃなくて!」

「ん?これは・・・」

あたしが卓上に何かを見つける。これって・・・

「おそらく、化粧用のコットンパフじゃと・・・」

「いいえ。アレはハンペンです」

『ハンペエン?!』

と、とことん否定するつもりだな・・・瑞希

それと秀吉がコットンパフを知ってるのは演劇部だからだよな?

「むっ、これは・・・」

「・・・女性向けのヘルシー弁当」

秀吉が台所にある物を見つけ、土屋が何か答える

すると瑞希が顔に両手を当てて床に座り込んだ・・・

「姫路さん?!どうして急に泣き出すの?!」

「もう、否定しきれません!」

「どうして女物の下着も化粧品もセーフなのにお弁当でアウトにな

るの?!」

明久に意見も尤もだ・・・
そんなことを考えていると・・・

「あら・・・?お客様ですか?」

そう言いながら女性が入ってきた

「はぁ・・・紹介するよ。僕の姉さんだよ・・・」

「吉井玲です。皆さん、こんな出来の悪い弟と仲良くしてくれて、
どうもありがとうございます」

つとお辞儀をする明久の姉、玲さん

「あ、ああ、どうも。俺は坂本雄二。明久のクラスメイトです」

我に返った雄二が挨拶をする

「・・・土屋康太です」

「わしは木下秀吉じゃ。初対面の者にはよく間違われるのじゃが、
わしは女ではなく・・・」

「ええ。男の子ですよね?秀吉くん、雄二くん、康太くん、ようこそ
そいらっしやいました」

「・・・っつ!」

秀吉が驚いて玲さんの顔を見ます

「わ、わしを一目で男だとわかってくれたのは、優紀子と主様だけじゃ……!」

秀吉が感動してる……いつも女子と間違われてばかりだしな……あれ？あたしも最初はからかって可愛い娘って言わなかったっけ？

「もちろんわかりますよ。だって、うちのバカでブサイクで甲斐性なしの弟に、女の子の友達なんてできるわけがありませんから」

そんな理由でわかったのかよ……

「ですから、こちらの3人も男の子ですよね？」

おっとそうきたか……

「ちよ、ちよつと姉さん！？出会い頭になんて失礼なことを言うのさ！4人ともきちんと女の子だからね?!」

「明久！わしは男で合つとるぞ?!」

「……女の子、ですか？」

明久の言葉に反応した玲さんが、ゆっくりと明久に極寒の表情を向けた

49話

「アキくん。今回の不純異性交遊は150点に値します」

「ええっ！？そんな！まだ何もやってないのに！」

「・・・まだ？・・・200に変更します」

「ふぎゃあああつ！姉さんのバカあーっ！」

家族からも信用されて無いんだな・・・

「ごめんなさい。話が逸れてしまいましたね。貴女方3人のお名前を伺っても宜しいでしょうか？」

「あ、はい。申し遅れてすいません。私は姫路瑞希といいます。明久君のクラスメイトです」

「ウチは島田美波です。アキとは・・・友達です」

「坂本優紀子です。雄二の双子の姉です。同じくクラスメイトです」

途中で止まっていた自己紹介を続ける

「瑞希さんに美波さんに優紀子さん。はじめまして」

「ところで、姉さんは何をしに出掛けていたの？」

「お夕食の買い物に行ってきました」

「あれ？でも、随分と量が多いね」

玲さんの手に持っている袋を見ると、確かに2人分とは思えない量の材料が入ってる

「いいえ。その量であっています」

外見に似合わず大食いなのか？

「折角皆さんがいらっしやっただことですし、お夕食を一緒にいかがでしょうか？大したおもてなしはできませんが」

「そうだな。そうさせてもらうかな」

「じゃああたしも」

「・・・御馳走になる」

「迷惑でなければわしも是非相伴させて頂きたい」

「うちも御馳走になろうかな」

「じゃ、じゃあ、私も・・・」

全員が首を縦に振る

こんな大勢で食べる機会はあるまいからな

「それは良かったです。ではアキくん、お願いしますね」

「うん。了解」

明久の料理・・・初めてだな

「んじゃ、ちよつと早い我先に夕飯の支度から始めるか。明久、手伝うぞ」

「・・・協力する」

うーん・・・一般家庭の台所に4人は狭いからあたしはいいか・・・

「あ、うん。ありがと2人とも」

そして夕食をとったあとに勉強をするという形になった

「取り合えあず皆さん。食事が出来るまで何をして待ちましようか？」

「じゃああたしが質問していいですか？同じ弟がいる姉として」

「なんででしょうか？」

「明久の事・・・家族なのに全く信用して無いんですね。最初の出来の悪い弟つてのがお世辞とか挨拶の文句に聞こえないくらいに」

「それは・・・あの通りですからね」

あたしの直球の質問に玲さんは台所の明久に目を向けながら答えた

「信用して無いくせに1人暮らしをさせる・・・か。矛盾してませんか？なんで明久の両親はあいつに1人暮らしをさせてるんですか？信用が無いなら親戚なり信用のある知人なりに面倒見てもらうなり定期的に訪ねてもらうなり色々やりようがあるでしょ。それをせざるほつたらかして、急に帰ってきて生活に点数つけたりおかしくないですか？」

「・・・」

あたしが思ったことを言っていく
玲さんはただ黙って聞いていた

「両親や玲さんにも事情があつたんでしょうけど、こんな放つて置くほど忙しい事情だつたんですか？ちなみに玲さんは今までどこで何を？」

「去年までアメリカのボストンの大学にいました。いまは向こうで仕事を・・・」

「大学卒業したとき日本に戻つて来ようとは思わなかつたんですか？まあ、それについては玲さんの人生だから明久に縛られる必要は無いでしょうけど、戻つてこないという選択をしたなら、そんな点数つけて生活を評価するのはやっぱりおかしいと思いますよ」

「これは母さんをお願いされたことです。アキくんの生活状態を見て報告して欲しいと」

「ならご自分でつとえばいいですよ。自分の子供が心配で信用して無いなら自分が傍にいればいいじゃないですかつと、それが親で

すよ、仕事なんてただの言い訳、心配ならほったらかしにするなんておかしいですよって言えばいいんです」

こっちの事情も知らないくせにとか言われそうだな

「・・・確かに私もそう思います。わかりました。両親には私から相談してみます。点数については・・・今回は手心を加えましょう」
認めた・・・薄々気付いてたのかな・・・
ちよつと変なところもあるけど、この人もやっぱり姉なんだな・・・

「みんな、待たせたな。夕飯ができた・・・ぞ？なんだこの空気？」

「いえ、なんでもありませんよ。ありがとうございます。お客様なのにアキくんのお手伝いまでして頂いて」

雄二達が料理を持ってきた

いくつかのテーブルをくつつけてそこに置かれた料理は・・・パイエリア

「パイエリアか・・・作ったこと無いな」

「あ、ありがとうございます・・・」

「お、美味しそうね・・・」

瑞希も美波もあたしらの真面目な会話についていけてなかったみたいだな

それともまたなんか余計なお世話なことをしてるなと呆れてたのか

「ん？どうしたのみんな？」

「気にするな明久……」

雄二の後から料理を持ってきた明久もやっぱり気になった様子

「アキくんの昨日のお風呂の写真を見ていたのですよ」

「このバカ姉があーっ！いつの間にそんな写真を？！さては着替えか！脱衣所に着替えを持ってきた時かっ！」

場を和ませるための冗談かと思ったら心当たりあるのかよ

「アキくん。あなたは どうしてそんなに落ち着きがないのですか？」

「それは姉さんの行動が原因なんだからね？！」

「ほら。またそうやって大きな声を出して……カルシウムが足りない証拠ですよ」

そう言っつて玲さんは明久の前のパエリアをよけて、代わりに深皿を一つ置く

「それでは皆さん、貝の殻はこのお皿に入れて下さい」

心配は……してんだよな……

「何それ？！僕の夕飯は貝の殻だけなの？！これってただの苛めだよね？！」

「明久、落ち着けよ、ジョークだろ」

さっきあたしらを男の子と言ったのを考えるとマジな可能性もあるが
「うう・・・姉さん・・・もしかして、姉さんは僕のことを嫌いな
の・・・?」

明久の質問に、玲さんは心外だと言わんばかりの表情で・・・

「何を言っているのですかアキくん。姉さんがアキくんを嫌うわけ
がないでしょう?寧ろ、その逆です」

「え?嫌いの逆ってことは」

「無論、大好きです」

「そ、そうなんだ・・・」

「はい。姉さんはアキくんのことを愛しています」

アメリカにいたただけあって感情表現が真っ直ぐだな・・・

「・・・異性として」

おいおい・・・

「最後の一言は冗談だよな?!それなら寧ろ嫌いであってくれた方が
嬉しいんだけど?!」

「日本の諺には「こういうものがありますよね」

「何?! また余計な事を言うの?!」

「バカな子ほど可愛い、と」

「諦める明久。世界でこの人ほどお前を愛している人はいないぞ」

「待って! それは僕が世界で一番バカだって思われていることなの?!」

珍しく正解だな明久

「う、ウチだってアキのことを世界で一番バカだと思っているわ!」

「わ、私だつて! この世界で明久君以上にバカな子はいないと確信しています!」

あんたらひでえ・・・

そんなので明久に気持ち伝わらないのわかってるだろうに

「やめて! それ以上みんな僕のがラスのハートを傷つけないで!」

「ま、そんなどうでもいいことは置いておくとして」

「ど、どうでもいいんだ・・・結構僕の人生を左右しそうな内容の会話みたいだったんだけど・・・」

「とにかく、冷めないうちに頂きましょう」

『頂きまーす!』

そう言っただ目の前の料理に一齐に手が始める

「む。これはまた、美味しいもんじゃな」

「そうか。口に合ったようで何よりだ」

「そう言っただ貰えんと作った甲斐があるよ」

「……（コクリ）」

秀吉はこういうのも好きなのか……
今度雄二に作り方聞いとくか

「あれ？2人ともパエリアは苦手だった？」

明久が気まずいそんな顔をしている瑞希と美波に声をかけた

「う……いや、嫌いじゃないし、凄く美味しいんだけど……」

「だからこそ、落ち込むと言いますか……」

「明久……女にもプライドってのはあるんだよ」

「……？」

明久はわかってないようで首をかしげていた

「ところで、皆さん」

みんなが料理を食べてる中、玲さんがふと顔を上げ、話を切り出す
「うちの弟の学校生活はどんな感じでしょうか？例えば、成績や異性関係など」

聞きたいのは異性関係かな？

「えっと、明久君はすごく頑張っていると思います。最近成績も伸びてきたみたいですし」

「そ、そうね。たまにドキッとする時があるわ」

「そうですか。それで、異性関係は？」

「え、えっと、それは、その、よくわかりません・・・異性関係は」

「そ、そうね。ウチもあまり知らないわね・・・異性関係は」

なぜ異性関係と強調する・・・？

「異性関係、のう・・・」

「秀吉くんは何かご存知でしょうか？」

「そうじゃな・・・何か、となると」

「秀吉、あーん」

「んむ？あーん、じゃ」

明久がフォークにキノコをさして秀吉の口まで持って行く・・・

「明久・・・人の彼氏に手を出すとはいい度胸してるじゃないか」

「ごめん優紀姉！でも・・・」

「優紀、姉？優紀子さんのことですか？」

玲さんがあたしの方を向いて聞いてくる

「そうですね。こいつはなんでかそう呼んできますね。最初は姉じゃないって言うってたんですけど、直りませんでしたから諦めました。まああたしもこいつは弟のような感じですし・・・」

「そうですね・・・それで秀吉くんは先程何を？」

玲さんは少し肩を落として秀吉に続きを促した

「むう。そうじゃな・・・本人が何も言わんのならば、わしが何かを言うわけにはいきまいて」

ギリギリで返事をかわしたな

「あら、秘密ですか。それでは・・・今度アキくん自身に、じっくりと聞かせてもらおうとしましょう」

「それが良いじゃろ」

その言葉に明久はがっくり肩を落とした

「そう言えば、言い忘れていました。明日から姉さんの食事は用意しなくても結構ですよ」

「え？そうなの？」

「はい。こちらで済ませておかないといけない仕事があつて、明日から土曜日か日曜日くらいまでは帰りが遅くなりそうなのです」

玲さんはやっぱり仕事が忙しいみたいだな

「アキくん、嬉しそうですね」

「うえ！？い、いや、そんなことはないよっ。折角帰ってきた姉さんがいないのは凄く残念だよ！」

「英語で言ってみてください」

「Happy」

「・・・アホだな」

「あっ！痛っ！姉さっ！食事中にビンタはっ！」

そんな姉弟喧嘩を見つつデザート食べる・・・

夕食を食べ終え、ササツと片づけをした後、あたしらはリビングに集まり勉強道具を広げ始めた

「そろそろお勉強を始めましょうか？」

「そうね。あまり帰りが遅くなっても困るし」

玲さんと話し込んで本来の目的忘れるところだったな・・・でも夕飯を早めに食べたから、まだ7時ぐらいだけど

「ならばわしも一緒に教えてもらおうとするかの」

「・・・同じく」

この光景を鉄人が見たら泣くだろうな

「そうだね。テスト前だからってわけじゃなくて、いつものように勉強を始めようか！」

「皆さんでお勉強ですか。それなら良い物がありますよ？」

「良い物？」

「はい。今日部屋を片付けていて見つけました。今持ってきますね
玲さんは何かを取りにリビングから出て行った

「参考書というのかもしれませんが、役に立つかもしれないので」

そう言ってテーブルの上に置かれたのは・・・

女子高生 魅惑の大胆写真集

「アキくんの部屋で見つけました」

「僕のトップシークレットがあーっ!!」

「保健体育の参考書としてどうぞ」

「どうぞ、じゃないっ!こんなもんが参考になるかーっ!」

玲さんさっきのHappyの発言怒ってんだるか・・・

「そ、それじゃあ、あくまでお勉強の参考書として・・・」

「そ、そうね。ウチもちよっと勉強しておこうかな・・・」

「姫路さんに美波?!無理に姉さんのセクハラに付き合わなくていいんだよ?!というかお願いだから見ないで!」

ついに明久の趣味が白日の下につてか?

「アキくん。ベッドの下に置いてあった他の参考書も全て確認しましたが、あなたはバストサイズが大きく、かつヘアスタイルはポニテールの女子という範囲を重点的に学習する傾向がありますね」

「冷静に考察を述べないで!いくら言い方を変えて取り繕ってくれども、それが僕の趣味傾向だってことかバレちゃうんだから!」

明久、その発言は認めてるようなもんだ
玲さんの考察を聞き、瑞希は美波の髪を、美波は瑞希の胸をじっと
見ている

「お主ら、勉強は良いのか？」

「そ、そうだね。秀吉の言う通りだよ！さあ勉強を始めるよみんな
」！

「そ、そうですね。お勉強を始めましょうか。んしょ・・・っと
そう言っつて瑞希が髪をまとめだす

「み、瑞希っ！どうして急に髪をまとめ始めるのよっ？！」

「べ、別に深い意味はありませんよ？ただ、お勉強の邪魔になるか
と思っつて」

「それならウチがやってあげるわ！お団子でいいわよねっ！」

「い、いえ。ポニーテールにしたいと」

「ダメっ！お団子なの！」

「美波ちゃん、意地悪です・・・」

美波がんばれー

「お勉強なら、宜しければ私が見て差し上げましょうか？」

「え？お姉さんが、ですか？」

「でも向こうの教育とこっちの教育って違うんじゃない？」

「向こう？」

あたしの言葉に疑問を持つ雄二

「はい。日本ではなくアメリカのボストンにある学校ではありませんが、大学の教育課程を昨年修了しました。多少はお力になれるかと」

「ぼ、ボストンの大学だと……？！それってまさか、世界に名高いハーバード……」

「よくご存知ですね。その通りです」

『えええっ?!』

おいおいマジかよ……あたしも雄二に言われるまで気付かなかつたよ

「なるほど、出廻らしか……」

「雄二。その言葉の真意を聞かせてもらえないかな」

いや、雄二がそう考えるのも無理はないよ……

「そついうことなら、玲さんに色々教えてもらおうぜ」

「確かに本場の英語とか、こっちの教師が教えないことも知ってそ
うだな」

「・・・頼もしい」

「わかりました。それでは、まずは英語あたりから始めましょうか」

『宜しく願います』

10時になりそろそろ解散しようということに・・・

「今日はありがとうございました、玲さん」

雄二達がゾロゾロと玄関から出て行って、あたしが最後に玲さんにお礼を言う

「いえ、こちらこそありがとうございました。弟のことを気にかけて
くれて」

「まあ姉と慕ってくれてますからね・・・弟を守るのが姉の務めつ
てところですかね」

「そうですね・・・優紀子さんにだったら弟を任せてもいいと思っ
たんですけど・・・異性として」

異性としてって・・・恋人としてって事?!

「残念ですが、あたしにはもう恋人がいますからね・・・」

「秀吉くんでしたね」

「ええ、あいつの姉にも弟をよろしくと言われました。それに明久はあたしを頼るだけですが、あいつは・・・秀吉はあたしを支えてくれますから・・・」

「そうですか・・・なら諦めます。では、また」

「はい、また」

そしてあたしは玄関から出た

ガチャッ

「優紀子、玲さんと何話してたの？」

「気になります・・・優紀子さん」

戸を閉めると瑞希と美波が聞いてきた

「秘密。秀吉、帰ろう。雄二達は瑞希と美波を送ってやれよ」

そう言って秀吉の手を取って歩き出した

51話

勉強会2日目

今日はあたしの家でやることに

「んじゃ、入ってきてくれ」

『お邪魔しまーす』

昨日と同じメンバーを雄二が家に迎え入れる

「ねえ優紀姉、雄二。家には誰もいないの？」

「ああ。親父は仕事で、おふくろは高校の同級生たちと温泉旅行らしい。だから何の気兼ねせずゆっくりしてくれ」

「雄二、何言ってるんだ？母さんはいるぞ？」

「そんなバカな?!」

そう言ってる雄二がリビングのドアを開ける

「……ふちふちふちふち」

リビングには一心不乱にプチプチを潰している母さんの姿があった

「……」

パタン

何も言わずにドアを閉める雄二

「ほらな？」

「ゆ、雄二……？今の、山ほどあるプチプチを潰していた人って……」

「……赤の他人だ」

雄二、現実逃避しても無意味だよ

「さ、坂本の母親なの……？」

「なんか、ずいぶん凄い量を潰していたんだけど……」

「う、うむ。あれほどの量。費やした時間はおそらく1時間や2時間ではきくまい」

「……凄い集中力」

「坂本君のお母さんはそういうお仕事をされているのでしょうか？」
どんな仕事だよ

「母さん、そのプチプチあたしが使っちゃったでしょ。潰したら使えないじゃん」

「おふくろっ！何やってんだ?!」

あたしと雄二がリビングに入って母さんに言う

「あら雄二、優紀子。おかえりなさい」

「おかえりなさい、じゃねえ！なんで家にいるんだ？！今日は泊まりで温泉旅行じゃなかったのかよ？！」

「それがね、お母さん日付を間違えちゃったみたいなの。7月と10月って、パツと見ると数字が似ているから困るわね」

「どこが似ているんだ？！数字の形どころか文字数すら合っていないだろ？！」

「こら雄二。またそうやってお母さんを天然ボケ女子大生扱いしてっ」

「サラツと図々しい台詞をぬかすな！あなたの黄金期は10年以上前に終わっているはずだ！」

「あたしが温泉旅行は10月だよって前々から言ってたよね？天然ボケっていうより痴呆でしょ」

「・・・あら、そちらはお友達かしら？」

逃げたな・・・

「皆さんいらっしやい。うちの雄二と優紀子がいつもお世話になってます。私はこの子達の母親の雪乃と言います」

そう言っただけで挨拶する母さん

「ゆ、優紀子達の母親って・・・若過ぎない!？」

「むう・・・とても子を産んでおるとは思えん・・・」

「・・・美人」

「まるで2人のお姉さんみたいですねー」

あたしもこんな風に若い見た目のまま年を取るんだろうか・・・

「み、みんな、とりあえずおふくろは見なかったことにして、俺の部屋に来てくれ・・・」

「う、うん。それじゃ、お邪魔します」

雄二はみんなを部屋に向かわせる

「みなさん、後でお茶を持っていきますね」

「勉強初めて落ち着いてからあたしが取りに来るからいいよ」

そう言ってあたしも雄二の部屋に移動する

「そういや、久しぶりに雄二の部屋に来たよ」

「わしもじゃ」

「・・・同じく」

そういえば今年に入ってからはまだ来たこと無かったな

「え？アンタ達は良く来てるんじゃないの？」

付き合いが長いだけに、少し意外そうに美波がそう聞く

「大抵は明久の家に集まっておったからの。じゃから雄二の家だけではなく、わしゃムツツリー二の家でもあまり遊んだ事はないのじや」

「……（コクコク）」

「そういえばあたしも秀吉をウチに呼んだことって無かったな」

「そ、そうじゃのう……」

お、今更意識しだしたか……？

「それはそうと……やっぱりこの人数で俺の部屋は狭すぎるか。まいったな……」

「優紀子の部屋も使えばいいじゃない」

雄二がそう言うと美波があたしの部屋はと言っ

「あたしの部屋は……趣味の道具や材料が置いてあってここより狭いから無理だな」

「趣味ってアクセサリー作り？片付けてないの？」

「片付いてはいるが物が多くてな・・・だから勉強するには向かないな」

工房とかアトリエって言ったほうが正しいしな

「ならリビングじゃダメなの？」

「ダメじゃないが、おふくろがいるからな。勉強にならない可能性が高い」

「もうっ、ダメですよ坂本君。お母さんを邪魔者扱いしてっ」

「そうは言うがな姫路、お前はあのおふくろと一緒に暮らしていないからそんな事が言えるんだ。四六時中一緒に居るとツツコミ所が多すぎて・・・」

まあ昨日も玲さんに大分時間食われたしな・・・

その分ハーバード大学卒業生の講義を聴けたけど

P r r r ! P r r r !

雄二が反論していると、突然部屋に電子音が鳴り響く

「あ、ウチの携帯ね。ちょっとコメント」

美波が携帯電話を取りだして耳に当てる

「もしもし？あ、Mut・・・お母さん。どうしたの？・・・うん。・・・うん。そう。わかった」

短い通話を終えて、美波は携帯電話をしまった

「なにかあったのか？」

「うん・・・今週は仕事が休みだからって母親が家に居るはずだったんだけど・・・ちょっと急な仕事が入って家に居られなくなっ
みたい」

「あ、そうなの？それじゃ、葉月ちゃんが家に1人って事？」

「そうね。だから悪いけど、ウチは帰るわ。勉強はまた今度ね」

まあ仕方がないな。まだ小学生の女の子を家に1人しておくのは
姉として不安だろうし

美波が鞆を手にして部屋を出ようとすると

「待て島田」

雄二が美波を引き留めた

「それなら、場所をお前の家に変更しないか？」

52話

あの後美波も了承し場所を美波の家にすることに

「ただいまー。葉月、いる？」

玄関の扉を開けて美波が声を出す

「わわっ、お姉ちゃんですかっ。お、お帰りなさいですっ」

廊下に面した部屋から、葉月が勢いよく飛び出してきた

「？葉月、今お姉ちゃんの部屋から出てこなかった？」

どうやら、あの部屋は美波の部屋みたいだな

「あ、あう・・・実はその・・・独りで寂しかったから、お姉ちゃんの部屋に行って・・・」

言い難そうにしながらパーカーの大きなポケットに何かを隠す葉月

「ぬいぐるみでも取ってこようと思ったの？そのくらい、お姉ちゃんには別に怒らないのに」

「そ、そうですね？お姉ちゃん、ありがとうございますっ」

「葉月ちゃん、こんにちは」

「あっ！バカなお兄ちゃんっ！」

明久が姿を見ると、葉月は勢いよく明久に抱きついた

「こんにちは、葉月ちゃん。お邪魔しますね」

「わあっ。綺麗なお姉ちゃんたちまで。今日はお客さんがいっぱい
ですっ」

あたしらを見ると、身体全体で喜びを表していました。まさに天真
爛漫って感じだな

「ほらほら、葉月。アキから離れなさい。みんなが中に入れないで
しょ?」

「あ、はいです。それじゃ、バカなお兄ちゃんたち、こっちにどう
ぞっ」

明久の手を掴んで葉月が先陣を切っていくので、あたしらはその後
に続く

明久がふとドアの開いた部屋に目を向ける

「ちよっ、ちよっとアキっつ?!」

「ほえ?」

明久が振り返ると同時に、脳天、鼻先、下顎の3か所を攻撃され、
バランスを崩した所で両手首が一瞬で外される

「何見てるのよ?!」

地獄だな

「いい？この部屋は絶っつっ対に、入ったらダメだからねっ！」

「やれやれ。お前らは何をやっているんだか・・・チビツ子、元気だったか？」

「はいですっ。おっきいお兄ちゃん」

雄二はおっきいお兄ちゃんか・・・

「そうかそうか。それは良かった」

「それで葉月ちゃん、リビングはこっちでいいのかな？」

「はいですっ。こっちですっ、おっきいお兄ちゃん」

あたしもかよ・・・

「とりあえず適当に座ってもらえる？今テーブルを持ってくるから」

「？お姉ちゃん、テーブルなんて何するです？トランプですか？」

その様子を見て、事情を知らない葉月が首を傾げている

「葉月、今日はお姉ちゃん達はね、うちでテストのお勉強をするの」

「あう・・・テストの勉強ですか・・・それじゃあ葉月は、自分のお部屋で大人しくしてるです・・・」

「待つて葉月ちゃん。良かったら僕らと一緒に勉強しよっか？学校の宿題とかさ」

「えっ？葉月も一緒にお勉強していいですかっ？」

パツと表情が輝く

「勿論だよ。ね？」

「ああ。どうせ1人に教えるのも2人に教えるのも変わらないからな」

「雄二。それは僕が小学校5年生レベルだと言っているのかな？」

三角形の面積を求める公式も間違っくらいだしな

「葉月ちゃん。一緒にお勉強しましょうね」

「わしはあまり教えてやれることはないかもしれんが、一緒に勉強するのは大歓迎じゃ」

「・・・保健体育なら教えてあげられる」

「土屋・・・その台詞はアウトだ」

「葉月、一緒にお勉強したいですっ」

「ん、それなら勉強道具を持っておいで」

「はいですっ」

リビングを出て行く葉月

明久と一緒にいられる嬉しさが足音でわかるくらいに浮かれてる

「さてと。そんじゃ、テーブルを持ってくるんだろ？手伝うぞ島田」

「あ、大丈夫よ。ウチ1人で」

「そうか。まあ、誰かの写真でも飾ってあるのなら、下手に歩き回られたくないだろうから無理に手伝うとは言わないがな」

「ななな何言ってるのよ坂本?!あんたまさか、さっき部屋の中が見えてたの?!」

「いや、ジョークのつもりだったんだが・・・」

「島田も存外乙女じゃな」

「・・・毎度ご贔屓に、どうも」

美波の部屋の秘密はまあ置いていて

「ところで、夕飯はどうするんだ?」

「・・・何か作る?」

「俺は別にそれでもいいけど」

「僕もそれでいいよ」

「昨日ご馳走になったからあたしが作ってもいいぞ？」

現在時刻は5時。何かを作るなら買い物に行つた方がいい時間だな

「今日はピザでも取りましょ。作る時間が勿体無いし」

「そうですね。特に明久君は頑張らないといけませんから、ご飯を作つていちゃダメです」

それもそうだな

「なんじゃ。わしはてつきり島田が手料理を振る舞うのかと思つておつたのじゃが」

「昨日、プライドを打ち砕かれたからちよつと、ね・・・」

「美波の料理が食べたいのか？秀吉」

「む、いや違つぞ！優紀子」

「焦つちやつて可愛いな」

「むう・・・」

「そこ！イチャイチャしない！いいからみんな適当に座つて。今テーブル持つてくるから」

美波が一旦リビングを退室すると、入れ替わりで葉月が出てきた

「お待たせしましたですっ」

「葉月ちゃん、やる気いっぱいだな」

「はいですっ。あ、バカなお兄ちゃん、ここへどうぞです」

「ありがとう、葉月ちゃん」

「いえいえですっ」

葉月なら玲さんも気に入りそうだな・・・
年の差が何とかなれば

「葉月の席はここですっ」

葉月が明久の膝の上に座った
積極的だな葉月・・・

「お待たせ。このテーブルをそっちに・・・って、コラ葉月っ。何してるのっ」

「えへへー。葉月はここで勉強するです」

「ダメ。アキのお勉強の邪魔になっちゃうでしょ?」

「美波。僕なら別に大丈夫だよ。葉月ちゃんなら小柄だし」

「バカなお兄ちゃん、優しいですっ」

「それならいいけど・・・アキ。変な気は持ってないわよね?」

美波も葉月の姉としてはいいのにな・・・
その姉としての気遣いを明久にもできたら玲さんに気に入られただ
ろうに・・・

「明久君。万が一変なことをしたら、大変なことになりますからね
？」

「イエス、ママ。毛ほども下心はございません」

そうやって準備を整えた面々は、葉月を交えて勉強を始めた

53話

それから数時間後・・・

「ん？もうこんな時間か。そろそろ今日は終わりにするか」

気がつくと時計は9時半を指していた

「なんじゃ。あつと言つ間じゃったな」

「・・・集中してた」

「すっかり暗くなってますね」

雄二の一言に、全員がペンを置いた
あたしも疲れたな・・・

「後はまた今度にするとして、今日は帰ろつぜ」

「そうですね。美波ちゃん、今日はありがとうございました」

「あ、ううん。こっちこそありがとう。ほら葉月、お礼を言いなさい・・・
・葉月？」

「ZZZZ・・・」

明久の膝の上で、いつの間にか葉月は眠っていた

「あはは。疲れちゃったみたいだね」

「明久が来たから嬉しくて、さらに膝の上に座れて安心したのかな」

「もう、葉月ってば・・・アキ、悪いけどこっちに来て貰える？」

「あ、うん。そうしたいんだけど・・・」

どうやら葉月は明久のシャツを握りしめたまま寝ているみたいで、明久が苦笑いを浮かべている

「こら葉月、起きなさい。アキが帰れないでしょ？」

葉月を起こそうと美波が肩を叩く

「んう・・・」

すると葉月は少しだけ目を開けて・・・

「帰っちゃ、嫌です・・・」

そう言っただけで更に強くシャツを握った

「葉月。あんまり我が儘言つと、お姉ちゃん怒るからね」

美波の口調が少しだけ強くなる・・・
どうやら優しくも厳しい姉をやっているみたいだ

「・・・お姉ちゃんには、わからないです・・・」

「え？なにが？」

「・・・お姉ちゃんは、いつも一緒に居られるから良いです・・・でも葉月は、こういう時しか、バ力なお兄ちゃんと一緒に居られないです」

寝ぼけているからこそ聞いた葉月の本音・・・
どうやら本気で明久を慕っているみたいだな・・・

「今のチビツ子の台詞を聞いたら、明久は残るべきだよな」

「明久、ここまで言われて、残らなきゃ男じゃねえよ」

「明久も隅に置けんのう」

「・・・人気者」

「う、うん、そうだね。美波、もしよかったら僕はもう少しここで勉強して行っても良いかな？」

「え？」

あたし以外はからかってるテンションだったけど、本人も悪い気はしないみたいだ

「そ、それじゃあ悪いけど、もう少し葉月に付き合っただけ貰える？」

「うん」

「あつ、あのつ、それなら私も・・・」

「え？姫路さんはダメだよ。女の子があまり遅い時間に出歩いちや危ないからね。雄二にでも送ってもらって早く帰らないと」

「でも、心配なんです。その、イロイロと・・・」

「瑞希、明久もあんたのことを心配して言ってんだから、その気持ちが無駄にしちゃダメだ」

「・・・はい」

残ろうとした瑞希を説得する

「じゃあ雄二か土屋、昨日と同じように瑞希を送ってくれ。美波、玄関まで見送りいい？」

「？いいけど・・・」

あたしが柄にも無く見送りを頼むと美波が首をかしげた後了承した

それから明久以外帰り支度を整え、玄関にて

昨日と同じようにあたしが最後に出る

「今日はあたしらの家に代わって場所を使わせてもらってありがとうね」

靴を履いて立ち上がって美波に話しかける

「それだけ言うために見送り頼んだの？別にいいのに、葉月がお世

話になったし・・・」

「それは明久に言っただけな。一番世話したのはあいつなんだから。それに葉月を気にかけるように明久も気にかければ瑞希に大差をつけられるかもしれんしな」

「どついうこと優紀子？」

「落ち着いて聞けよ・・・あたし昨日帰り際に玲さんに明久を異性として任せれるって言われたんだ・・・」

「え？ちよつとそれって?!」

美波が驚き、微妙に殺気が出してくる

「恋人としてって意味だろな・・・安心しな、あたしは秀吉がいるから断つたし、玲さんもそれを聞いて諦めてくれたから。それよりあたしに玲さんがそう言った理由わかるか？」

「昨日の姉としての会話？」

「そう。あんたも姉ならわかるだろ。弟がちゃんとした人と一緒になつて欲しいって・・・」

「・・・うん・・・」

少し間があつたけど姉妹じゃそういうの無いのかな？

「今日の美波・・・葉月ちゃんを心配したり厳しく叱ったり、ちゃんと姉をやってるって思ったからな、それを明久に真っ直ぐ向けて

やれば、玲さんが認めてくれて外堀が埋まるんじゃないか？」

「そ、そうね……」

「あとは暴力をやめればコロツと落ちるんじゃないか？ 試しに葉月ちゃんに怒る感じで明久に怒ってみたらどうだ？」

「それは……考えてみる」

真つ直ぐ明久に向かうのが怖いのか……少し前の秀吉と同じだな・

「じゃまた明日な……がんばれよ美波、同じ姉として応援するよ」

「ありがと優紀子、また明日」

そして玄関を出て……

「遅かったのう……何か話しとったのか？」

「ああ、姉同士秘密の話だ……」

「そうか、なら聞くまい」

さて明日から美波がどう変わるか楽しみだな……

54話

あれから数日・・・
今日から期末試験が始まる

美波の明久に対する接し方が変わってきた
暴力も振るうことも少ずつだけ減ってきて素直になろうと努力し
てるみたいだ

あたしのアドバイスを実行してくれてるんだろう・・・

「へえ、そんなことがあったんだ・・・」

「なるほどのう・・・それで島田は明久に優しくし始めたのか」

「まあそういうことだ。あんま言いふらすなよ。美波は今自分を変
えてる最中だからな・・・なにがどう影響するかわからないからな
せつかくいい方向に変わり始めたんだ。見守ってやるうじゃないか」

あたしはは秀吉と優子と登校している

玲さんとの会話や美波へのアドバイスのことを話している

「わかったのじゃ」

「それがいいわね。それにしても優紀子はよく姉って人種に気に入
られるわよね」

「姉キラーじゃな」

「そうか？」

「そうじゃろ。わしの姉上に明久の姉上、そして島田は葉月ちゃんの姉じゃからのう」

んー別に姉に気に入られるように意識はしてないんだけどな・・・

「む？あれは明久じゃのう？」

明久が少し前に路地から出てくる

「おーい明久ー！」

「ん？あつ優紀姉に秀吉、木下さんおはよう」

「おはよう吉井君」

「おはようじゃ明久」

「おはよう、ん？明久どうした？なんか悩んでるのか？」

明久の表情は少し影がある感じだった

「うん・・・優紀姉、ちよつといい？」

「え？ああ、いいけど・・・」

珍しく明久が真面目な顔で頼んできた

「じゃあ秀吉、スマンが優子と一緒に先に行ってくれ」

「うむ、わかつたのじゃ」

「それじゃあね、優紀子、吉井君」

そう言つて2人は先に行つた

「つでそんな真面目な顔してどうしたんだ？」

「前にさ・・・僕にとって優紀姉は頼りになる姉だろつて言つてたよね」

「ああ、言つてたな」

「ちよつと聞いて欲しいことがあるんだよね・・・」

明久の顔が少し赤くなる・・・
え・・・？ちよつ・・・

「そ、そうか、なんだ？」

ま、まさか・・・そんなあたしには秀吉が・・・
明久は顔をさらに赤らめながら・・・

「僕・・・好きなのかな・・・？美波のことが」

つと言つた・・・
・・・は？

「知らねえよ、んなもん！自分の事だろ！」

「だって！最近美波が僕に対して優しくなつて・・・そのせいか段々意識するようになって・・・美波を目で追つたり、うまく話せなくなつたり・・・」

明久が顔を真っ赤にしながら言う・・・
落ちるの早すぎだろ明久・・・本当にコロツと落ちたな・・・

「そうか・・・っであんたはどうしたいんだ？」

「それは・・・わからない」

「わからないってことはないだろ。告白するとか付き合いたいとかないのかよ？」

「告白・・・？付き合う・・・？うーん・・・」

明久は首をかしげて悩みだした

「あたしと秀吉みたいに想いを伝えて恋人同士になつたりしたくないのかってことだよ」

「でも本当に好きかわからないし、美波も僕のことどう思ってるか・・・」

こいつはこの期に及んでそんなことを・・・

「本当に好き・・・か。それは自分でゆっくり考えることだな。それはお前自身にしかわからないことだ」

「・・・うん」

「とりあえず、今は頭空っぽにして試験に集中してみな・・・どうやっても美波のことが頭から離れなかつたら好きになってるってことかもしれないぞ」

「そうだね・・・」

「じゃあここからは美波とお前、2人の友達として言うが、美波を泣かせたり、男として情けないことはするなよ」

「うん、わかった。絶対にしない」

「いい返事だ。じゃ行くか」

あたしらは話を終えて学校に向かった

416

数日後・・・

試験も終わり今日から2年生の試召戦争が解禁される
雄二もどうするか考えてるだろう・・・

ガラッ

「すみません、Dクラスのものなんですけど。代表の坂本君はいますか？」

そう言ってDクラスの男子が入って来る
何だ？

「Fクラス代表、坂本雄二だ。用件はなんだ？」

そう言いながらそのDクラス男子によっていく雄二
すると・・・

「僕達Dクラスは、Fクラスに対して試験召喚戦争を仕掛けます！」

『はあ？』

そんな言葉に対してクラス全員が思わず間の抜けた顔をする

「おいおい、いきなりだな」

「・・・これはDクラスの総意、というよりDクラスの男子全員とある女子の意味だ」

「Dクラスの男子と、ある女子だと？」

「ああ、開戦は10時からだ。すまないがこれ以上は言えない」

「そうか・・・」

そう言いながら顎に手を当て何かを考える雄二

「それじゃ、これで失礼するよ」

そう言って教室を出て行く男子生徒
これは・・・

「雄二・・・ある女子って・・・」

「まあ清水だろうな・・・」

「あたしへの報復かな？」

あたしは小声で雄二と話す

あたしに報復とかクラスが殺気立ちそうだから・・・

「どうだろうな・・・それだけならいいが・・・」

そう言つて雄二は周りに気付かれないように視線をある所に向けた
目に前にいたあたしはそれに気付いてその視線を追う
そこには明久と楽しそうに話す美波がいた

55話

「狭い道で数で戦え！」

そんな言葉が木霊する廊下。そしてそんな言葉を塗りつぶすように戦いの音が響きわたる

「近藤、戦死！」

「こつちでも2人逝った！」

「誰か援護を！」

理由もわからずいきなり仕掛けられた試召戦争
士気も上がらず押されている・・・
なぜかDクラスは男子しか攻めてこない

「それにしても、あたしへの逆恨みだけで試召戦争しかけるか？」

引っかかっていたことを思わず口にする・・・
そもそもあいつらが悪いんだからそんなこと言ったって女子が認めるとはとは思えんしな・・・
でもDクラスは男子が代表だから女子の反対を押し切ったのかな
だったら女子がボイコットして戦争に参加してないと考えれば辻褄が合う・・・

「優紀姉！」

明久が補給から帰ってきた

そして明久は空き教室に押し込まれていった・・・

「さて・・・じゃああたしは下らん逆恨みをするクソヤロウ共に天罰を下すか・・・サモン!」

Fクラス 坂本優紀子 数学 563

VS

Dクラス 男子生徒10人 数学 計1243

「お前が出てこなけりゃ俺達は停学にならずに済んだんだ!」

「Fクラスの癖にでしゃばりやがって!」

「ボコボコにしてやる」

Dクラスの奴らが口々に恨み言を言ってくる

「サシでやる度胸がねえからって10人がかりか?!情けねえなあおい!」

「なんだとっ?!」

「二度とそんな口利けなくしてやる!かかれ!」

10人がまとめてかかってきた

「美波下がつてる・・・サードモード!」

あたしは美波を下がらせ腕輪を起動しヘッドを巨大化させる

「だな・・・」

空き教室から明久の怒声が聞こえてきた
コッソリ中を見る・・・

『淫獣ごときに関係ありませんわ！お姉さまは美春の・・・私だけ
のお姉さまですわ！』

明久に返すように清水の怒声が飛ぶ・・・

『・・・清水さんと話して・・・今はつきりわかった・・・僕は美
波のことが好きだって・・・だから美波を物のように扱う君を絶対
許さない！！』

おいおい、ぶっちゃけたな・・・

『この淫獣言うに事欠いてお姉さまにそんな感情を・・・殺してや
る・・・死体も残さず殺してやりますわ！！』

清水はカッターを持って切りかかった
召喚獣じゃなくリアルファイトかよ・・・

「嘘・・・」

美波のほうを見ると顔が真っ赤で戸惑っていた・・・

「美波・・・あのさ・・・今の聞かなかったことにしてやれない？
あいつが自分で美波に言うまで待っててやってくれないか？」

「・・・うん」

「あいつも自分の気持ちが固まったみたいだし告白するのもそう遠くないだろ」

そして再び教室内を見るとまだ明久と清水が喧嘩をしていた

相手が刃物を持つてるし一応女だから明久も手を出しにくいのだろう

「流石にあれはやバそうだな・・・美波、鉄人呼んで。あたしが止める」

「わ、わかった」

そう言つて美波は走って呼びに言った

あたしは・・・

「オラアツ！！清水！！テメエの根性叩きなおしに来たぜ！！」

扉を蹴り飛ばし中に入る

「優紀姉？！」

「淫獣や豚共に影響された野蛮人が！あなたを先に殺してやりませわ！！」

清水があたしに向かってきた

「優紀姉！」

明久が叫ぶが、あたしは動かさずジッと清水を見る

「死になさい!!」

清水があたしの首めがけてカッターを突き出し・・・

「なめんじゃねええええええええ!!」

その手を取って一本背負いを決めた

「そんな曲がった根性と腐った意志であたしを殺せると思うな!!」

そう叫ぶが肝心の清水は受身もとれずに気絶していた

その後美波が呼んできた鉄人によって清水は拘束された

でも本気で首を狙ってくるとは思わなかったな・・・

殺人未遂・・・いや首には当たってないから傷害未遂か。あと暴行罪かな？

もうこれ学園でどうこうできる問題じゃなくね？立派な事件じゃん・・・

でもあたしの1件を考えるに、退学にはならんだろうな・・・となると1ヶ月くらい停学かな？

前回の停学からそんな日がたってないし10日とかは無いだろ・・・でも夏休み前だとどうなるんだろ・・・もしかしたら観察処分者とか・・・勘弁してくれ・・・

やるとしても別々の仕事にしてくれよ・・・

試召戦争の方は瑞希が代表を討ち取りFクラスの勝利に終わった

56話

Dクラス戦が終わり・・・

「ねえアキ・・・ちょっと今日ウチの家に来ない？」

「え？み、美波？急にどうしたのっ？！」

「いや・・・その・・・そう！葉月がね、アキに会いたいって！ホラ勉強会のときもあまり会えないって言ってたし・・・ダメ？」

2人して赤くなつて話してる・・・

美波は待ち切れ無いからさっさと告白させるために2人つきりになるうってことかな

妹をだしにするのはどうかと思つたが、まあ色々あつたし仕方ないか

426

「美波ちゃん！だったら私も行っていいですか？！」

瑞希が焦つて自分も行くと言つた

最近明久と美波の仲が進展していることに危機感を感じてるようだ

「い、いいけど・・・」

あーあ、まっ葉月が瑞希と会つのを嫌がるわけないし断れんわな・・・

次の日・・・

「結局戦争始めてしまったけど、どうする？このままAクラスまで突っ切るか？」

「うーん・・・そうだな・・・」

あたしと雄二は登校しながら今後のことを話している

昨日の戦争の戦後処理・・・設備の交換をするかしないか、しないならどういふ条件を飲ませるか・・・を実はまだしていない

「Dクラスとの戦後処理も期限としては今日中だし、Aクラスを狙うかどうか最終日まであんまり日が無いんだから早く決断しろよ」

「わかってる・・・おつ明久だ。なんであんなとこ突っ立ってるんだ？」

明久が前相談を受けたところに立っていた
あたしを待ってたようだな

「あつ優紀姉、雄二、おはよう」

「ああ、どうしたんだこんなとこに突っ立って・・・？」

「また相談か？明久」

「うん」

明久が真面目な顔で頷いた

「かなり真面目な相談みたいだから俺は先行くぞ」

「ああ雄二、悪いな」

「ありがとう雄二」

「気にするな」

雄二が先に行つて2人になる

「つで、明久・・・答えでも出たか？」

「うん・・・僕、美波の・・・」

「待て、あたしに告白どうする？本人に言つてやれよ」

「え？あ、うん、そ、そうだね」

明久が顔が赤くして焦る

「がんばれよ明久。姉貴分として、友達として応援してるからな」

「ありがとう優紀姉。でも弟として頼るのは卒業しないとね」

「そうだな・・・1人の男としてちゃんと美波のこと大切にしてくれよ」

「もちろんっ！」

「明久君、ちよつといいですか？話があるんです」

あたしと明久が教室に入って、すぐ瑞希が明久にそう言った
瑞希の顔には美波に負けたくないという強い意思と明久を取られる
という焦り、その2つが見て取れた

「う、うん・・・」

明久も勢いに負ける形で頷き2人で教室から出て行った

「優紀子・・・瑞希は・・・？」

「友達だからこそ絶対負けたくないってことだろう。告白でもする
んじゃないか？」

「そ、そんな・・・」

美波が焦りだす

「大丈夫だって・・・信じてやれよ、昨日の言葉を」

「うん・・・」

「少し可哀想かもしれないが瑞希はちゃんと立ち直るさ・・・あいつ
は見かけによらず強いからな」

「そうね・・・」

瑞希には少し悪いとは思っている・・・美波にだけ肩入れして・・・
でも明久と瑞希じゃやっぱり距離があるように感じるんだ・・・

「昨日家に呼んだとき、うまく明久に告白させるように誘導できたんじゃないか？」

「そんな卑怯なことしないわよ。ちゃんと自分の意思で告白してくれるまで待つわ」

乙女だねえ……

でもそれじゃなんで昨日家に呼んだんだよ……

その後明久だけ戻ってきて瑞希は1時間目が始まって戻ってこなかった

多分瑞希は……泣いてるんだろう

「さて……昨日のDクラス戦だが勝ったし設備を入れ替えようかと思う……だが入れ替えるのはBクラス戦をしてからにしようと思う」

昼休み……

クラスメイトにさっさと昼飯を食べるように言って作った時間で、雄二が昨日の戦争についてと今後の方針について発表する

瑞希は2時間目以降は授業に参加していたが、やっぱり泣いていたようで目が赤かった

「またBクラスと戦ってからAクラスと戦うの？」

「そうだ。しかし今回は戦う理由が全く違うからな。それについては後でちゃんと話す」

明久の質問に雄二が返す

「まずなぜDクラスが、なぜウチに仕掛けてきたかだが・・・」

「それはあたしへの逆恨みだそうだ」

『なんだと?!』

理由を聞かされるとクラス中から怒りが湧き上がる

「覗き騒動のとき、あたしが防衛隊に協力しなかったらAクラスもFクラスも協力しなかった・・・だからあたしがいなかったら覗きも成功して停学にもならなかったかもってことだろうな」

「今回はそんな身勝手極まりない理由で仕掛けられた戦争だ。容赦する必要は無い、だから設備を交換してバカどもに俺達に手を出すとどうなるか身を持ってわからせようってことだ」

まあDクラス女子は可哀想だけど、所詮は他クラスのことだ

「それとBクラスがどう関係するの？」

「わからないか、明久？Dクラスと同じでBクラスも男子が代表、しかも代表はあいつなんだ仕掛けてくるかもしれないぞ？いきなり仕掛けられて今回はDクラスだから勝てたがBクラスだったら勝てるかどうか・・・なら先に仕掛けるしかないだろ」

実際ほとんど押されてたからな・・・

「設備を交換してからだ前回と勝手が違うから、作戦を立てるのに時間がかかるからな・・・Bクラス戦もこの教室から攻め込むってことだ」

「それに防衛隊の戦友のAクラスにDやFクラスの設備をやるのも可哀想だしな。Bクラス設備を手土産に宣戦布告してやるうじやないか。全員わかったか？わかったら全員補給をしてBクラスに宣戦布告をするぞ！！」

『おおー』

57話

宣戦布告も済んで次の日……

「さて今回の作戦だが……前回のような奇襲に奇襲を重ねた方法は取らない。電撃戦で行く。まず主力メンバーを除いた全員が捨て身で突破口を開く、そこを姉貴と姫路、2名が通って一気に敵本陣を強襲、代表を討ち取る。主力メンバーは姉貴と姫路の突入をサポートしてくれ」

雄二が作戦を発表しクラスメイトの士気が徐々に上がっていく

「力を小出しにしたら勝てねえ！防御は捨てて！攻撃に徹し！一気に攻めて！負ける前に勝つ！攻撃こそが最大の防御だ！野郎共、しっかり死んで来い！！」

『うおおおおお！！！！』

「開戦だ！！」

朝9時、対Bクラス戦が始まる

「瑞希……大丈夫？」

「……はい」

突破口が開くまでの待機中にあたしは瑞希と話す

瑞希は昨日から少し暗い・・・流石にすぐに立ち直れないだろうけど、このままじゃ任務に支障が出てきそうだから・・・
今回の作戦の一番重要な部分を任されてるだけあって不安な事は極力無くしておきたい
最悪、あたしが単騎突入になつたとしても・・・

「何があつたか知らないけど・・・しっかりとしてくれよ。あたしらがこの戦いの鍵なんだ」

「そう・・・ですね」

「溜まつたもの吐き出すように話してみるのもありなんじゃないか？まあ無理にとは言わないが・・・」

「・・・」

瑞希は俯いて・・・

「昨日明久君に・・・告白したんです」

静かに語りだした

「美波ちゃんの家で勉強会をしてから・・・美波ちゃんの明久君への接し方が変わってきて・・・明久君もそんな美波ちゃんを意識し始めて・・・負けたくなかったんです・・・だから・・・」

「そう・・・がんばって勇気出して告白したんだね・・・」

「・・・でもダメでした・・・僕には好きな人がいて、その人を大切にすると誓ったからって・・・」

「そうか・・・あいつがそんなことを・・・」

「はい・・・私・・・振り分け試験で私のために抗議してくれたり・・・私のために試召戦争をやるうといっけてくれたり、学園祭で喫茶店をがんばってくれたり・・・そんな優しい明久君が好きでした・・・でも・・・でも・・・」

瑞希の目から涙が溢れてく・・・

「もういい・・・後は泣けるだけ泣きな・・・」

「うわああああん・・・」

瑞希が泣き出し、あたしがそつと抱き寄せて頭を撫でる・・・ちゃんと立ち直って・・・次の恋を見つげな・・・

「ありがとうございます優紀子さん・・・少しスッキリしました」

泣き止んだ瑞希の顔は、いつもの瑞希とまではいかないが話す前にあった暗さはなくなっていた

「姉貴に姫路、そろそろ出番だ、しっかり代表を討ち取れよ」

「はいっ！」

「任せろ！」

雄二にあたしと瑞希が力強く返事をした

「じゃ、今は振られた悲しみを怒りに変えて、Bクラスに怒りの鉄槌を振り下ろそうや!!」

「そうですね優紀子さん!!」

やる気満々で突入したあたしらを止めれる者は無く、楽々代表を討ち取った

2日後・・・

あたしらはBクラス設備で補給を受けた

Bクラスと戦後処理する前にDクラスと設備を入れ替えを行って今はBクラスはDクラス設備に、DクラスはFクラス設備になっている

「さて今日いよいよAクラスに宣戦布告をするんだが・・・」

「雄二、今回はどういうやり方でいくの?」

「今回も狙うは代表同士の一騎打ちだ」

「でも前と違ってBクラスやDクラスに攻め込ませることができないのに交渉を受けてくれるかな?」

明久の疑問も尤もだな・・・
まあなんとかなるだろ

Aクラス教室・・・

今回の宣戦布告はあたしがやる

「おーい優子。来たぞー」

「ええ優紀子わかってるわ、宣戦布告ね」

前も優子が交渉を受け持ってたし優子に言えば大丈夫だろ

「話が早くて助かるよ。それで今回も・・・」

「代表同士の一騎打ち、なんて言わないわよね。優紀子」

流石にわかるか・・・

「ダメか？優子」

「なんだかんだいって前回ギリギリまで追い込まれたし、みんなが納得するかどうか・・・」

「こつちとしてはBクラス設備手に入れたからCクラスとか攻めてきそうなんだよな・・・だからできれば前回のような感じでやりたいんだよな・・・それに」

一旦話を切り小声で・・・

「霧島を雄二と対戦させるには普通の戦争形式じゃ難しいんだ」

「え・・・？代表と坂本君を？」

「ああ・・・あいつまだ塞ぎ込んだままなんだろう？荒療治だが雄二と戦わせれば・・・」

「うーん・・・確かにそれは・・・」

「例え負けてもBクラス設備なんだ・・・頼むよ」

AクラスにとってBクラス設備になることより、他のクラスに負けただということが屈辱なんだろうけど

「はあ・・・わかったわよ・・・じゃあ今回は少し増やして7対7で、さらに勝ち抜き戦で全滅させた方の勝ちってことでどう？科目の選択権は最初はあげるわ。2戦目からは負けた側によって感じていいわね」

前回よりも難易度は高そうだな

学年次席レベルの瑞希でも同科目で連戦に持ち込まれると負けるだろうからすんなりとはいきそうにないな・・・でもここが落としどころか・・・

「ああじゃあ最初に代表同士でお願いできるか？」

「ええ、なんとか説得するわ」

優子には苦勞をかけるな・・・

58話

翌日・・・

Aクラス教室

「それではFクラス対Aクラス試召戦争を始めます。今回も前回同様両クラス同意の上で特別ルールで行われます。よろしいですね？」

立会いの高橋先生がAクラスとFクラス両陣営に確認を取る

「ああ、問題無い」

「こちらも問題ありません」

Fクラスは代表の雄二が、Aクラスは優子が答えた

霧島は他の生徒の後ろに隠れてるのかまだ姿を現さない

「では両クラス1人目の対戦者を出してください」

Fクラス陣営から雄二が出て行く

「翔子・・・出て来い。俺と勝負だ」

雄二が霧島を呼ぶ

「・・・？」

霧島がおずおずと出てくる

いきなり代表同士の対決に困惑気味のような

「この勝負・・・俺が勝ったら前の戦争の約束を無効にしてもらおう」

「・・・え？」

「つまり・・・勝ったら俺と別れる、翔子」

今も別れてるのと同じ状況なただけだな
これで雄二が勝ったら完璧に関係が切れる

「本気で来いよ翔子・・・俺は前とは違うからな」

「・・・」

煽る雄二に無言の霧島・・・

「対戦方法はどうしますか？」

高橋先生が対戦方法を聞いてくる

この試合の科目の選択権はこっちにある

「前と同じ日本史の小学生レベル、100点の上限ありだ」

雄二がそう言うのと両陣営がざわつく・・・

まさか同じ方法で来るとは思わなかったのだろう

「わかりました。それでは問題を用意しますので、このまま待っていてください」

高橋先生がAクラス教室から出て行く

「雄二・・・しっかりな」

「ああ、任せろ」

「前みたいなことになったら殴るからね、雄二」

「わかってるさ・・・絶対勝つ」

あたしと明久が拳を突き出し、それに雄二も拳を突合せる

『では、日本史テストを行います。制限時間は50分、満点は100点です』

前回同様テストをしている視聴覚室の様子はAクラスの巨大プラズマディスプレイに映し出され、他の面々はそれを見ながら待機

『不正行為などは即失格になります。良いですね？』

『・・・はい』

『わかってるぞ』

『では、始めてください』

そして試合が始まる

1回目 日本史勝負 限定テスト 100点満点

Aクラス 霧島翔子 100点

VS

Fクラス 坂本雄二 100点

今回テストの問題にあの問題は無かった
だから当たり前っっちゃ当たり前だな・・・

「同点だと?!」

「いや小学生レベルだから当たり前だが・・・」

「坂本も本気を出してきたってことか・・・」

両陣営から声上がる

「同点でしたが勝負はどうしますか」

ディスプレイの向こうの高橋先生が雄二達の聞く

「もちろん付くまでだ」

「わかりました。ではまた問題を用意してきます」

そう言って高橋先生が視聴覚室から出て行く

『どうだ翔子。前の俺とは違うだろ。俺は本気で勝つぞ』

『・・・雄二・・・そこまでして私と別れたいの?』

『ああ、別れたいな、姉貴に怒られたくらいで、へこたれるような軟弱なお前なんかな・・・嫌いだよ』

雄二が最後の部分を強調して言う

『?!』

雄二の言葉に霧島の目に涙が浮かぶ

『前はいくら姉貴が言っても聞かなかつた癖に・・・俺はその根性・・・それなりに評価してたんだぜ』

雄二が照れくさそうに言う・・・ディスプレイに映ってて、みんなが見てるって事忘れてないか？

『そりゃ姉貴はキツイことを言ったかもしれんが、そんなんでへこたれるような根性無しだったとはな・・・がっかりだ』

『・・・』

それから高橋先生が問題を持ってくるまで沈黙が続いた
その沈黙はディスプレイを見ていたこっち側にまで及んだ

2回目 日本史勝負 限定テスト 100点満点

Aクラス 霧島翔子 100点

V S

Fクラス 坂本雄二 100点

2回目も同点だった

まだあの問題は出てこない
雄二も霧島のああ言った手前負けるわけにはいかない
そして3回目……

「出た……」

() 年 大化の改新

さあ……お前はどつする?!霧島!!

ディスプレイに映る霧島は少し悩んでいるようだった

3回目 日本史勝負 限定テスト 100点満点

Aクラス 霧島翔子 97点

VS

Fクラス 坂本雄二 100点

『うおおおおおおお!坂本が勝ったぞー!』

『そんな代表が……もうダメだ……』

Fクラス陣営から歓声が上がリ、Aクラス陣営の数人がガクツと膝を付いて言った

『それじゃ、俺が勝ったから言ったとおり、俺とお前は今からただの幼馴染だ』

ディスプレイにはまだ雄二と霧島が映っている
座ったまま俯く霧島に雄二が話しかける

『・・・わか・・・った・・・』

雄二の言葉を聞いて霧島の目から涙が落ちる

『今度は真っ直ぐ正面から告白してくるんだな』

顔を真っ赤にした雄二が霧島の頭に手を乗せて言った

『・・・え？雄二？』

『じゃ、じゃあ戻るぞ！』

『・・・うんっ』

「すごい試合だったのじゃ・・・」

「ああ、いい試合だった・・・」

あたしと秀吉が話す

「霧島もあれで立ち直ったじゃろっし、これから大変そうじゃのう
優紀子」

「そうだな・・・でもあたしから雄二を奪うぐらい気合がなきゃあ
たしは認めてやんねえよ」

「相変わらず手厳しいのう」

「姉ってのはそついうもんなんだよ」

そう話していると雄二が戻ってきた

「うまくやったな雄二」

「ここまでお膳立てしていただいて姉貴もよく言つよ」

「それについては、まあ姉をなめるなつてことだ」

「そつかい」

雄二が呆れたように肩を落とした

「さて、みんな聞けえ！雄二が学年主席を落としたんだ！！絶対勝つてAクラス設備を取るぞ！！」

『うおおおおおおお！！！！！！』

最終話

学年主席の敗北・・・

Aクラスの人達はショックがかなり大きかったようだ

3度のテストで集中力を使い果たした雄二は次の試合で佐藤に負けたが、2番手の瑞希が佐藤と久保を含む4人倒し、その後愛子が保健体育で瑞希を倒し、その愛子を土屋が同じ保健体育で倒し、土屋は優子に負けて、あたしが優子に勝った

あたしと優子の試合も雄二と霧島の試合に劣らず激戦になった

あたしらはAクラスに勝った

Aクラスの設備を手に入れ、下克上を達成した

あれから数ヶ月・・・

あれから2回Aクラスには仕掛けられたが何とか勝ち続け、Fクラスあたしの勝ちが偶然じゃないことを証明した

あの試合の後、みんなは・・・

雄二が完全フリーになったことから、優子が少しずつアプローチを始めた

でも霧島も雄二に言われたとおり真っ直ぐアプローチしているので少し前の明久の状態だ

明久は夏休み中に美波に告白して付き合い始めた

でも葉月はまだ諦めてないらしく、姉妹で明久を取り合っているとか
瑞希はまだ新しい恋を見つけてないみたいだが、最近久保と仲良
く話しているって噂を聞く

なんでも久保も明久が好きだったらしく、振られた者同士だからこ
そ話せることもあるのかもしれないな

あとは・・・土屋と愛子が保健体育が得意な者同士良いライバル関
係って感じだな

もっとも、愛子は土屋と違う関係に発展したいみたいだが

あたしは・・・

「秀吉、今日は何の日でしょう?」

「2月14日か・・・バレンタインじゃな」

「正解。はい、これ」

「ありがとうなのじゃ優紀子」

「開けてみて」

「うむ、わかったぞい・・・ん?これは・・・」

「お返し期待してるからね、秀吉」

「う、うむ・・・が、がんばるのじゃ・・・」

秀吉だんなと一緒に楽しく過ごしてる

何をあげたかって？秘密だよ

3月・・・振り分け試験前日

「姉貴、話ってなんだ？」

「雄二、下克上第2章やらないか？」

「姉貴、それって・・・」

「もう秀吉に明久と美波、あと瑞希も土屋も、さらに優子や愛子にも声かけてるんだ。振り分け試験は1回勝負、不参加も途中退室も0点扱い。それを逆手にとって最強のFクラスを結成する。1週間でEクラスからAクラスまで全部落として・・・そしてあたしらは伝説になってな。どうだ、乗るか？何なら霧島にも声をかけるぞ？」

「ふっ・・・姉貴は恐ろしいことを考えるな・・・」

「乗らないのか？」

「もちろん乗るに決まってるだろ。そんな楽しそうなこと俺抜きでなんかやらせるかよ」

END

あとがき

姉御とテストと召喚獣を読んで頂き、ありがとうございました

色々気になるところはあるかと思うますがこれで完結です

オカルト編が無い理由は原作読んだことが無いからわからないって言うのと優紀子の召喚獣が何になるのかとか、本質？とかもよくわからないからです。妖怪とかわかんないし・・・

他の作品でやってないことをやろうと思って、優紀子は最初少女漫画のような逆ハーレムにさせようかと考えてました。でも秀吉が相手役で主人公をしつかり支えてくれるっていうのもいいなと思ってこうなりました。Bクラス戦で明久が優紀子にホレそう？って聞いたのは、その名残です

他には・・・

・雄二の家族で書いてる作品は見ないから雄二の家族で、さらに妹キャラは多いのに姉キャラは少ないから双子の姉という位置に
・カップリング面は明久と美波がくつつく作品も見ないのでこの組み合わせで、さらに雄二と優子にフラグを立てました。姫路と久保はおまけです

・雄二と翔子について雄二が不幸にならないように翔子が変わるように仕向けさせる。しかも実力行使で

・・・って感じですかね。他にも細かいところで色々ありますけど

書き手になるのは初めてで、たまに書きたい場面が浮かんでもそれ

をどう表現するか悩んでこんな感じになりました

浮かんだ場面は・・・

- ・ 主人公がBクラス戦の壁抜きをする
- ・ 清涼祭打ち上げの秀吉視点の回
- ・ 秀吉に指輪をあげるところ
- ・ 合宿で翔子を押さえつけて尋問く清水への制裁を秀吉が止めるところまで

- ・ 召喚獣補完計画の明久気絶く雄二と優子のフラグが建った辺りまで
- ・ 期末試験編で玲さんとの会話
- ・ 明久が美波への想いをぶっちゃけるシーン
- ・・・くらいかな

これなら自分のほうがうまく書けるって方、書き直してもいいですよ。それ読んで勉強したいし・・・

・・・嘘ですごめんなさいやめてください立ち直れなくなりそうです

では次回作があればそこでお会いしましょう
期待0で待っていてください

あとがき（後書き）

最後の最後でPV10万UA1万いきました
ありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2088r/>

姉御とテストと召喚獣

2011年5月25日19時46分発行